快感原則の彼岸

フロイド 著
久保良英 訳

ARS

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說「精神分析」とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奧の眞を示す新しき哲學である。

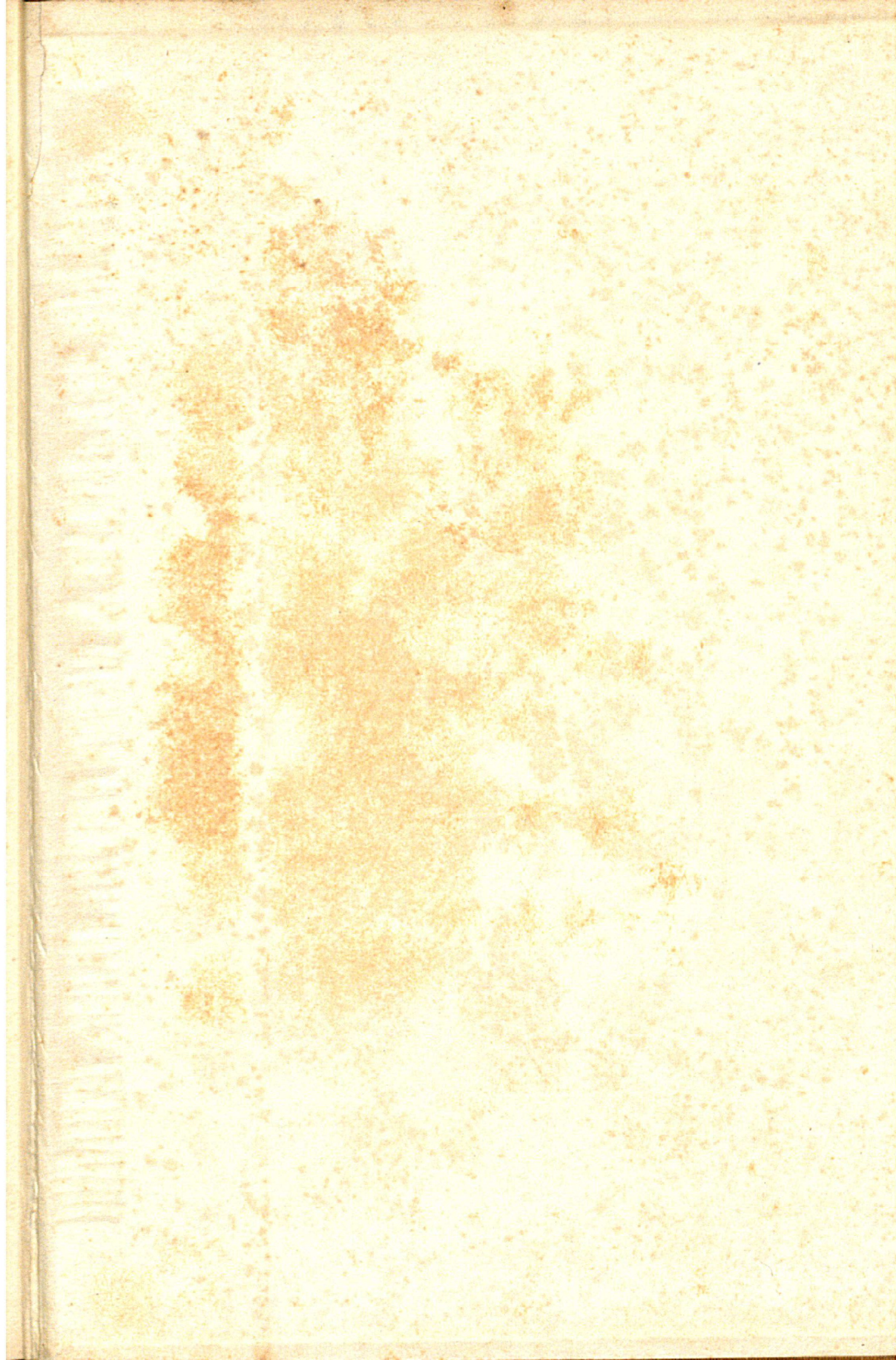
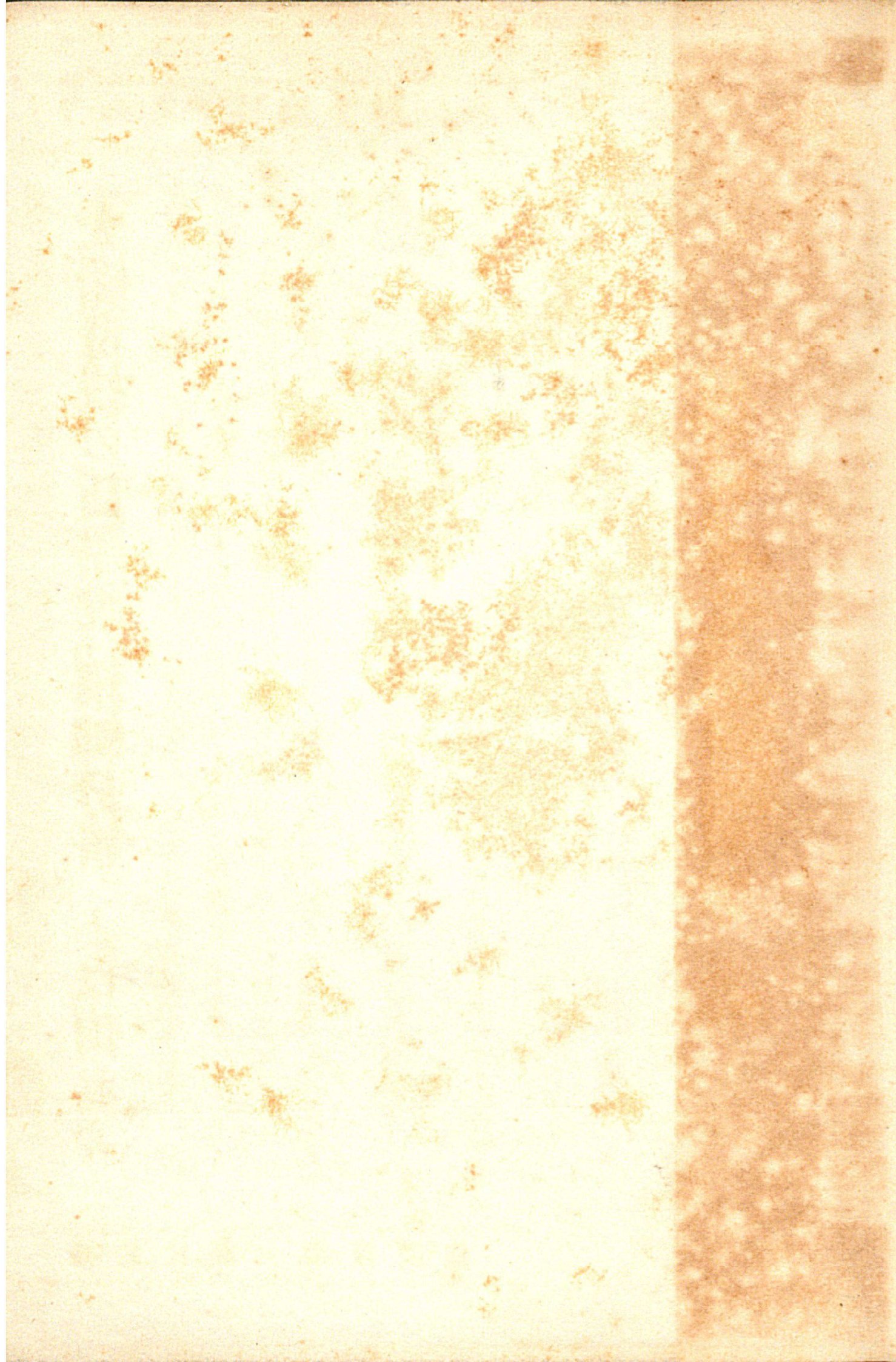
こは……勃起恐怖、中絕性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

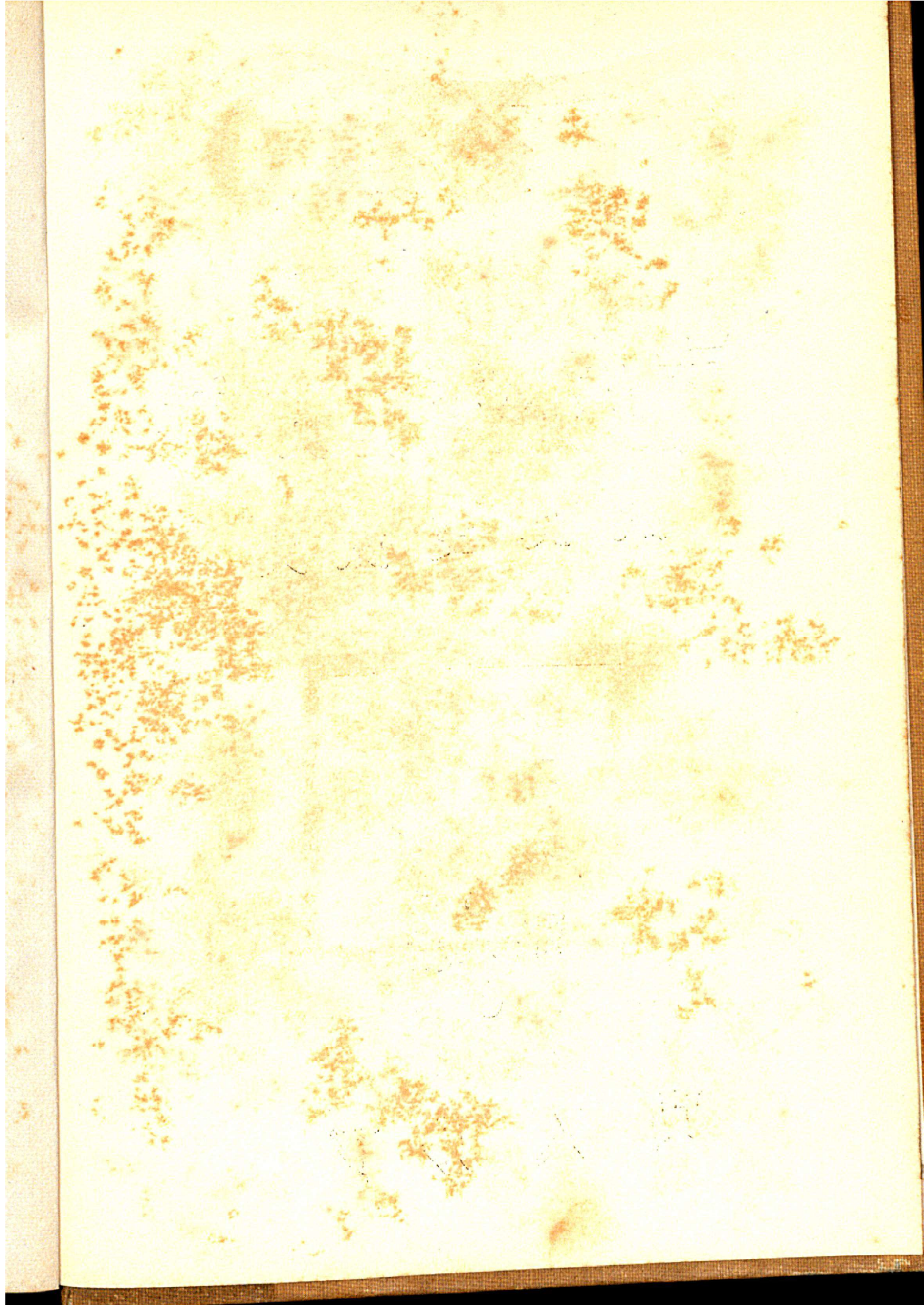
Freud

Jenseits des Lustprinzips

Freud

快感原則の彼岸

久保良英訳

フロイド
精神分
析大系
6

アルス刊

譯者序

最初の譯「快の原理を越えて」Jenseits des Lustprinzips は千九百二十年に公にされたもので、フロイドの學說に一轉機を劃したものと言つてよい。これまでの夢の解釋や、日常生活に於ける種々の誤謬、その他の論文に用ひられて居た欲求實現の原理は、一層深く掘下げられて、自我の分析にまで進んで來た。卽ち在來の快の原理によりて說明し難い神祕境を開拓して、生と死の葛藤を明かにし、自我はエロスによりて生命を維持せんとするが、他方に破壞衝動によりて死の方に進まんとするものである。かやうに自我は死によりて最初の出發點たる無生物へ復歸せんとし、それを妨害するものがエロスである。しかし尙考慮を深めて行くと、この二種の對立する衝動は、質的相違を有するものでなく、單に部位的相違を有するに過ぎないで、いづれも自我の欲求實現に外ならない。かくして汎性慾說の內容は深化したと同時に、一種の自我實現說に變化したかの如き觀がある。

第二の譯「集團心理學と自我の分析」Massenpsychologie und Ich-Analyse は千九百二十一

年に公にされ、自我とエロスとの關係から集團精神の心理を述べて居る。卽ち自己愛と對象愛とに表はれる性的衝動の進化や退行を檢討して、集團、殊に敎會や軍隊の如き人爲的集團の結合がこの性的衝動にその起原を有することを明にして居る。而して一方には群衆心理又は社會心理に於ける權威者ルボンやマクヂューガル等の學說が表面的で、少しも集團精神の基流に觸れて居らず、殊に集團の指揮者に對する愛を無視したことを强調して居る。而してこの種の愛は有史前の原始的父に對する愛の遺物で、今日に於ても尙その威力を推持して居るとする。かの催眠現象の如きも集團現象と同一の原理の下に取扱はれ、暗示作用は凡てこの種の愛から生じたものであるとし、更に戰爭神經症もこの種の愛の結合が斷たれた爲に起るとして、集團、催眠、神經症、戀愛との關聯を論じて居る。

第三の譯「自我とエス」Das Ich und das Es. は千九百二十三年に公にされたもので、これは「快の原理を越えて」の中に表はれたエロス及び死の衝動を更に深く檢討して自我に於ける一新境地を開拓して居る。卽ち人生そのものは、この二種の衝動の間の爭鬪と妥協であるとし、それ等を說明するために新にエスの概念を設立した。精神を自我、超自我(自我理想)、エスとに分

類し、それ等の間の動的關係を巧に論じて、强迫神經症や欝憂症の症狀を明かにし、罪惡の感や死の恐怖の起原に論及して居る。かくして心の奥祕に活躍する凡ての作用は闡明され、玆に全く超心理學の根本原理が確立するに至つたのである。

從つてフロイドの學說の進展を知らんとするには、必ずこの三書を通讀しなければならぬ。しかしこの三書とも極めて難解のものであるから、豫備知識なくして直ちに本書を播いては、その眞意を捉へるのに困難である。故に先づ本叢書中の「精神分析入門」によりて斯學の大綱を知つた後に、本書を讀まれんことを希望する。

第四の譯「精神分析の興味」(Das Interesse an der Psychoanalyse.) は、心理學、言語學、哲學、生物學、進化論、文化史、美學、社會學、教育學等に對し、精神分析が如何なる關係を有するかを略述したもので、精神分析學の硏究と原理とが、如何に豐富なものであり、廣汎なものであるかを知るに都合のよい論文である。本論文は千九百十三年の著作であるから、前記三種の論文よりも遙か以前のものである。これを本書の卷末に附することは少しく妥當を欠くが、頁數の關係上玆に集錄することになつた。

本書の譯はドイツの原文によつたのであるが、最初の三論文は英譯が刊行されて居る。それでその方は英譯をも參酌し、表現の仕方が原文よりも英文の方が日本語に近い時は、英譯によることにした。術語の譯語は他の叢書と一致すべきであるが、その餘裕なく、遺憾ながら、私だけの考へによりて譯してしまつた。これは他の叢書が全部出版されてから統一したいと思つて居る。

昭和五年八月

目次

自我とエス

精神分析の興味

快の原理を越えて

一

心的過程の進みが快の原理によりて自動的に支配されるといふことは、精神分析の原理に於ては何等疑ひもないこととして認められて居る。換言すれば心的過程は不快に滿ちた緊張によりて生起し、それの方向は結局緊張の減少、卽ち不快を避け快を生ずる如き道を取る。心的過程がかやうな進みを取ると考へることは、吾人の研究に經濟的見地を取入れることになる。局所的竝に動的要素のみならず、經濟的要素をも尊重する叙述は、今日吾人が考へ得るものの中で最も完全なものであるといふべきで、それは超心理學的（metapsychologisch）の名稱によりて區別される價値を有する。

此の原理の主張が、歷史的に建設された一定の哲學系統に、どれだけ近寄つて居るか、或はどれだけ哲學系統を採用して居るかを吟味することに吾人は興味を有しない。吾人が日常觀察する領域の中にある事實を叙述し、說明することの努力によりて、かやうな思索的假設に到達したの

である。優先權とか新機軸とかを目的として精神分析の作業をするのでない。この原理の主張の根柢をなす印象は看過することの出來ない位に明白である。他方に吾人に對し有力に働く快と不快の感の意味を知らしめ得る如き哲學又は心理學の學說があれば、吾人はそれ等に對して大に感謝すべきであるが、遺憾なことには茲に使用すべき何等の學說も吾人は與へられて居ない。尤もこれ等の部分は精神生活の中で最も暗黑であり、且つ最も入り込み難い領域である。しかし吾人はそれ等の部分に觸れることを避けることが出來ないので、最も都合のよい假說を用ひて說明することが最良の方法であるやうに思はれる。吾人は快と不快とを心的生活中に存在する興奮の量に關係せしめて考察するやうに決定して居る。卽ちこの興奮の量は局限されて居ないで、不快はその量の增加に相當し、快はその量の減少に相應すと考へる。しかしこの場合に、感情の强度とそれに相應する變化との間に存する單純なる關係を考へるのでない。少くとも精神生理學の經驗に從つて、それ等の間に存在する直接の比例に就て考へるものでなく、恐らく、一定の場合に於ける興奮の減少又は增加の量が感情の決定的成分であると考へる。尤もこの場合に實驗を行ふ餘地があるかも知れない。しかし分析學者に取りては、全く確實なる觀察によりて指導され得るま

では、これ等の問題に深く入り込むことは妥當でない。

しかしフェヒネル(G. Th. Fechner)のやうな深く觀察をした研究者が、精神分析的研究によりて達した考へと主要點に於て一致する快と不快の概念を主張することを發見する時に、吾人はその主張に對し無頓着たることが出來ない。フェヒネルの主張は「有機體の發生及び發達の歷史に就ての二三の見解」(千八百七十三年)といふ氏の短い論文に表れて居るが、その中に次の如く述べて居る。「意識的衝動が常に快又は不快と關係して居るといふ限りに於て、快又は不快は精神物理的關係に於ける安定及び不安定の狀態として考へられる。而して私が他の處に於て發達せしむべく企てた假設がこの場合に成立するかも知れない。即ち意識閾以上に登る精神物理的運動が、一定の限界を越えて完全なる安定狀態に近よる時に、その割合を以て快を生じ、一定の限界以上に安定狀態から離れる時に、その割合に應じて不快を生ずる。而して不快又は快の質的閾として示さるべき二つの限界の中間は美的無關係の領域である」。

心的生活に於ける快の原理の主權を信ずるやうに吾人を導いた事實は次の假說の中に表れて居る。即ち心的裝置の企としてその中に存在する興奮の量を出來るだけ減少し、或は、尠くとも不

變に維持せんと努むるものである。この假説は快の原理を形式を變へていつたに過ぎない。何となれば若し心的裝置が興奮の量を減少するやうに働くならば、それを增加せんと企てるものは、その機能に對して反對せるものとして、卽ち不快と稱へられるものを感じなければならぬ。快の原理は不變原理(Konstanzprinzip)から推論される。實に不變原理は、快の原理の假定を必要ならしめた事實から推論されたのである。尙一層詳しく議論すると、吾人の假定した心的機能の方面に於けるこの傾向は、フェヒネルが快感と不快感とに關係せしめた安定への傾向(Tendenz zur Stabilität)の原理の特殊の場合として分類することが出來ることを發見するであらう。

しかしその場合に心的過程の進みの上に快の原理の主權を言ふことは嚴密に正當でないと言はなければならぬ。若しかかる場合が存在すとすれば、吾人の心的過程の大多數は、必然的に快によりて伴はれ、又はそれに導かれるであらう。然るに最も普通の經驗はこの結論に強く反對して居る。吾人は只快の原理への強い傾向が精神の中に存在するといふことは出來るが、しかし最後の結果は常に快の傾向と一致することの出來ない位に、他の力又は條件が快の原理に反對して居る。フェヒネルは同一の關係に就て次の如き註釋を述べて居る。「目標に向ふ傾向はそれに到達す

ることを意味しない。一般に目標は近寄られ得るのみである」と。若し快の原理を有效に遂行することを妨げる力は、如何なる場合に存在するかの問題を取扱ふならば、吾人は一層安全に且つ既知の地面の上を歩むやうになるであらう。而してその問題の解決として吾人は多くの分析的經驗を使用することが出來る。

快の原理を妨げる第一の場合は、それが正規的に生ずるものであることを吾人は熟知して居る。快の原理が心的裝置の一次的作業樣式に順應すること、竝に外界の困難の中に有機體を保存するには、その原理が最初から無用であり且つ非常に危險であることを吾人は知つて居る。自我の自己保存の衝動の影響の爲に、それは現實の原理（Realitätprinzip）に置換へられる。この現實の原理は、最後に快に達することの志向を棄てないが、滿足を延期し、滿足の種々の可能を廢棄し、快への長い廻り路に於ける不快を一時忍ぶことを要求し强行する。しかし快の原理は容易に教育し難い性の衝動を働かせる方法を永い間固執する。而して快の原理は性の衝動によりて働くか、或は自我その者の中に働くか、何れにしても全有機體に有害になる位に、現實の原理を威壓することが屢々である。

同時に又快の原理が現實の原理によりて置換へられることは不快の經驗の一小部分に限られて居りて、最も烈しき不快の經驗に於ては、この置換が行はれて居ないといふことは明白である。他の正規の不快の源泉は、自我が一層高く綜合された組織に發達する際に心的裝置の中に生ずる軋轢と分裂とである。心的裝置を滿して居る殆ど凡てのエネルギーは先天的衝動から來る。しかしこの衝動の凡ては同一の階段に發達することを許されない。途中に於て、特殊の衝動又はそれの一部が、その目的又は要求に於て、自我の包括的統一に統合する他の衝動と兩立し得ない場合が屢々ある。從つてそれ等の衝動は抑壓（Verdrängung）作用を被りて、この統一から分裂し、心的發達の低い階段に保留される。而して暫くの間凡ての滿足の可能から切離されて居る。かの抑壓された性的衝動に見る如く、それ等の衝動が廻路を通りて直接的又は補償的滿足を得ることに成功すれば、その成功は他の場合では快を持來たすかも知れないが、この場合には自我によりて不快と感ぜられる。抑壓に終つた古い軋轢の結果として、快の原理は破壞されるが、恰度その瞬間には一定の衝動が快の原理に從つて新しい快を得んと働いて居る。抑壓によりて快の可能が不快の源泉に變化することの過程の一々に就てはこれまで十分に理解されて居らず、又明白に說

明することも出來ない。しかし凡ての神經症的不快がこの種類に屬することは確實で、その不快は快として經驗することの出來ない快である。*

* 意識的感情としての快と不快とが自我に結びついて居るといふことは重要なことである。

玆に述べた不快の二つの源泉は吾人の不快の經驗の大多數のものを包括して居ない。しかしその殘りの不快に就ては、快の原理の主權の存在に反對しないと言ふことを正當に主張することが出來る。吾人の經驗する大多數の不快は、知覺的不快で、滿足されなかつた衝動の熱求か又は外界に於ける事物の知覺に關する不快である。而してそれ等の知覺はそれ自身に不快であることもあり、或は心的裝置に於て不快の豫想を生じ、危險のものとして認知されることもある。これ等の衝動の要求竝に危險の威嚇に對する反應、卽ち心的裝置の眞の活動によりて示される反應は快の原理によりて、或はそれの原理を變化する現實の原理によりて正當に導かれることが出來る。從つて快の原理に就てこれ以上の限界を認知する必要はないやうに見ゆる。しかし玆に取扱ふ問題に關する新しい材料と新しい疑問とを供給する外界の危險に對する心的反應を研究するには、快の原理の範圍を擴げる必要がある。

二

烈しき機械的震盪（Erschütterung）汽車の衝突、その他生命の危險を伴ふ出來事の後には、或狀態が生ずるものである。これは、永い間知られて居たことで、外傷性神經症（traumatische Neurose）の名稱が與へられて居る。恐るべき大戰爭が多數のかやうな病氣を引起したが、それは研究の結果、機械力の作用によりて神經系統に有機的傷害を生じたことに基くとされた。この外傷性神經症の症狀は類似の運動神經症狀の豐富なことに於て、ヒステリーの症狀に近いが、しかしヒポコンドリー又は鬱憂症に見る如き主觀的苦惱が强く表れる點に於ては、ヒステリーよりも通常優つて居り、尙心的機能が總括的に一般的薄弱と、錯亂とを來たして居る證據に於て、ヒステリーに優つて居る。戰爭神經症も又平和の際の外傷性神經症も、これまで十分に理解されて居ない。戰爭神經症に就ては幾分の光明を齎したものもあるが、しかし他方に大なる機械力によらなくても同一形式の病氣が屢々起り得るといふ事實の發見によりて再び問題が曖昧になつて來

た。外傷性神經症には尙多くの考慮を要する二つの著しき樣式がある。第一は主なる原因が驚愕の成分や恐怖に存するやうに見える點と、第二は同時に被つた身體上の傷害が神經症の生起を防ぐ傾向があるといふ點である。驚愕（Schreck）恐怖（Furcht）憂慮（Angst）は、これまで同じ意味のやうに誤つて用ひられて居るが、危險に對するそれ等の語の關係に就ては明瞭なる區別がある。憂慮は危險が假令未知のものであつても、その危險の豫期及びそれに對して準備する一定の狀態である。恐怖は恐るべき一定の對象の存在することを必要とする。驚愕は準備なくして危險に遭遇する時に表るる狀態で、不意の要素を强調した名稱である。私の意見からいへば、憂慮は外傷性神經症を生ずることは出來ない。憂慮は驚愕を保護するもので、從つて、驚愕神經症（Schreckneurose）にかからぬやうに擁護する。この疾病に就ては後に述べることにする。

夢の研究は、一層深い心的過程の探究に近よる最も信賴すべき道である。外傷性神經症にかかれるものの夢は特殊的のもので、絕えず患者をしてこの疾患を引起した危險の狀態に歸らしめ、彼は新な恐怖を以て夢から覺めるのである。この事實を世人は餘り不思議と思はなかつた。外傷的經驗を引起した印象が睡眠の際でも患者に屢々闖入してくることは、單にその印象の强い證據

であると考へられた。患者は外傷に對し所謂心的固執をする。疾病を持來たした經驗にかやうに固執することは、長い間ヒステリーの場合に知られて居た。千八百九十三年にブロイエル（Breuer）とフロイドとは、ヒステリー患者が主として回想（Reminiszenz）から苦しめられることを公にした。戰爭神經症に於て、フェレンチ(Ferenczi)とジンメル（Simmel）の如き觀察者は運動障害の多數の症狀を外傷の成分の固執によつて說明することが出來た。

しかし外傷的神經症にかかれる患者が覺醒時に於て、彼等の經驗した災害の回想を以て占領されるといふことを私は知らない。寧ろ彼等はその災害を考へないやうに努力するであらう。夜の夢は病氣を引起した狀態に引戻すといふことを自明のものとして認めることは、夢の本質を誤解することになる。彼の健康の時の像や希望せる恢復時の像が睡眠中に表れることが、却つて夢の本質に遙かに相應するやうである。この災害神經症者（Unfallsneurotiker）の夢よりして、それは夢の欲望實現の傾向に反する如く吾人が誤解してはならないとすれば、この場合に於ても、夢の機能は他の場合と同じく混亂して、夢の普通の目的から外れると推定するか、又は自我の謎の如きマソヒズム的傾向の考へを玆に持つてこなければならぬ。

私は今外傷性神經症の不明瞭な且つ憂鬱な問題を後に殘して、心的過程がそれの最も早い時代に正常の活動を示したものの一つを研究しようと思ふ。それは卽ち子供の遊戲のことである。
兒童の遊戲に關する種々の原理は近頃雜誌イマゴー(Imago, Bd, V.)の中にプファイファー(S. Pfeifer)によりて集められ、且つそれ等の分析的價値が評價された。それ等の原理は子供の遊戲の動機を推定することに努めて居るが、しかし經濟的見地、卽ち快の獲得に就ての考察に特に力を用ゆることをしなかつた。私はこれ等の現象の包括的研究を企てないで、一歲半の子供によりて工夫された彼の最初の遊戲をこの機會に說明しよう。それは單に偶然の觀察のみではなかつた。蓋し私は數週間その子供と彼の兩親と同じ家に住み、彼の謎の如き且つ絕えず反復する行動が明白になるまで、相當の時日を要したからである。
その子供は知的發達に於て決して早熟ではなかつた。一歲半で明白に理解される言語は二三に過ぎないで、その他は彼の周圍のものだけに理解される雜多の有意味の音を發した。しかし彼の兩親や下女に對する關係は良好で、端正な性格を持つとして賞められて居た。夜間兩親を困らせることもなく、種々の事物に觸れてはならぬとか、一定の室に行つてはならぬとかの命令に忠實

に從つた。殊に母親には愛着を有して居たに拘らず、母親が數時間出かけて、彼を殘して置く時でも泣くことはない。彼は母親の乳を飲んだばかりでなく、他人の助けを借りることなく、母親の手一つで面倒を見て育てられた。しかし時々彼が持ち得る凡ての小さな事物を室の隅や床の下に投込むといふ厄介な習慣があつて、彼の玩具を片づけることは容易な仕事でない位であつた。彼はこのことを興味と滿足の表情を以て行ひ、長く引張つた o—o—o—o の音を發した。母親の判斷によると、それは間投詞でなく、「あつちへ行け」(Fort)を意味する。私もさやうに考へる。遂に私はこれは一の遊戯で、留守遊び(fortsein)をするために、凡ての玩具を用ひたことを知つた。一日私は自分の考へを確める觀察をした。その子供は絲の卷いてある木製の絲卷を持つて居た。それを以て床の上を引きずつて行き、馬と車との遊びをするのでもなく、絲の端を持ちながら寢臺の側から、巧みに投げて絲卷が見えないやうにし、o—o—o—oと言ひ、更に絲をたぐつてその絲卷を寢臺の所から引上げ、それが見えると、「そこに」(Da)と喜んで叫んだ。故にこれは不在と再會の完全な遊戯で、只最初の行爲のみが一般に觀察されたのである。子供は倦むことなく、その遊戯を反復したがそれの後半の行爲に一層大なる愉快を感じたことは勿論で

ある。*

＊その後の觀察によりて、この解釋は十分に確められた。ある日母が數時間外出して歸つて來た處が、子供は「坊や、オーオーオー」と言つて迎へた。その言葉は最初分らなかつたが、直ちに次の事が明かになつた。母の居ない永い淋しい時間、子供は自分自身も留守であるとの一方法を發見した。その方法といふのは、殆ど床まで下つて居る大鏡に、自身の體を寫し、次にその前に蹲んだ。卽ち自分の姿が「あつちへ行け」になるやうにした。

この遊戲の意味は直ちに明白である。それは子供の驚くべき陶冶の行爲、卽ち衝動の滿足を斷念することと關係して居る。その結果として彼は母親が居なくなつても反抗を示さなかつた。彼は手近にある事物で、不在と再會を劇化することによりて補償した。子供が自身でそれを創作したか、それとも外部からの暗示によりて行つたかは、この遊戲の情緒的價値には無關係である。吾人の興味は他の點に存する。母親の不在は子供に取つて愉快であらう筈がなく、又無頓着にして居ることも出來ない。この苦痛の經驗を遊戲として反復するといふことは、如何にして快の原理と一致するか。この疑問に對しては不在が喜ばしき再會の必要的序曲として演ぜられなければ

ならぬこと、並に遊戲の眞の目的はこの後の方にあることを恐らく答へるであらう。しかしその解答に反對して、最初の行爲の不在の方が、喜ばしき結果を有する全部の劇よりも遙かに屢々遊戲として表れたことが觀察されたのである。

かやうな單一の場合の分析から確實な結論は得られない。公平な考察によりて吾人はその子供が他の動機からその經驗を遊戲に變へたといふやうに考へる。子供は最初の場合には受動的であつて、經驗に囚はれたのであるが、遊戲の際には發動的の役目をなし、不快の本質を有するに拘らず遊戲としてその經驗を反復した。この反復の努力は占有衝動（Bemächtigungstrieb 即ちある狀態を支配せんとの力の衝動）に歸することが出來るかも知れない。而してそれは回想が快のものであつても又不快のものであつても無關係である。しかし他の考察も可能である。不在をする母に對する復仇は實際生活では抑壓されるが、しかしその復仇衝動の滿足として、前述の如き見えなくなるやうに事物を投げやるかも知れない。而してその時の意味は「はい、汝は行つてよろしい、私は汝を要しない、私は汝を逐ひ出さうとして居る」といふ意味かも知れない。この觀察の後一年經つてから、この子供は不愉快を引起す玩具を床上に投げるやうになり、「戰爭に行け」

と言つて居た。彼の父は戰爭に行つて不在であると敎へられて居たが、彼は少しも父を戀しがらず、却つて母親の占有を妨げられることを望まないやうな最も明白な表現を與へた。* 人間の代りに事物を投げて、同樣な敵對心を洩すことの出來た他の子供の例を吾人は知つて居る。** かやうに深く印象されたものを心的に加工し、完全にそれを支配せんとする熱求は、快の原理から獨立して一次的に表れ得るか否かは疑問である。しかし玆に論じた場合に於ては、その子供が不快の印象を遊戲の中に反復したことは、その反復によりて他の異つた、且つ遙かに直接的の快を得るためであつたかも知れない。

* この男兒は五歲九箇月の時に、母が死んだ。母が本當に行つてしまつた(O—O—O)が、この子供は少しも悲しまなかつた。母の死ぬ前に弟が生れたが、それに對して烈しく嫉妬した。

** Eine Kindheitserinnerung aus „Dichtung und Wahlheit," Imago. V. 1917.

子供の遊戲について尙研究を進めて行つても、二つの概念の間の動搖を解決することは出來ない。子供は實際生活に於て最も大なる印象を受けた物を遊戲の中に反復することを吾人は知つて居る。而してその反復によりて印象の力を放散しその狀態に打勝たんとするものである。しかし

他方に彼等の遊戲の凡ては、その時の優勢なる欲望によりて影響されること、例へば大人になりたいとか、或は大人のなすやうなことをなし得たいとかの欲望によりて支配されることは十分明白である。尙又經驗が不快の性質を帶びて居ることから、それは遊戲に利用されないとは言へない事實が常に觀察される。若し醫者が子供の咽喉を診察し、或は少しの手術を行ふことがあれば、この怖しい經驗が確かに次の遊戲の內容になる。尤もこの場合に他の原因から快感を獲得することも看過してはならぬ。子供は經驗の受動性を遊戲の發動性に轉移せしめて、子供自身に遭遇した不快の出來事を遊び仲間に適用し、その代理人に復仇をする。

この議論からして、特殊の模倣衝動が遊戲の動機であるとの假定は、不必要であることが分かる。觀客に示すことを目的とする點に於て子供の行動と異つて居る成人の劇的竝に模倣的藝術は、例へば悲劇に於ける如く、最も苦しき印象を觀客に與へず、却て非常に樂しいものとして感ぜられることを此の際附言してよい。快の原理の支配の下でも、不愉快なものを記憶の對象としたり、精神的精錬の對象としたりする方法や手段が存在することは如上のことから確信される。經濟的見地を伴ふ美的原理は、最後に於て快の獲得に終る如き場合や狀態を取扱つてよいかも知

れない。しかしこれ等の原理は、吾人の目的に少しも役立たない。蓋しそれ等の原理は快の原理の存在と支配を豫想し、快の原理を超えて居る傾向、換言すれば快の原理よりも一層早き起原を有し且つそれと獨立せる如き傾向の働く證據を少しも示さないからである。

三

二十五年間の烈しき研究は、精神分析の技術の直接目的に完全な變化を持來した。最初分析醫師は、患者の自覺しない無意識を推測し、種々の成分を綜合し、正しい時にそれを知らせること以外に何も努力しなかつた。就中精神分析法は解釋の技術であつた。しかし治療の任務はそれで完成されなかつたので、次には患者自身の記憶によりて再構成を確信するやうに患者に强ゆることを目的とした。この場合の努力の主要點は、患者の抵抗であつた。從つてその技術としては出來るだけ速く、その抵抗を暴露し、患者の注意をその方に向け、人間の感化（この場合には轉移„Uebertragung"として働く暗示）によりて抵抗を棄てることを敎ゆることであつた。

しかしその際に絶えず明白になつたことは、無意識のものを意識の中に持來たすといふ目的がこの方法では十分に達せられないといふことであつた。患者は抑壓された凡てのものを回想することが出來ず、又恐らくその主要部分ですら再生することが出來ないので、彼に示された構造が正當であるとの確信を有しない。寧ろ彼は抑壓したものを現在の經驗として反復することを餘儀なくされ、醫者の欲するやうな過去の一部分としてそれを回想することをしない。この好ましからざる誠實さを以て表れてくる再生は、幼兒の性的生活の斷片、即ちエディプス錯綜及びそれの派生物を包含し、且つ轉移の領域、即ち醫者に對する關係の中に規則正しく行はれる。治療がこの程度に行はれる時には、以前の神經症が、新しいものに置き換つたと言ひ、それを轉移神經症(Übertragungsneurose)と名づける。醫者は出來るだけ轉移神經症の範圍を制限し、出來るだけ多くの記憶を强ひ、出來るだけ少なく反復せしむるやうに努むる。記憶と再生との間に出來上つた關係は各の場合に異つて居る。通常醫者はこの治療の階段を患者に省くことは出來ない。醫者は患者に忘却せる生活の一定の部分を再び生々せしむるやうにしなければならぬし、又その部分には或程度の勢力が殘つて居ることに注意しなければならぬ。その勢力によつて外見的現實は

忘却された過去の反映たることが常に認知される。若しこの方法が成遂げられると、患者の側に確信を生じ、その確信に基く治療的效果が表れるやうになる。

* Zur Technik der Psychoanalyse. II. Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten. [Ges. Schriften, Bd. VI.] を見よ。

神經症患者の精神分析的處置に表れる所の反復强迫(Wiederholungszwang)を一層分り易くするために、吾人は治療に於ける抵抗と戰ふ際に、無意識の抵抗を取扱ひつつあるといふ誤謬を第一に棄てなければならぬ。無意識的、即ち抑壓された材料は、如何なる救治的努力に對しても抵抗をしない。實はそれはその上に加へられる抑壓に反抗して、意識界に出んとし、或は現實の行爲によりて發露せんとする以外に何等の努力もしない。治療に於ける抵抗は、抑壓を持來たしたと同一の心的生活に於ける高等の水準及び系統から生ずる。しかし抵抗の動機、並に抵抗そのものは治療の際には無意識であるから、吾人の表現方法の不適當なことを訂正した方がよい。若し意識と無意識とを對立せしめないで、連絡ある自我と抑壓されたものとを對立せしむることが曖昧を除くやうになる。自我中の多くのものは確かに無意識でそれは自我の核と名づけられるも

のである。只その一部分に前意識（Vorbewusste）の名を與へることが出來る。かやうに純粋に叙述的の表現法を系統的又は動的の表現法に置換へるならば、被分析者の抵抗は彼の自我から生ずといふことが出來、且つ直ちに反復強迫を無意識界の抑壓成分に歸すべきことを吾人は發見する。恐らくそれは治療が抑壓を弛めるまで進まなければ表れることが出來ないものであらう。

意識的並に前意識的自我の抵抗が快の原理を助けることは疑もない。それは抑壓せる材料の解除によりて生ずる不快を避けんと試みる。而して吾人の努力は現實の原理に訴へて、かやうな不快感の入場を許されるやうに指導することである。抑壓されたものの力を表現する反復強迫症は快の原理と如何なる關係に立つか。反復強迫によりて復活されるものの大部分は、自我に不快を持來さなければならぬことは明白である。蓋しそれは抑壓衝動の活動を明るみに出さうと促して居るからである。しかしこの不快は已に說明され、且つ快の原理に矛盾することなくして說明された。蓋しそれは一の系統に就ては不快であるが、他の系統に就ては、同時に滿足であるからである。しかし今叙述しなければならぬ新しく且つ著しき事實は、反復強迫症が快の可能性を含まない過去の經驗の復活で、これまで抑壓された衝動の滿足でないことである。

幼兒の性的生活の開花は、それの欲求と現實との不和と、發達階段の不完全なることとの爲めに凋落の運命に遭遇する。それは非常に苦痛な感を伴ひ、最も痛ましき事情の下に衰滅する。愛情の損失と失敗とは自我感情に自己愛的創痕に比すべき深き創痕を殘した。而して私の經驗竝にマルチノスキー(Marcinowski)*の說明によると、この創痕は神經症の患者に屢々生ずる、劣等感(Minderwertigkeitsgefühl)に對し最も大切な貢獻をなして居る。子供の性に關する穿鑿は彼の身體的發達によりて制限を被り、滿足なる結論を得ることが出來なかつた。それで後の生活に於て、「私は何もなすことが出來ない、私は何も成功することは出來ない」との訴を生ずる。特に異性の親に對する子供の愛情的結合が失望に終り、滿足の豫期がはづれ、新しい子供の生れたことによりて嫉妬を生じ、その出生を以て愛せる兩親の不誠實の誤りなき證據と考へる。又自分でもかやうな子供を得んと悲劇的嚴肅を以て企てた子供の計畫は屈辱的失敗に遭遇する。それと同時に嘗て與へられた兩親の愛が一部分撤回され、訓練と敎育が一層確實に行はれ、嚴格な言葉や時々は懲罰すら加へられて、あらゆる範圍の輕蔑が彼に示される。この時期の典型的愛情が如何にして終りを告げたかを、正規的に反復する二三の典型的な神經症患者が發見される。

* Marcinowski, Die erotische Quellen der Minderwertigkeitsgefühle. Zeit. f. Sexualwiss. IV. 1918.

凡てこの好ましからざる出來事と、不快の愛情的狀態は、分析中の轉移の階段にある神經症患者によりて反復され、非帶な熟練を以て新に復活される。彼等は治療を中絶せんと努め、輕蔑された時の感を再現して醫者に向つて亂暴な言葉を用ひ、冷淡な態度を取り、嫉妬に對する適當の對象を發見し、以前に熱心に望んだ子供の代償として、前と同じく現實的でない大きな贈物を貰はんとの約束をする。凡てこれ等の行動は何等の快を與へるものとは言へない。それを新しい經驗に構成するよりも、記憶として、又は夢の中に表すことが、不快を少くするに相違ない。所がこの經驗は滿足の代りに不快を齎し、何等の結果を生じなかつた。それでその行爲は反復され、力强い强迫がそれに固執するやうになる。

精神分析が神經症患者の轉移現象の中に發見するものは、又正常の人間の生活にも觀察されることが出來る。それは彼等の體驗中に續く所の運命、即ち惡魔的特質に基くとの印象を吾人に與へる。而して精神分析は最初からかやうな運命を大部分自分から招いたもの、又は幼兒時代の影響によりて規定されたものと認めて居る。その際表れる强迫症狀は、神經症患者の反復强迫と少

しも異つて居ない。只かやうな患者は神經的軋轢が症狀として表れないだけである。それでその者が他人に對する關係も同一方法で終りをつけることを吾人は知つて居る。例へば恩惠を與へた者が與へられた者から却つて惡意を以て報いられて、忘恩の苦味を味ふ事があり、又友情を裏切られることもある。又自身でも或は一般的にも、大なる權威と認められるものを、一定の人に授け、暫くの後その權威を取上げて他の新しい者に授けるといふやうに、不定な生活を反復するものもある。婦人に對する戀愛關係がいつも同じ階級を取り、同じ結果に終る者もある。若し吾人がこれ等の人々の眞意の行動に留意し、且つ同一經驗の反復中に常に表るる不變の特質を、彼等の性格中に發見するならば、上の如く同一の事を彼等が無限に反復することは當然のことであることが分かる。それよりも尙一層著しきことは、彼自身の影響を働かすことなくして、受動的にあるものを經驗し、しかも常に同一の運命に再三遭遇する如き人の場合である。例へば一婦人が續けて三人と結婚し、何れもその夫は結婚後間もなく病氣にかかり、且つ死ぬまで看護しなければならなかつた例を吾人は回想する。* かやうな運命に就ての極めて感動的な詩的敍述を吾人はタッソーの史詩「聖徒解放」(Gerusalemme liberata) の中に發見する。勇士タンクレッドは敵の

騎士の具足をつけて戰を挑んだ愛人クロリンダを知らずに殺した。彼女が葬られた後、彼は十字軍の怖れる不思議の魔の森に入つて行つた。ここで彼は劍で一本の高い木を切倒した處が、幹の切目から血が流れ出て、且つ木の中に閉込められたクロリンダの靈の聲が聞え、再び愛人を傷けたことを非難するのを聞いた。

* ユングの論文 Die Bedeutung des Vaters für des Schicksal des Einzelnen. Jahr. f. Psychoanal. u. Psychopath. Forsch. 1901. Bd. I. に於ける、氏の適切なる觀察を參照せよ。

轉移の際の行動並に人間の運命に就ての上の如き觀察よりして、精神生活には快の原理を超越する反復强迫が存在すとの假定を敢てすることが出來る。又戰爭神經症患者の夢や子供の遊戲衝動がこの强迫力に關係して居ると言ひ得るやうである。勿論他の動機の共働なくして、この反復强迫が純粹の形に作用するのを認めることは極めて稀である。子供の遊戲に就て、その起原が全く異つて解釋されることを已に指摘した。反復强迫と衝動の直接の快的滿足とは複雜に組合はされて居るやうに見ゆる。轉移現象は抑壓の際に固執する自我の抵抗を助けるために表れたことは明白である。謂はば反復强迫は、快の原理に固執せんと決意せる自我の補助であると言へる。尙

運命强迫（Schicksalzwang）と名づけられる現象に於ても、その多くは合理的説明が可能で、新しく不思議な衝動を設ける必要がない。最も明白な場合は戰爭神經症の夢であるが、しかし他の例に於ても、その出來事の狀態を細かく吟味すると、吾人に知られた動機の作用で十分に説明されないことを、許さなければならぬ。從つてその場合に、反復强迫の假定を認めるだけの理由が十分にある。而してこの反復强迫はその反復强迫によりて置換へられた快の原理よりも遙かに原始的、要素的、衝動的であるやうに見ゆる。しかしかやうな反復强迫が心的生活にあるならばそれが如何なる機能に相應するか、どんな條件の下に表れるか、又これまで心的生活に於ける興奮過程の進みに於て權威を有すと述べた快の原理と、如何なる關係に立つかを知りたいと思ふのは自然である。

四

次に述ぶる所のものは思索である。思索は屢々牽强附會のこともあるが、しかし各人の特殊の

態度によりて思索の價値が認められたり、又は無視されたりする。思索は又各人の好奇心から觀念がどちらに導かれるかを見んとの探究であると言つてよい。

無意識過程の研究よりして意識は心的過程の最も一般的特質たることが出來ず、單に特殊の機能であるとの印象を得たことから、精神分析的思索は出發する。超心理學的に言へば、意識は意識(Bw)と名づけられる特殊系統の機能であることが主張される。この意識は主として外部から來る興奮の知覺と、心的裝置の內部からくる快と不快の感とを生ずるから、W－Bw(知覺的意識)の系統に一の空間的地位を與へることが出來る。それは外部と內部との境界に横り、外界の方に向ひ、內側には他の心的系統を包擁して居るに相違ない。吾人はこの假定に於て何も新しいものを主張したのでなく、腦髓解剖學の局所傾向と一致する。即ち腦髓解剖學では中樞機關を包括する最外表部の皮質層の中に意識の座所を認めて居る。腦髓解剖學では、解剖的に言へば意識が腦の最も深い隱れ場所のどこかに安全に位置を占めて居る代りに、何故に腦の外表面に存在しなければならぬかを怪む必要はない。吾人の知覺的意識系統の位置に就ての假定から、恐らく前記の解剖的事實を尙深く推論することが出來るであらう。

意識はこの知覺意識の系統の過程に歸せられる唯一の特殊の樣式でない。精神分析的經驗によりて得た吾人の印象は、次の如き假定に吾人を導く。卽ち他の系統に於ける凡ての興奮過程は、意識的たることと全く無關係な記憶の基礎をなす永久的痕跡を殘すものであるとの假定に導く。この殘留過程は全く意識に達しない時でも、往々最も强力であり且つ最も持續的である。しかしかやうに持續する興奮の痕跡が知覺意識的系統の中にも構成されると信ずることは困難である。若しその痕跡が永久に意識の中に止まるならば、新しく入りくる興奮に對するこの系統の適合が直ちに制限されるであらう。* 之に反して若しその痕跡が無意識であるとすれば、この系統の中では無意識過程であるのに、他の場合では意識現象を伴ふことを說明しなければならない。卽ち意識的になり得る過程を特殊系統から除去すとしても吾人は何等の得る所もなく、又何等の變化をも被らない。これが絕對的に吾人の考察を束縛しないとしても、兎も角意識的たることと、記憶痕跡を後に殘すこととは、同一系統の中で相互に矛盾する過程であるとの推測に吾人を導く。かやうにして吾人は次の如く言ふことが出來る。意識系統に於ては興奮過程は意識されるが、それは永久的痕跡を殘さない。記憶の基礎をなす凡ての痕跡は、興奮の波及によりて次の內部の系統

の中に生ずるのであらうと。私が千九百年「夢の解釋」の思索の章の中に挿入した圖式は如上の意味に於て述べられて居る。吾人は意識の起原に就て他の方面から少しも知らないことを反省するならば、意識が記憶痕跡の代りに生ずとの主張は、ある範圍にまで確定的であると許さなければならぬ。

* この點はブロイエルの Studien über Hysterie. 1895 の理論に關する章に全く從つて述べて居る。

かくして意識系統に於ける興奮過程は凡ての他の心的系統に於ける如く、その要素の永久的變化を殘すものでなく、しかしそれが意識的たることによりて放出され消失する如き特質を意識系統は有して居る。かやうに一般的法則から異つて居ることを說明するには、この系統のみに存する成分を基礎としなければならぬ。而してこの成分は凡ての他の系統に缺けて居るもので、意識系統の露示された場所、卽ち意識系統の外界に對する直接接觸であるかも知れない。

感受性を有する物質の不分化的小胞の如き、出來るだけ簡單な形式に於ける生活有機體を想像せよ。それの外界に向つて居る表面は、それの位置によりて分化され、刺戟を受取る器官として役立つやうになる。進化の歷史を繰返すといふ胎生學は、中樞神經系統が外胚葉から生ずること、

腦の灰白質は原始的表面層の派生物であること、それの主要なる特質は遺傳により傳はり得ることを示して居る。小胞の表面は絕えず外部の刺戟を被むることによりて、その物質の一定の深さまで絕えず變化を受け、その層の興奮過程はそれよりも一層深い層に於ける過程と異つた進みを取ることは容易に考へられる。かやうにして、一の皮殼が構成されるが、それは刺戟作用によりて燃え盡されて、刺戟の受容に對し最も有利な狀態を生じ、それ以上の變化が不可能なるやうになる。この考へを意識系統に適用すると、それの要素は已に最高程度の變化を被つて居るために、興奮の通過によりて持續的變化を被らないことが分かる。しかしこの要素は意識を生ずることが出來る。物質のそれ等の變化とそれの興奮過程とが何處に存在するかに就ては、多くの見解がありて、未だ確實なる證明を下すことが出來ない。興奮は一の要素から他の要素に移行する際に、抵抗に打勝たなければならぬこと、又この抵抗の減少によりて興奮の永久的痕跡（通路）が殘つて行くこと、竝に意識系統に於ては一の要素から他の要素へ移行するのに何等の抵抗が最早存在しないことを假定しなければならぬ。心的系統の要素の中に靜止的（束縛されたる）と自由活動的との二種の貯藏エネルギーのあることをブロイエルは區別して居るが、如上の考と聯關し

て居る。意識系統の要素は束縛的エネルギーを有せず、放射し得る自由なエネルギーを有する。しかし私の考によると、これ等の條件を確定的に言ひ表はさない方が現在では都合がよいやうである。兎も角吾人の思索によりて意識の起原が意識系統の位置並にその系統に歸せられる興奮過程の特質とに一定の關係を有するやうになつた。

更に刺戟受容の皮質層を有する生活小胞のことを今少しく述べなければならぬ。この生活體の小塊は最も深いエネルギーを包有する外界の中に浮動し、若し刺戟に對する保護（Reizschutz）を有しなければ外界からの刺戟作用によりて破壊されるであらう。この最も外部にある層は、生活體に屬する構造であるが、ある程度まで無機的になつてしまふ。而してそれは刺戟を豫防する特殊の外皮又は膜として働くものである。換言すれば外界のエネルギーは、直接下に横りて、活力を保存する層に對して極めて僅少なる力を及ぼすだけになる。かくしてこれ等の層は保護を被りながら、入つてくる多くの刺戟の受容を專ら行ふことが出來る。しかし外部の層は、自己の死によりて、凡ての内部の層が同一の運命に遭遇することを防ぎ、尠くとも刺戟保護を破壊するやうな強度の刺戟が入つてこないやうにする。生活有機體に取りては、刺戟の保護は刺戟の受容よ

りも遙かに大切な仕事である。この保護裝置はそれ自身にエネルギーの蓄積を準備し、殊にそれ自身の中に行はるる特殊のエネルギーの變容を保護して、外界より生ずる偉大なるエネルギーの平等化竝に破壞作用に影響されないやうに努めなければならぬ。就中刺戟の受容は、外部刺戟の方向と性質に就ての報知を集むることを目的とするから、外界の少しの見本を取るだけで、換言すれば、少量で外界を味ふことで滿足しなければならぬ。非常に發達した有機體に於ては、嘗て小胞であつた受容の外層は、身體の深い所に引きこめられたが、それの一部分は一般の刺戟保護裝置の直下の表面に殘されて居る。これ等の部分が感覺器官を構成し、殊に特殊の刺戟の受容に對する裝置を有し、且つそれ等は刺戟の異常なる量に對し、又不適當の刺戟を防ぐやうに出來上つて居る。又外部刺戟の極少量のみを同化し、外界の見本のみを取入れることが彼等の特質で、吾人はそれ等を以てかの外界に觸れ、絕えずそれから引込む所の觸角と比較することが出來る。

この點に於て私は最も根本的の取扱に價する一の問題に暫く觸れたいと思ふ。時間と空間とは吾人の思考の必然的形式であるとのカントの主張は、今日精神分析によりて得られた一定の知識によりて論議されることが出來る。吾人は經驗によりて、無意識の心的過程はそれ自身に無時間

(zeitlos) であることを發見した。第一に無意識過程は時間的に配列されて居ないし、時間がその過程に變化を及ぼすことはなく、時間觀念をその過程に適用することが出來ない。無時間といふことは消極的特質であつて、これは意識的心的過程と比較することによりて初めて明白になるものである。時間に就ての吾人の抽象概念は寧ろ知覺意識的系統の作用の様式から導き出されたもので、系統自身の知覺に相應するやうに見ゆる。この系統の作用の様式の中に、刺戟に對する保護の他の形式が入つてくる。これ等の主張は極めて曖昧のやうに見ゆるが、しかし私はこれだけの暗示を言ふに止めて置く。

生活する小胞は外界の刺戟に對し保護するやうに出來て居ることをこれまで述べて來た。その前に吾人はその次にある皮質層が外部の刺戟の受容器官として分化されて居るに相違ないと斷言した。しかし後には意識系統となる所の、この感受性を有する層はまた内部からの興奮をも受取る。内部と外部との間にある系統の位置、竝にこの兩側に受容性が働く所の條件の相違が、その系統及び全心的装置の作用の決定的成分になる。外界に對しては刺戟保護があるために、それに對して生ずる大量の興奮も只縮少された程度に於て作用する。所が内部にあるものに對しては刺

戟保護が不可能であるために、一層深い層の興奮はその系統の方へ衰へることなく直接に進んで行き、それ等の進みの一定の特質として快不快の感の系列を生ずる。內部からくる興奮は、その强度竝に他の質的特質（恐らくその振幅）の點よりして、外界から流れ入る刺戟よりも、遙かにその系統の作業樣式に適合することは自然である。しかしこれ等の狀態よりして規定された二つの事がある。第一は快及び不快の感が凡ての外部の刺戟以上に優勢になること、この快及び不快の感は裝置の內部に於ける過程の指標である。第二は全く不快の過剩を生ずる如き內部興奮に對する行動の方向である。この場合にはその刺戟が內部からでなく、外部から働いて居るかの如く取扱ふ傾向がある。外部の刺戟保護の手段をこの場合に適用することが出來る爲である。これが投射（Projektion）の起原となるもので、病的狀態の發生には重要な役目をなすものである。

以上の最後の考察によりて吾人は快の原理の支配の理解に一層近づいたが、しかしその原理に反對する場合の說明をして居ない。それで尙一步を進めて說明しよう。刺戟保護を破壞する位に强力なる外界からの興奮を外傷的のものと名づける。（この外傷 „Trauma" の概念には、他の場合では有効なる刺戟防禦であるが、この場合には無効であるといふ意味を包含して居ると私は考へ

る。）外部からの外傷の如き出來事は疑もなく有機體のエネルギーの作用に烈しき障害を引起し、凡ての防禦手段を講ずるやうにする。しかし快の原理はこの場合に無効になり初むる。蓋し心的裝置はかやうな多量の刺戟の洪水に對しては、最早防ぐことが出來ず、却つて他の仕事が表れてくる。即ち刺戟の量を統御し、拘束し、且つ相當の排出口を求めて、それを解放してしまふやうにする。

身體的苦痛に伴ふ特殊の不快は恐らく一定の限られた範圍に於ける刺戟保護が破壞された結果である。その爲に末梢に於けるこの點から中樞の心的裝置の方へ興奮が永續的に流れて行く。この興奮は他の場合には只裝置の內部からのみ來ることを常とする。*この侵入に對し、如何なる心的反應をなすのであるか。それはその破壞された部分の周圍に、この興奮に相應するだけのエネルギーの充積を造らんために、凡ての方面からエネルギーを集めてくる。即ちこの場合には反對充積（Gegenbesetzung）が生ずることになり、その爲に、凡ての他の心的系統は衰滅し、他の心的活動の廣汎に互る減退や痲痺を引起すやうになる。かやうな例よりして、吾人の超心理學的推測をかやうな原型の上に置かうと思ふ。尙高度に充積された系統ですらも更に流れてくる新エ

ネルギーを受取り、それを靜止の充積に變じ、心理的にそれを束縛することが出來るとの結論を吾人は如上の行動より得るのである。眞の靜止の充積が強くなればなるに從つて、それの束縛力は益々大になり、それと反對に、その系統の充積が低くなるに從つて、入りてくるエネルギーを受取る力が弱くなり、遂には刺戟保護が破壞される如き結果に達するやうになる。流入の場所の周圍に充積が強くなることを單に侵入する興奮の量の直接の作用として說明することは、如上の見解に對し有力なる反對にならない。若し反對者の言の如くであれば心的裝置は單にエネルギー充積の增加のみを經驗し、苦痛の痲痺的特質や凡ての他の系統の減衰は說明されなくなる。烈しき放射作用によりて苦痛を減ずる如き結果も吾人の說明を妨げない。蓋しこの放射は反射的に生ずるからで、換言すれば心的裝置の干涉なくして生ずるからである。吾人が超心理學的と名づけた所の凡ての議論の不確實なことは、勿論心的系統の要素中の興奮過程の本質に就て何も知らないこと、又それに就て何等の推測を下すことは正當でないことの事實から來て居る。かやうに吾人は常に大なるXを取扱ひ、そのXを何れの新しい公式にも適用して居る。この過程がエネルギーの量的相違によつて行はれることは容易に承認される假定であり、又それの質も多數なること

は（例へば振幅の種類に於て）眞實らしく思はれる。吾人が玆に新に考察したことはブロイエルの主張に基いたもので、氏によると系統がエネルギーを以て充積されるに、二種の仕方があるといふことである。即ち心的系統（又はその要素）の充積に相違がありて、一方の充積は自由に流れ、放射されんことを努めるが、他方の充積は靜止の狀態を取るものである。故に心的裝置の中に流入するエネルギーが束縛されることは、それが自由の流から靜止の狀態に置換ることであると吾人は推測してよい。

* Triebe und Triebschicksale. (Ges. Schriften. Bd. V.) 參照。

通常の外傷的神經症は刺戟保護が廣く破壞された結果であると試驗的に承認し得ると私は信ずる。さうすると衝擊（Schock）に就ての古い素朴的の原理が却つて相當の理由を有するやうになり、後世の虛飾的な心理的見解に反對することになる。この見解によると、この病源を機械力の結果に歸せず、驚愕と生命の威嚇とに歸して居るのである。しかしこれ等の反對的見地は互に調和し難いものでない。外傷的神經症に就ての精神分析的概念は、衝擊說の最も素朴な形式と同一でない。衝擊說では衝擊の本質を神經要素の分子的構造、或は組織學的構造の直接傷害に求める

が、吾人は衝擊の影響を心的機關の刺戟に對する防禦の破壞に求め、又その破壞によりて生じた心的機關の任務によりて解せんとする。驚愕も亦吾人に取りては意義を有して居る。蓋し衝擊を引起した條件は、憂慮準備の缺乏であり、又最初刺戟を受取る系統が超充積をしなかつたことである。この低い充積の結果として、その系統は入り來る興奮の量を束縛することが出來ず、それの刺戟保護は容易に破壞されてしまふ。かくして憂慮準備竝に受容系統の超充積は刺戟保護の最後の線たることを吾人は發見する。大多數の外傷に於ては、準備されてない系統と超充積によりて準備されて居る系統との相違が外傷を生ずる程度を決定する成分であると言へる。尤も一定の强度を超えた烈しき外傷に於ては、かやうな相違は最早重要でない。外傷的神經症に苦しむ患者の夢が常に災害を受けた時の狀態に泝る時に、それは欲求實現の目的を達して居ない。尤も以前の狀態を幻覺的に作り出すことは、快の原理の支配を受けて夢の機能になつたのであるが、しかし欲求實現の目的は達せられてないことは眞實である。しかしそれは快の原理がその支配をなさんとする以前に、欲求實現以外の目的を滿足しなければならぬ爲であると吾人は推定してよい。これ等の夢は、憂慮を發達せしめて刺戟の統禦力を囘復せんとの企てで、その憂慮が發達しなか

つたことが外傷的神經症の原因になる。故にこの種の夢は心的裝置の一機能に就ての見解を吾人に與へて居る。即ちその機能といふのは快の原理と無關係ではあるが、少しもその原理と矛盾することなく、快を得、不快を避ける目的よりも一層早い起原を有するやうに見ゆることである。

夢は欲求實現であるとの原理に一の例外あることを玆に初めて承認することが出來る。憂慮の夢は私が屢々詳細に述べた如くかかる例外でなく、又罰の夢（Strafträume)でもない。何となれば、この種の夢は禁止された欲求實現の代りに、單にそれに相當した罰が表れるもので、從つてそれは輕蔑に値する衝動に對し、反應として生じた罪悪意識の欲求實現であるからである。しかし上述の外傷的神經症患者の夢は、欲求實現の見地の下に持來たすことが出來ず、精神分析の際に屢々生ずる子供時代の心的外傷の回想を持來たす夢でもない。彼等は寧ろ反復强迫に從ふもので、それは分析すると、忘却され抑壓された經驗を再現せんとの暗示によりて生じた欲求に基いて居る。かやうに精神を擾亂す如き興奮の欲求實現によりて、睡眠を中斷する動機を除去することは、夢の根本的機能でない。心的生活全部が快の原理の支配を承認した後に初めて、夢はこの機能を示すことが出來る。若し快の原理の彼岸（Jenseits des Lustprinzips）があるとすれば、

夢の欲求實現に對しても、歷史以前の過去があつたといふことを承認することは論理的である。而してそれを承認することはその後の夢の機能に矛盾しない。只この傾向が一旦破壞されると尙外の問題を生ずる。外傷を生ずる如き印象を心的に束縛する爲に、反復强迫を伴ふ夢は分析から離れて生じ得るであらうか。その問に對する回答は確かに生じ得るといふことである。

戰爭神經症はそれが表れる戰爭以外の場合でも、尙大なる意義を有するものである。それで私はこの事に就て他の處（戰爭神經症の精神分析、萬國精神分析學文庫第二卷千九百二十一年）に次の如く說明した。卽ちその疾患は自我軋轢（Ichkonflikt）によりて容易に引起される外傷的神經症であるかも知れないと述べた。心的外傷を受くると同時に身體的に重傷を被る時には神經症を生ずる機會が少くなると、前の第二節の初めに述べた事實は、精神分析的硏究によりて强調された次の二つの事情を考へると、容易に理解することが出來る。第一は、機械的衝擊が性的興奮の源泉の一として認められなければならぬこと、（「千九百二十年性說に關する三論文集」中の動搖と汽車旅行の效果參照）第二に痛みと熱とを發する病氣が、それらの持續する間リビドーの分配に有力なる影響を及ぼすことである。かやうに外傷の機械的力は性的興奮の量を解放し、そ

の興奮は憂慮の準備が缺けて居た爲に外傷的結果を生ずる。しかしこれと同時に身體的傷害を被ると、害を被つた部分に自己愛的超充積を生じて、過剩の興奮は束縛されるやうになる。(自己愛に就て、神經症に關する小論文集四參照)。以上の考察にリビドー說を十分に利用しなかつたとは言へ、次のやうな事實が知られて居る。卽ち鬱憂症に見る如きリビドー分配の烈しき障害は、それと倂發した身體的疾病によりて一時除去されると。實に可なり進行した早發痴呆症の狀態でも同樣な肉體的疾病の爲に一時よくなつて行くことがある。

五

刺戟受容の皮質層は、內部からくる興奮に對する保護裝置を缺いてることから、一の免るべからざる結果を生ずる。卽ちこれ等の刺戟の轉移が大なる經濟的意義を有するやうになり、外傷的神經症に比較すべき經濟的障碍を生ずることが屢々ある。これ等の內部興奮の最も豐かな源泉は所謂有機體の衝動、卽ち身體內部から生じ、心的裝置の方へ轉移する凡ての力の代表である。而

してそれ等の衝動は心理的研究に取りて最も必要なものであるが、しかし最も不明瞭なものである。

衝動から生ずる興奮は束縛された神經過程でなく、解放を求めんとして居る自由に活動する神經過程であると假定することは餘まり早急でないやうに見ゆる。これ等の過程に就て最も信賴すべき知識は夢の研究からくる。夢の場合に吾人は無意識系統に於ける過程が前意識の過程と根本的に相違することを發見した。卽ち無意識の中に充積された力は容易に轉移され、置換され、壓縮され得るが、若し前意識的材料と共に生ずる時には完全なる充積が得られない。これはよく知られた表白的夢(manifestes Traum)の特質を生ずる理由で、前日の前意識にある殘留物は、無意識の法則に從つて精錬を被むるものである。私は無意識に於けるこの種の過程を心的一次過程(Primärvorgang)と名づけ、吾人の正常の覺醒生活に行はるる二次過程から區別した。衝動の興奮は凡て無意識系統に影響するから、その興奮が一次過程に從ふといふことは決して新しいことでない。而してこの一次的過程は自由に流動する充積と一致し、二次的過程はブロイエルの束縛せる又は强壯性充積の變化と一致する。一次過程に達する所の衝動興奮を束縛することは、心

的裝置の一層高い層の任務である。この束縛をなし損ふ時は外傷的神經症に似た障碍を引起す。快の原理（竝にそれの變容たる現實の原理）が妨害を被らないでその主權を振りまはすことの出來る機會は、この束縛が旨く成就された後のことに過ぎない。それまでは、興奮の統御と束縛とを得んとする、心的裝置の他の任務が先に行はれるもので、それは快の原理に反對せず、只それと獨立に或は一部分それを看過して行はれる。

既に述べた幼兒の精神生活の早期の活動竝に精神分析的治療の經驗に表はるる反復强迫の發現は、極めて高度の衝動性を有して居る。それが快の原理と對立して表はるる場合には惡魔的性質を示すものである。子供の遊戯を見ると、不快なる經驗ですら反復するといふ結論に達する。蓋し彼等は單なる受動的經驗によるよりも、自己活動によりて、强き印象を更に多く支配せんとするためである。何れの新しい反復も、子供の要求するこの支配を强めるやうである。愉快の經驗を以てしても、子供の反復を止めさせることが出來ず、印象の同一なることを頑强に固守する。しかしこの特質は後になると消失するもので、例へば滑稽の如きは二回聞く時は、殆どその效果がない。劇の動作も第一回目には第一回目と同じ印象を與へない。又非常に興味を以て讀んだ本

をすぐに讀返すやうに成人に勸めることは不可能である。新奇は享樂の必然的條件である。しかし、子供は以前遊んだことがあり、或は彼に示した遊戲を反復することを大人から要求されても飽きない。遂には大人の方で全く疲れて止めさせる。同樣に子供に面白い話を聞かせると、新しい話を聞かず、前の話を常に聞きたがり、しかも精密に反復するやうに求め、談話者が誤つて口を滑らしたり、又は新味を加へる爲に、異つたことを挿入すると、その異つた所を訂正する。しかし、このことは快の原理と矛盾して居ない。反復、卽ち同一を發見することが明かに快の源泉である。他方に分析を受けて居る患者が、彼の幼兒生活の出來事を轉移の中に反復するやうに强迫される場合は、あらゆる點に於て快の原理が無視せられて居ることは明白である。その患者はこの場合に全く幼兒の如く行動するものである。卽ち彼の原始的經驗の抑壓された記憶痕跡は束縛されたる形に於て表れず、謂はば二次的過程をなすことが出來ないことが分かる。この束縛されて居ないといふ事實は、夢の中に表れる欲求的空想を構成する力を有することを示すもので、その空想構成は覺醒經驗から得た殘留物に固執する爲に生ずるものである。治療の終りに於て、醫師から完全に離れるやうに望む時に、同一の反復强迫が屢々表れて、治療を妨害する。それは

患者が分析に馴れて居ない爲に、一種の憂慮を感じ、寧ろ眠らせて置く方がよいと思ふものを覺醒されはしないかと憂慮するからである。而してこの憂慮は根本に於て惡魔的な强迫の出現を恐れることであると假定してよい。

衝動的のものが如何なる仕方に於て反復强迫と結合するか。玆に於て吾人は一般的に餘り明白に認識されず、或は少くとも明かに强調されて居ない所の衝動の特質、或は恐らく凡ての有機的生活の特質を追求したと考へざるを得ない。而して追求した所によると、衝動とは以前の狀態に復歸するやうに强ふる所の、生きた有機體に內在する傾向である。而して生物は外部の妨害する力の影響によりてその狀態を拋棄しなければならぬ。從つて衝動は一種の有機的彈力、換言すれば有機生活に於ける惰性の表現であると言へる。*

* これと類似の臆說が旣に繰返して主張されたことを私は疑はない。

しかしかやうな衝動の概念は吾人に異樣に響く。蓋し吾人は變化と發達の方に導かれる成分が衝動の中にあることを發見するに馴れて居るのに、玆ではそれと反對なこと、即ち生物の保存的性質の表現をその中に認めなければならないからである。他方に動物生活を見ると、本能が歷史

的に條件づけられたことを確めるやうな例を發見する。或魚は産卵期になると、通常の習慣から遙か離れた一定の水に卵を産まんが爲に、骨の折れる旅行を企てるが、多數の生物學者の説明によると、それは彼等の幼稚時代に居た場所を求めて居るといふことである。同樣なことが渡り鳥の移住して行くことにも言へる。しかし吾人が遺傳の現象や胎生學の事實の中に有機的の反復强迫の證據を有することを思ひ起すと、尙多くの實例を求めることは餘計なことである。生きた動物の生殖細胞はその發達の最後の形式に最短距離を通つて急ぐことなく、今日まで發達して來た凡ての形式の構造を、假令疾過的に且つ簡單ではあるが、反復するを餘儀なくされることを吾人は知つて居る。これの機械的説明は極一少部分を除いては不可能で、吾人は歷史的説明を看過することは出來ない。同樣に動物界に於ける可なり進歩した種族に於ても再現過程が遙かに廣く行はれて居ることが分かる。ある器官が失はれると、この再現過程によつてそれと全く類似の新器官の發達を促すものである。

　反復を强ふる保守的衝動の外に、新しい構成と進歩とを促す他の衝動があるとの反對意見は、慥かに看過してはならない。このことに就ては後になつて論ずることにする。しかし凡ての衝動

の目的は以前の狀態に復歸することであるとの假說を、吾人は終局まで追跡しようと思ふ。若し吾人の探究する結論が非常に意味深重な外見を有するとか、或は神祕に類似すると非難する者があれば、その種の非難を吾人は免れることが出來る。蓋し吾人の研究は決してかやうなものでなく、極めて眞面目な結果を求め、且つそれに基いた反省を求めて居るからである。而してそれ等の結果に就て吾人の望む所はそれの確實性といふことに外ならない。

凡ての有機的衝動は保存的であり、歷史的に獲得され、退行的方向を取り、以前の狀態を復活せんとするものであるとすれば、吾人は凡ての有機的發達の結果を、外界、妨害、轉向の影響に歸さなければならぬ。若し凡ての事情が同一に止まれば、原始的生物體は最初から變化することを欲せず、同一の生活徑路を常に反復したであらう。有機體の發達に印象を殘したものは地球の進化と太陽に對する地球の關係とであつたに相違ない。保守的の有機的衝動はその生活の進みに於てこれ等の强迫的變化の凡てを取入れ、それ等を蓄積して反復したのであらう。かくして衝動は古く又は新しい方法によりて、古い目標に達せんと實際は努めて居るに拘らず、恰も變化と進步の爲に努力する力であるかの如き虛僞の外觀を呈する。この凡ての有機的努力の最後の目標は

次の如く說明することが出來る。若し生命の目標がこれまで達せられない狀態であれば、その目標は衝動の保存的性質に對するものである。寧ろ生物が發達の廻り路を辿りて行く目標は、生物が以前に後に殘した最も古代の出發點で、生物は再びその點に返らんと努むるものである。凡ての生物はそれの內部の原因から死し、無機のものに復歸することは、例外の無い經驗であると假定すれば、「凡ての生命の目標は死である」といふことが出來、また「無生物は生物の前に存在した」といふことが出來る。

或時代に於て吾人の全く推測し難い力の作用によりて、生命の特質が、生命なき物質の中に生起した。恐らくその過程は、後になつて生物の一定の層の中に意識が生起したと類似のものであつたに相違ない。豫め無生物の中に生じた緊張は、平衡を得んと努力した。而して無生物に歸らんとの傾向、卽ち最初の衝動が表れたのである。この時代の、生きた物質は容易に死んだであらう。恐らくそれの生命は短いもので、その壽命は若き有機體の化學的構造によりて決定されたのであらう。かやうにして生命ある物質は長い間間斷なく新に創造され、且つ容易に死滅をつづけて居たに相違ないが、遂には非常な外部の影響のために、生活物質は最初の通路から離れた路を

行くやうに強ひられ、且つ死の目標に達するには益々複雑な廻り路を取らなければならぬやうになつた。保守的衝動によりて忠實に維持されたこの死への廻り路は、今日吾人の知る生命の印象に外ならない。若し衝動のこの唯一の保守的性質が確實のものとして承認されるならば、生命の起原竝に目標に就て、これ以外の假定を設けることは不可能である。

若しこれ等の結論が吾人の耳に異様に響くとすれば、有機體の生命現象の下に横るとする衝動の大なる集團に就て下す結論も、同じく異様に見ゆるであらう。凡ての生活體は自己保存の衝動を有すとの假定は、衝動の存在が死を持來たす目的に役立つといふ假定と著しく反對する。後の考へ方によると、自己保存、權力、自己主張の衝動の理論的意味は無くなつてくる。それ等の衝動は有機體をしてそれに特有な死への路を辿るやうに保證し、且つ有機體が固有のもの以外の無機物へ復歸しないやうに防禦せんと企てた部分的衝動である。從つて有機體が極力それ自身を維持せんと努めそれ以外のものと結合することの出來ない謎の如き努力は消失する。有機體はそれ自身の仕方に於てのみ死なんと決心するものである。而して生命の擁護者たる自己保存の衝動は根本的には死を執行する役人である。從つて生命ある有機體は短い路（所謂短傳路）を通りて生

命の目標に達するやうに補助する作用(危険)に對して最も力強く抵抗するといふ矛盾を生ずる。しかしこの行動は知的努力と反對に、純粹の衝動の特質を表して居る。

しかし如上の事が全然眞理たることが出來ないことを考慮しなければならぬ。神經症の原理は性の衝動に對して特殊の地位を與へて居るが、吾人はそれと全く異つた見地から性の衝動を考へようと思ふ。凡ての有機體は尙多くの發達に導く所の外部の强迫に從ふものとは言へない。多くの有機體は今日まで低い水準に止まることに成功した。高等の動物や高等の植物が嘗て通つて來た原始的階段に類似した生活形式を示すものが今日多數存在する。高等な生活形式の複雜なる身體を作り上げて居る凡ての要素的有機體は、自然の目的卽ち死に至るまでの進化の全き道程を辿つて居ない。それ等の中のあるもの、例へば生殖細胞の如きものは恐らく生活物質の根本的構造を維持し、一定時期の後に母體から分離する。その分離の際に生殖細胞は凡ての遺傳的傾向や新に獲得した傾向を以て充積されて居る。而してこれ等の二種の充積が生殖細胞の獨立的存在を可能ならしむるのであらう。若し彼等が都合のよい條件に置かれると、發達し初める。この發達は同一の軌道を反復することで、彼等の發生もその反復に負ふものである。而してその物質の一部

分は終極まで發達をつづけるが、他の部分はその間に新しい生殖細胞の核として發達の初めに再び歸つて行く。かくしてこれ等の生殖細胞は又生物の死に反對して働き、その爲に生物は恰も、潛勢的不死の如き特質を獲得する。しかしそれは死への道程を單に長くすることを意味するに過ぎない。生殖細胞がそれと類似の他のものと混合し、又それと異つたものと混合することによりてその機能を强力にし、その機能を永久に可能ならしむることは極く重要な意義を有する事實である。

個體を保存するこれ等の基本的有機體即ち生殖細胞の運命を心配する衝動の群がある。その衝動は件の有機體が外界の刺戟に對して防禦を有しない間安全なる保護を與へ、最後に有機體として他の生殖細胞と結合するやうに仕向ける。この衝動の群が即ち性の衝動である。性の衝動は他の衝動と同じく保守的で、生活物質の以前の狀態を再現する傾向がある。しかし外部の影響に抵抗する點に於ては他の衝動よりも遙かに强い。而してそれは長い期間その生命を保存するから、廣義に言へば一層保守的であると言へる。性の衝動は事實上生命衝動で、死の方に導く他の衝動の傾向に對抗する事實は、彼等とその他のものとの間に矛盾を示すことである。神經症の原理は

この矛盾を重要なものと認めて居る。有機體の生活の中には、恰も振動するリズムが存するやうである。一群の衝動は出來るだけ迅速に生命の最後の目標卽ち死に達せんと努め、他の衝動はその途中のある場所で後戻りをし、その點から尙一度同じ進路を通りて、旅行の期間を永引かせようと努めて居る。性慾や性別は生物の初めには存在しないとは言へ、後に性的のものとして叙述される衝動は最初から働いて居り、自我衝動の役割に反對する作用をなして居たもので、決して後の時期になつて表れたものでないことは確かである。

凡てこれ等の思索が全く根據を有しないか否かに就て吟味して見よう。性の衝動は別として、以前の狀態を復活することを目的とする衝動以外の衝動があるか。未だ嘗て到達したことのない狀態を得んと努力する衝動は存在しないか。玆に私が暗示した特質に反對するやうな衝動の例を私は有機世界に知らない。植物界や動物界に於て或方面への進步は明白に存在するが、一層高等な發達を促す一般的衝動の存在することに就ては確證することが出來ない。しかし他方に一方の發達階段が他方のそれよりも遙かに高等であるといふ時に、それは吾人自身の評價の事項に過ぎないことが屢々ある。而して又、一方の特殊のものの發達は、他のものの退化によりて贖はれる

とか、差引勘定をするとかの事實は生物學によりて明白である。高等の發達と退化とは、共に順應を強ふる外部の力である。而して衝動によりて行はれる役目は、兩方の場合に强迫的變化を快の源泉として確保することに限られて居るやうである。*

* フエレンチは異つた道程から、これと同樣な槪念の可能であることを結論した。(Entwicklungsstufen des Wirklichkeitssinnes. Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, I, 1913) 氏は曰く、「論理的にこの思想の過程を辿りて見ると、吾人は持續又は退行の傾向が生物界を支配して居るとの觀念を信ずることを余儀なくされる。而して發達に於ける進步の傾向、順應等は外部の刺戟に對してのみ顯れてくる。」

知力の現在の高さと倫理的昇華とを持來たした所の、完全なものへ進まんとの衝動が人間の中に存在し、その衝動によりて超人への發達が保證されるとの信念を棄てることは多くの人に取りて困難である。しかし私はかやうな內部衝動の存在を信じない。而してかやうな慰藉的錯覺を保存すべき仕方を發見しない。現在までの人間の發達は下等動物の發達と異つて居ると說明する必要はないやうに見ゆる。少數の人間に觀察される所の、尙一層完全なるものの方へ絕えず努力し

て居ることは、人間文化に最も價値あるものを建設する所の衝動の抑壓の結果として容易に說明することが出來る。抑壓された衝動は完全なる滿足を得んと努力するもので、その完全の滿足は原始的の滿足の經驗を反復することから成立して居る。凡ての補償又は反動の構成、及び昇華等も不斷の緊張を弛めるに何等の役に立たない。獲得した滿足と要求する滿足との相違からして推進的動力が生じ、その動力は、提出された何れの狀態にも滿足して止まることをせず、詩人のいつたやうに「屈することなく永久に前方へ」(「フアウスト」のメフイスト)と追究するものである。完全なる滿足を持來たす所の後方へ退行する路は、通常抑壓を支持する抵抗によりて妨げられる故にその道に止まらないで、他方の妨害のない進步發達の道へと進んで行くより外はない。しかしこの發達の路を進んで行つても、決して結論や目標に達する見込は全くない。神經的恐怖症の發達の中に表れる症狀は衝動の滿足を回避せんとの企てに外ならない。而してその症狀はこの完全へ達せんとする外觀的衝動を生ずることの原型である。しかし吾人はそれを凡ての人間に當嵌めることは出來ない。動的狀態が全く一般的に存在することは眞である。しかし經濟的關係が極めて稀にその現象を有利にするやうに見ゆる。

有機體を常に大なる統一に結合せんとするエロスの努力が、この完全へ達せんとする衝動の補償をなすことは眞實である。そのことは抑壓作用と共に前に記述した現象を説明することが出來るであらう。

六

これまでの所論によりて、自我衝動と性の衝動との間に鋭き反對のあること、即ち前者は死の方に進まんと努力し、後者は生の保存の方へ努力することを明にした。しかしこれ等の主張は多くの方面に於て確かに吾人を滿足せしめないであらう。それに又自我衝動にのみ保守的特質、(或は寧ろ退行的特質と名づけた方がよい)、即ち、反復强迫に相當する性質を與へた。蓋し吾人の假定によれば自我衝動は無生物に生命を與へることから出立し、再び生命のなきものに復歸せんとの目的を有するからである。所が性の衝動に於ては、生物の原始的狀態を生產し、再生することは明白であるが、しかし特殊的に分化せる二つの生殖細胞をあらゆる手段によりて結合せしめん

と努力して居る。若しこの結合が生じなければ、その細胞は多細胞有機體の他の成分と同じく死滅する。只この結合を行ふことによつて性の機能は生命を持續することが出來、それに不死の外觀を呈するやうにする。性的生殖又はそれの前驅たる二個の原生動物の接合によりて、生活物質の發達過程の中に如何なる重要なる出來事が反復されるか。その問題に對し吾人は如何に答ふべきかを知らない。從つて吾人の思考の凡ての組織が誤謬であると證明されたらば、その答をする責任が無くなるであらう。而して自我（又は死）の衝動と性（又は生命）の衝動との反對も同時に無くなり、反復强迫も吾人のいふ如き意義を失ふであらう。

　精確な駁論のくることを豫期して、吾人の假定の一に歸りて述べよう。吾人は凡ての生命が内部原因よりして死ななければならぬとの根據から、既に多くの結論を作り上げた。死は吾人にその眞相を示さない爲に、吾人は無造作にこの假定をした。吾人は死をかやうに考へるやうに馴れて居り、且つ何れの詩人もかやうに考へるやうに吾人を鼓舞する。かやうに信ずることの中にある種の慰藉がある爲に、吾人はかやうに考へるやうに恐らく決心したのであらう。若し吾人の最愛の者が死んだ後に、吾人自身も亦死ななければならぬならば、吾人の生命が、ある仕方で避け

ることの出來たかも知れない單なる偶然な出來事によりて失はれるよりも、寧ろ自然の抂ぐべからざる法則、卽ち偉大なる宿命によりて失はれるといふやうに考へるに相違ない。しかし、生物の內部法則の必然的結果として死するのであるとの信仰は、生存の負擔に堪へるやうに吾人自身で創作して錯覺の一つである。しかしそれは根本的の信仰でない。原始人に於ては「自然の死」の觀念を有しない。彼等は凡ての死を敵又は惡靈の作用に歸した。それで吾人はこの信仰を吟味する爲に、先づ生物學の硏究に注意を向けなければならぬ。

所がこの生物學的硏究に眼を向けると、自然の死の問題に就て生物學者の間に殆ど一致した意見のないこと、又死に就ての眞の概念が全く知られて居ないのに吾人は驚くであらう。少くとも動物に於ける平均の壽命は、內部原因からくる死に關係すると言はれて居る。しかし或巨大なる動物や植物が、殆ど計算すべからざる位に長命であることを考へると、死に就ての印象は除かれてしまふ。フリース（W. Fliess）の誇張した概念によると、凡ての生命竝に死の現象は一定時期の完結と關係して居り、その期間中に於て男女の二つの生活物質は太陽曆に依存して居ることが示されると。しかし外部の力の作用が、殊に植物界に於て、それの生命表現をその時々の出來

事に於て如何に容易に且つ包括的に變化し得、且つ生命を促進し禁止し得ることとの觀察は、フリースの主張に反對し、尠くとも氏が建設せんと求めた法則の普遍性を疑はしむるやうになる。

ワイズマン（A. Weismann）の著書（千八百八十二年、生命の持續に就て、千八百九十二年、生殖細胞等）に於ける死と生命の持續に就ての議論は吾人に取りて非常に興味がある。氏は生活物質に可死の部分と不死の部分とがあるとする。可死の部分は狭義の身體即ちSomaで、それのみが自然の死に遭遇するものである。ところが生殖細胞の方は潜勢的に不死で、有利な條件の下では新しい個體に發達することが出來る。換言すれば新しい身體を以て自身を取りまくことが出來るといつて居る。

茲に吾人の注意を引く點は、全く異つた思想の進路を取つて發達した吾人の概念とワイズマンのそれとに豫期しない類似がある點である。生物形態學的見地から生活物質を考察するワイズマンは、その物質の中に死の犧牲になる成分即ちSomaを認め、且つそれを性的又は遺傳的要素から區別して考へ、他方に不死の部分、即ち生殖細胞があつて、種族保存即ち繁殖の目的に役立つと考へた。これに反して吾人は氏の如く生活物質のみに注意を固定せず、尙その内部に働く力に

も注意し、二種の衝動を區別するやうになつた。即ちその一は死の衝動で、生命を死に導くことを目的とし、他の性の衝動は絶えず生命の更新に努力し且つその更新を持來たすものである。從つてこれはワイズマンの生物形態學的原理の動的推論であるやうに見ゆる。

しかしこの重大なる一致點は、ワイズマンの死の問題に就ての主張を吟味すると、直ちに消失する。蓋しワイズマンは多細胞有機體に就てのみ可死の身體細胞と不死の生殖細胞との區別を許し、單細胞動物に於ては兩種の細胞が同一であるとする。從つて氏は單細胞動物は潜勢的不死であると確信し、死は多細胞動物にのみ表れると述べて居る。而してこの高等の有機體の死は自然のもので、內部原因からくるものであると考へ、死は生活物質の根本特質によるものでなく、又生命の本質に基いた絕對的必然のものと考へない。死は寧ろ合目的に計畫されたもので、生命が外部條件に順應する現象である。蓋し細胞が身體と生殖とに分化された後には、個體の生命が、無限に永續することは、全く不當な贅澤になつたからである。多細胞有機體に於けるこの分化の出現と共に死が起り、且つ便利になつた。それ以後は高等有機體の身體は一定期間の後、內部原因から死ぬるやうになり、單細胞動物は不死に殘るのである。他方に繁殖は最初死と共に輸入さ

れなかつた。それは反對に生長と同じく生物の根本特質である。而して生命はこの地球上に表れた最初から中斷されずに、つづいて存在したのである。

自然の死を高等有機體に認むることの主張が、吾人の議論に補助を與へないことは容易に知られる。死は生物が後になつて獲得したものであるとすれば、死の衝動をこの地球に生活をなし初めた時まで泝ることとは最早問題にならない。多細胞動物は分化の缺陷や代謝機能の不完全による内部原因から死をつづけるかも知れない。而してそれは吾人が從事して居る研究に對し何等の與味を與へない。死に就てのかかる概念とそれより生じた考察は、通常人の見解に一層接近するもので死の衝動といふ前例のない假定には確かに適しないものである。

私の考へによると、ワイズマンの主張に關する議論は何れの方面にも決定的結果を與へなかつた。多くの學者は死が繁殖の直接の結果であるとしたゲッテ(Goette. 1883)の見地に復歸した。ハルトマン(Hartmann. Tod und Fortpflanzung. 1906.)は死體、卽ち生活物質の一部分の死の表れが死の特質であると考へず、個人的發達の終局が死であると定義する。この意味に於て、單細胞動物も死すべきであるが、しかしそれは死と繁殖とが常に一致し、謂はば死は繁殖により

て覆はれて仕舞ふものである。蓋しこの場合には母體の全物質が新しい個體の中に直接に攝取されるからである。

研究の興味が單細胞動物に於ける生活物質の不死を實驗的に吟味する方に向つた。米人ウッドラフ(Woodruff)は、二つの個體に分裂する事によりて繁殖する纖毛ある滴蟲Pantoffeltierchenを取りて培養し、その分裂して生じた一つを孤立せしめ、それを新しい水の中に置いた。而して氏が實驗を止めた時には實に三千二十九番目の世代までの繁殖を觀察した。最初の滴蟲の最後の子孫は、その最初の祖先と等しく活潑に生活し、老齡とか退化とかの何等の徵表をも示さなかつた。然しかかる數が信頼し得べきものとすれば原生動物の不死は實驗的に證明され得るやうである。

しかし他の研究者はこれと異つた結果に到達した。モーパス(Maupas)コルキンス(Calkins)等はウツドラフに反對して、これ等の滴蟲は一定數の分裂の後には弱くなり、大さを減じ、組織の一部を失ひ、或强壯にする作用に遭遇しなければ、遂に死に至ることを發見した。これによると、原生動物は高等動物と同じく老衰した後に死滅するもので、ワイズマンが死は生物の後期の

獲得であると主張したことと全く相反して居る。

これ等の研究結果からして、吾人に確實なる根據を與ふる事實は二つあることに氣が付く。第一は若し微生物が老齡の徵候が未だ表れない時に他の微生物と結合し、配合する——後で再び分れる——機會を有するならば、彼等は老衰することなく若返りをすることである。この配合は疑ひもなく高等動物の性的繁殖の原型である。しかし微生物の配合は繁殖とは何等の關係はなく、單に二つの個體の物質の混合である。配合によりて再び元氣を囘復することは他の刺戟の樣式、例へば培養液の成分の變化、溫度の高上、震搖等によりて置換へることが出來る。卽ち吾人はロエブ（J. Loeb）の有名な實驗を囘想する。氏は海膽の卵に化學的刺戟を與へて、通常受胎作用の後に於てのみ生ずる分裂過程を引起すことが出來た。

第二に滴蟲は彼等自身の生活過程を終つた後に、自然の死に赴くことは結局眞實らしく思はれる。蓋しウツドラフと他の研究者との間の矛盾は、ウツドラフが一々の世代のものを新鮮な培養液の中に置いたことから生じて居る。彼がさやうにしなかつた時には、他の研究者と同じく各世代のものが老衰の徵候を示すことを觀察した。それで氏は微生物は周圍の培養液中に放出した代

謝機能の產物によりて害せられることを結論し、且つ彼自身の代謝機能の產物のみが、その者の死を引起す效果のあることを確實に證明することが出來た。卽ち血緣の遠い者の老廢物を以て滿された液中では立派に若返へるが、彼自身の老廢物のある液中に置かれると直ちに死んでしまつた。かやうに滴蟲は同一液中に放任されると、自己の代謝的產物の不完全の配置によりて、自然の死を招く。恐らく凡ての高等動物もこれと同一の狀態から死に至るのであらう。

玆に於て原生動物の研究に於て、自然の死に關する問題の決定が果して何等かの役に立つたかとの疑ひを生ずる。これ等の生物の原始的組織は、彼等の中にある重要なる條件を吾人に隱して居るかもれない。而して形態學的表現を作り出すに至つた高等動物に於て初めてその條件が認められるかも知れない。然し吾人が形態學的見地を棄てて動的見地に立てば、原生動物の自然の死が證明され得ても、又得なくても、吾人に取りては全く無關係である。それ等の動物に於ては後に不死のものと認められた物質が可死の部分から分離されて居ない。生命を死に導かんと努むる衝動力は最初から動物の中に働いて居たかも知れない。しかしその作用は生命を保存せんとする力の働きによりて覆はれてしまひ、その爲にかかる作用が存在するとの直接の證據を示すことが

困難になつたかも知れない。生物學者の觀察はかやうな死に導く內部過程が、原生動物にも存在するとの假定を許すと、吾人は聞いて居る。しかし原生動物がワイズマンの意味に於て不死であると證明されても、死は後期の獲得であるとの氏の主張は、死の外部の表現のみに適用され、死の方へ强迫する過程の存在を否定するものでない。玆に於て生物學が死の衝動の認知を全く否定するであらうとの吾人の豫期は充たされなかつた。吾人の主張をなすのに、尙他の理由が存在するとすれば、吾人はその主張の可能を尙一層硏究することが出來る。ワイズマンの身體細胞と生殖細胞との區分と、吾人の死の衝動と生命の衝動との區分との間に驚くべく類似が毫も破られずに存在し、しかも尙その價値を保存して居る。

吾人は暫く衝動生活の二元的概念に就て考察して見よう。生活物質の過程に就ての、ヘリング(E. Hering)の原理によると、二種の相反過程、卽ち同化——建設と異化——崩壞とが絕えず行はれるとする。然らば吾人はこの生活過程の二つの方向の中に、生命衝動と死の衝動との二つの活動を認めることが出來るであらうか。而して死は生命の眞の結果であり從つて生命の目的は死であるが、性の衝動は生きんとの意志の權化であるとのショーペンハウエル(Schopenhauer)の

哲學の港に吾人は思はず漕ぎつけたことを伴ることは出來ない。

吾人は大膽に尙一步進んで見よう。一般の意見によると、多數の細胞が一個の生命結合體に結びつくこと、卽ち有機體の多細胞的なことは生命の持續を永くする手段である。一の細胞は他の細胞の生命を保存する助をなし、單一の細胞ならば死滅しなければならない時でも、細胞の社會は生存をつづけることが出來る。二個の單一細胞體が配合され、又は一時的に結合されても兩方に保存と若返りの結果を持來たすことを吾人は旣に聞いて居る。その結果精神分析によりて生じたリビドーの原理を細胞相互間の關係に轉移することが出來るかも知れない。各々の細胞の中に働く生命又は性の衝動は、それの對象として他の細胞を取り、その爲に刺戟されて死の衝動は一部分中和され、その細胞の生命は保存される。又他の細胞も自身の爲に、同樣のことを行ひ、或はリビドー的機能の爲に自己を犧牲にすると假定することが出來る。生殖細胞は又全く自己愛的(narzisstisch)に行動する。そのことに就ては個人が自我に彼のリビドーを向け、彼以外のものを對象としないといふ神經症患者の原理の中に屢々記述した。生殖細胞は後の偉大な建設的活動に對する準備としてリビドー卽ち生命衝動の活動を必要とする。有機體を破壞する惡性の腫物た

る細胞は同じ意味に於て自己愛的であると考へることが出來る。病理學は腫物の核を生來的のものと見なし、それは胚芽的屬性を有すと考へて居る。かやうに吾人の性衝動のリビドーは凡ての生物を結合するもので、詩人や哲學者のいふエロス（Eros）と一致する。

この點に於て吾人はリビドー說が漸次に發達した過程を吟味する機會を得た。轉移神經症の分析をすると、對象の方に向けられる性衝動と、不完全に知られ且つ恐らく自我衝動であらうと言はれる他の衝動との間の對立に氣がつく。それ等の中で個體の自己保存を助ける衝動が第一に認知される。その他の如何なる區分がこの場合になさるべきかは知ることが出來ない。衝動の共通性質と衝動間の可能的相違に就て大體の理解を得ることほど、健全な心理學の建設に對し必要な知識はないであらう。しかし何れの部門の心理學も、衝動の問題ほど暗中摸索をしたものはなかつた。何れの者も彼の欲するだけ多くの衝動、又は根本衝動を排列し、恰も古代希臘の哲學者が地・空氣・火・水の四元素を取扱つたやうに、それ等の衝動を整理した。衝動に就て或種の假說を棄てることの出來なかつた精神分析學は、飢と愛との語によりて示される、通俗の區別を先づ第一に捕へた。それは少くとも新しく任意に作り出したのではない。この區別によつて精神神經

症の分析の際相當な部分を適當に言表すことが出來た。性慾(Sexualität)の概念——それに又性衝動の概念——は繁殖の機能の中に屬しない多くのものをも包括するやうに擴大されなければならなかつた。それが爲に嚴格であり優秀なる、或は單に僞善的な世人から喧しく反對されるに至つたのである。

精神分析學が心理的自我に少しく接近することが出來た時に、次の階段を生じた。その自我は最初抑壓し監視する作用であり、防禦を構成し、反動を形成することの出來るものとして認められた。批判的のものや達見をする人々は、對象に向けられた性衝動の力にまでリビドーの概念を狹めることに對し長い間烈しく反對した。しかし彼等はどこからこの十分な理解が得られたかに就ては少しも言はず、又精神分析學に對し價値ある何物かを引出すことも出來なかつた。考察が進められるに從つて、リビドーが如何に規則正しく對象から退き、自我の方に向ふ(内向)かが精神分析的觀察から知られ、又子供に於けるリビドー發達の研究によりて、自我はリビドーの眞の且つ根原的貯水池で、そこから初めて對象の方に擴がることが明白になつた。自我はそれ自身を性的對象の一つとし、且つそれが對象の中で最も選擇されたものであると直ちに認めた。リビ

ドーがかやうに自我に固着する場合が自己愛的と名づけられる。(Zur Einführung des Narzissmus. Ges. Schriften. Bd. VI)この自己愛的リビドーは分析的意味に於ては、性衝動の力の表現であつた。而してそれは最初から存在を許されて居た、自己保存の衝動と同一視されなければならぬものである。從つて自我衝動と性衝動との間の根本的對立は不適當になつた。自我衝動の一部がリビドー的のものとして認められ、自我の中に性衝動が働くやうに考へられる。(恐らくこの働は他のものの働に加つて現れるのであらう。)それに拘はらず、自我衝動と性衝動との間の爭鬪から精神神經症は生ずるとの古い主張を今日排斥する必要はない。只この二種の衝動の差を、最初は幾分質的の相違と假定したが、今日では異つた仕方、即ち部位的(topisch)相違として定義されなければならぬ。特に精神分析的研究の眞の對象たる轉移神經症は、自我とリビドー的對象の充積との爭鬪の結果であると見られて居る。

吾人は自己保存の衝動のリビドー的性質を尙多く强調しなければならぬ。蓋し吾人は凡てのものを支持するエロスとして性衝動を認めるやうに考察を進め、且つ身體細胞と相互結合をして居るリビドーの總量から自我の自己愛的リビドーを引出すことを認めるからである。しかし玆に於

て吾人は突然次の問題に遭遇する。自己保存の衝動がリビドー的性質のものであれば、恐らく吾人はリビドー的のもの以外の衝動を全く有しないであらうと。この場合に少くともリビドー以外の衝動のやうに見ゆるものは存在しないことになる。その爲に精神分析學は、凡てのものを性慾で説明すると批判し、或はユングの如き改革者は、リビドーを衝動力（Triebkraft）と同意味のものとして一般に使用するやうに迅速に決心したと批判することは正當であると許さなければならぬ。それはさうでないか。

以上の如き結論を吾人は全く期待して居なかつた。反對に吾人は自我衝動（死の衝動）と性衝動（生の衝動）との間に明確な相違のあることを最初に考へた。吾人の見解は最初から二元的であり、今日は尙一層以前よりも强く二元的に考へて居る。蓋し吾人は最早自我衝動と性衝動との對立を言はずして、生命衝動と死の衝動とを對立させるからである。之に反してユングのリビドー說は一元的である。彼はリビドーの術語を唯一の衝動力に用ひたが、それは混亂を引起すに相違なく、從つて吾人はそれに影響されないやうにしなければならぬ。吾人は自己保存の衝動以外の衝動が自我の中にあると假定するが、吾人はそれを證明することが出來なければならぬ。しか

し不幸にも自我の分析は殆ど進歩して居ないと言つてよく、從つてこの證明は、非常に困難である。自我のリビドー的衝動は、吾人が未だ何も知らない他の自我衝動と特殊の仕方に結合して居るかも知れない。吾人が明白に自己愛を認めたことは、それ以前に、精神分析者の心中に自我衝動がリビドー的成分を自身の方に引入れたのであらうと推測して居たからである。しかしそれは全く不確實な推測であるから、反對者は何等の考慮をそれに拂はなかつた。今日までの分析の結果は單にリビドー的衝動の存在を證明する地位に吾人を置いたといふだけである。故に他の衝動がないとの結論に吾人は賛同したくない。

　今日衝動說は不明であるから、幾分でも光明を與へるやうな觀念を排斥することは善くない。吾人は生命衝動と死の衝動との間の對立を吾人の出發點とした。對象愛は第二の兩極性、即ち愛（溫情）と憎（進擊）との兩極性を示して居る。若し吾人が此等の二つの極性を、相互に關係づけるやうにし、一方を他方から辿ることが出來るやうになれば、如何なる結果を得るか。吾人は永い間性の衝動のサディズム的（sadistisch）成分を認めた。（Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. 1905 以後）吾人が知る如くに、その成分は獨立的に働くことが出來、變壞（Perversion）

として人間の全部の性的傾向を支配する。それは私の所謂前性器的(Prägenital)有機體の一の中に優勢な部分衝動として表れたものである。しかし對象を傷けることを目的とするサディズム的衝動が、生命を支持するエロスから如何にして生じたのであるか。このサディズムは、自己愛的リビドーの作用によりて自我から分離した死の衝動で、それは對象に對してのみ働を示すとの假定が暗示されないであらうか。それでこの衝動は性的機能に使用される。リビドーの口脣組織階段(orale Organisationsstadium)に於ては、愛の占有は對象を絶滅することと同一である。その後サディズム的衝動は分離し、遂に性器的主期の階段に於ては、それは繁殖の目的と共に性行爲の實行が要求するだけ性的對象を征服する機能を司るやうになる。自我から排斥されたサディズムは性衝動のリビドー的成分の案内役として働くと言ひ得る。而してその後それは對象の方に迫つて行く。最初のサディズムが減退されず、又他のものと融合されない場合には、よく知られた愛情生活に於ける愛と憎の竝存性が生じてくる。

若し如上の假定が承認されるとすれば、死の衝動の例、殊に轉移した例を示すことの要求に應ずることが出來る。しかしこの概念は直觀から遙かに離れたもので、全く不思議な印象を與へる

ものである。如何なる價を拂つても、吾人は大なる困難から脫れようと求めて居ると疑はれるかも知れない。しかしその假定は、困難脫出の疑ひを受ける前に已にその假定をしたもので、決して新しい假定でないといふことによりて、如上の疑に對して辯護することが出來る。臨床的觀察によると、サディズムの補充をなすマソヒズムの部分衝動は、サディズムが自我の方へ後戻りしたものと解しなければならぬ。しかし衝動が對象から自我へ後戻りすることは、自我から對象へ轉ずることと本質上同一である。而して自我から對象へ轉ずることは全く新しい觀念である。衝動が自我の方へ向ふマソヒズムは、實際に於て早期の狀態に復歸すること、即ち退行である。その際マソヒズムに就て述べたことは、餘りに絕對的である爲に、少しく訂正する必要がある。即ちマソヒズムは一次的のものであると言ひ得るが、私は嘗てそれを否定せんとしたのである。*

* この思索の大部分は既にスピールライン（Sabine Spielrein; Die Destruktion als Ursache des Werdens. Jahr. f. Psychoanalyse. IV. 1912）によりて豫示された。この論文は非常に價値ある材料と觀念とに滿ちて居るが、私には全く明瞭でない。氏はサディズム的成分を破壞的であると考へる。尙シユテルケ（A. Stärcke; Inleiding by de vertaling von S. Freud, De Sexuele beschavingsmoral

etc., 1914) は、他の方面よりリビドーの概念を死への衝動の生物學的概念と一致させようと試みた。尤もこれは理論に基いた假定に過ぎなかつた。(Rank : Der Künstler 參照) これ等凡ての企ては、本書にある如く、吾人の未だ知らない本能説を明かにすべき必要を示して居る。

しかし生命を支持する性衝動に歸りて述べよう。二つの個體が結合して後分離することにより二つの個體が强力になり若返りすると同じく、二つの個體が結合しただけで分裂しなくても强力になり若返りすることを吾人は原生動物の研究から學んだ。原生動物の子孫には退化の徵候がなく、彼等自身の代謝作用の有害なる結果を永い間防禦する力を得るやうに見ゆる。この一の觀察は性的交接の結果の一原型と考へてよいと私は思ふ。しかし僅か異なる二つの細胞の融合が如何なる仕方に於て、かやうな生命の更新を生ずるか。原生動物の中の結合が化學的又は機械的刺戟の作用によりて置換へられ得るとの實驗は、それが新しい刺戟量の導入から來るとの確實な回答を吾人に與へる。このことは、個體の生命過程は內部の原因によりて化學的緊張を緩和すること、卽ち死に導くこと、之に反して個別的に相違せる生活物質の結合はこの緊張を增加し、謂はば新しい生命力の相違 (Vitaldifferenze) を生じ、再び生き永らへなければならぬことの假定と

全く一致する。この相違には一つ又はそれ以上の適量があるに相違ない、心的生活、並に神經生活を支配する傾向は、緊張の輕減に努め、不變の水準を保ち、內部の刺戟の緊張を除去すること（バルバラ・ロウの言に從へば涅槃 Nirwana の原理）に努力することを吾人は認知する。その努力は恰も快の原理の中に表れる努力の如きもので、吾人が死の衝動の存在を信ずる最も强い動機の一つである。

死の衝動の探求に初めて吾人を向けた反復强迫の特質を、性衝動の場合の如く證明することの出來ないといふ不安の感が、吾人の議論の進みを妨げる。胚芽的發達過程の中にかやうな反復過程を示すものが多いことは眞である。卽ち性的繁殖を目的とする二個の生殖細胞とそれ等の發達史とは、有機的生活の最初を反復して居るに過ぎない。而して性衝動によりて企てられる過程の主なる樣式は二個の細胞の結合である。その結合によりて初めて高等生活體に於ける生活物質の不死が確保されるのである。

換言すれば性的繁殖の起原と性衝動の發生に就て吾人は硏究しなければならぬ。而して此等の問題に就ては門外者は硏究を躊躇し、專門家ですらこれまで解決することが出來なかつた。それ

で吾人の思想の進みに何等かの關係を有する凡ての相反せる說明や意見の中から、短く拔萃をして見よう。

　繁殖の問題を生長現象の一部（分裂、發芽による增加）として叙述する見地は、その神祕的な魅惑を失つて居る。性的に分化された生殖細胞によりて繁殖を生ずることは、眞面目なダーウインの思考樣式に從つて、次の樣に考へることが出來る。卽ち二つの原生動物の偶然の結合から生ずる他種混合(Amphimixis)の利益を、その後の發達の爲に支持し、利用する一方法であるといふことが出來る。* 性は極めて古いものでない。性的結合を目的とする非常に力强き衝動は、嘗て偶然に生じ、それ以後有利なものとして固定されたものを反復するものである。

* ワイズマン(Das Keimplasma,)はこの利益を否定する。曰く。受胎作用は生命の更新を意味しない。卽ちそれは生命の延長に必要でない。それは二つの異なる遺傳傾向の融合を可能ならしむる企に過ぎないと。倘氏は生活體に於ける趨異の增加は、かやうな融合の結果であると考へる。

死に關して生ずる如くに同一の問題が起つてくる。卽ち原生動物は彼等が示す所のもの以外に何物かを有すと言ひ得るか。高等動物の場合にのみ認められる力や過程は、最初原始動物の中に

生じたと假定し得るか。上に述べた性慾に就ての見解は、吾人の目的に對して少しの補助をも與へない。最も單純な生活形式の中に作用する生命衝動の存在を假定することに反對する者があるかも知れない。しかし若し反對するとすれば、生命の滅亡を防ぎ、死の作業を一層困難ならしむる配合が保存されず又精錬もされないで、却つてそれを回避するに至るであらう。故に若し吾人が死の衝動の假說を棄てないとすれば、最初から死の衝動は、生命衝動と結合して居ることになる。しかし吾人はこの場合に二つの未知數を有する方程式を取扱ひつつあることを許さなければならぬ。性の起原に就て科學は吾人に何も示すことが出來ない爲に、この問題は、假說の光ですら通らないやうな暗黑に等しきものになつて居る。しかし他の方面に於て吾人はかやうな假說に遭遇するが、しかしそれは科學的說明よりも寧ろ神話ともいふべき空想的のものである。從つてその假說が吾人の努力して要求して居る一の條件を精密に滿さなければ、それを採用するだけの勇氣を私は有しない。卽ちその條件といふのは、以前の狀態を復活する必要からその衝動を生じたといふことである。

勿論私はプラトーンが「對話篇」の中に、アリストフアネスをして言はしめた原理を茲に引用

する。而してその原理は性衝動の起原のみならず、それの對象に關する最も大切な種々の趨異をも取扱つて居る。曰く「人間の性質は嘗ては今日と全く異つて居た。最初は三つの性があつた今日のやうに二つでなく三つあつた。男と女との外に第三性があつて、それは男女性的（Mann-weibliche）のもの、即ち男性と女性との結合したものであつた。この人間には凡てのものが二重で、四つの手と四つの足、二つの顏と二つの性器を有して居た。その後ツオイス神は、吾人が料理の際梨子を二つに割るやうに、その人間を二つに切り離すやうに薦められた。凡ての本質がかやうに二つに分けられた時に、一方の半分の者は他方の半分のものを慕ふやうになり、二個の半分は抱擁し、彼等の身體に絡まり、再び一緒に生長しようと望んだ」と。*

* 私はウイーンのゴンペルツ教授（H. Gomperz）より、このプラトーンの神話の起原について次の話を聞いた。この話の一部を氏の述べた通りの言葉で抄錄しよう。私はプラトーンの神話と本質上同じやうな話をウパニシヤッドの中に發見したことに注意を向けたい。Brihad-Āranyaka-Upanishad, I, 4,3. には世界は Atman（自己又は自我）から創造されたと述べて、次の句がある。「アートマンは何等の快樂をも經驗したことがなかつた。その爲に何人でも一人で居る時は快樂を有しなかつた。それで彼は對手を

望んで居た。彼が對手と抱擁した時、男と女とを合せた位の大きさになつた。それで彼は自身を二つに割つて、夫婦を造つた。それでこの身體は、Yajnavalkya によると、自己の半分である。これと同じ理由で、この不足の部分は婦人で充たされるやうになつた。」

Brihad-Āranyaka-Upanishadは凡てのウパニシャッドの中最古のもので、專門家でも西曆紀元前八百年以後のものと言つて居ない。現在多くの人の信ずる事には反對で、私はプラトーンが彼の對話篇を作るに當つて、これらの印度思想に假令間接にでも據つたといふことを確實に否定することを好まない。何となれば、それは靈魂浮游說に對しても全然除外できないからである。プラトーンがこれによつたといふことは、最初ピタゴラスの言ひ出したことであつた。思想が偶然にも一致したとの意義はそれによつて失はれない。何となればプラトーンは何等かの手段によつて東洋の傳說から、かかる物語を採用したとは思はれない。しかしこの言葉が重要なる意味を持つて居ることを考へると、彼がその中に含まれる眞理を知らなかつたとは言へないやうである。

チーグラー（K. Ziegler；Neue Jahrbücher für das klassische Altertum, Bd. 31. 1913)はこの思想の組織的研究をなして居る。これによりてバビロン人の觀念を辿ることが出來る。

吾人はこの詩人哲學者の暗示に從つて、生活物質はそれが生を受けた時に小さい分子に分割され、その分子はその後性の衝動によりて再び結びつかんと努めて居ると假定すべきであるか。生命なき物質の化學的親和力が尙持續して居る性衝動は、原生動物の領域を通過して、生命を脅かす刺戟に滿ちた環境からの凡ての妨害に漸次に打勝ち、而して保護層を形成するやうに强ひられたと假定すべきか。而して生活物質のこれ等の分離せる部分が多細胞有機體を作り上げ、遂に非常な集中した形式に於て再結合を欲する衝動を生殖細胞に轉移するに至つたと假定すべきか。私はこの邊で思索を中止すべきであると考へる。

しかし二三の批判的反省を述べて結論に達しよう。玆に述べた見解を私自身は確信して居るか否か、又若し然りとせばどれだけ確信するかと尋ねる人があるかも知れない。それに對し、私は自身に確信しても居ないし、又他人に確信を引起すやうに求めても居ないと答へたい。尙精密に言へば、私はどの位その事を信ずべきかも知らない。確信といふ情緒的成分はこの場合に全く考へる必要はないと私は思ふ。吾人は思想の線に自身を投じ、それの導くだけ從つて行つて差支へない。而してそれは邪路に陷ることなく、單なる科學的好奇心又は單なる思索から從つて行くの

である。茲に私が述べて居る衝動說の第三の主張は、前の二つの主張、卽ち性の概念の擴大と自己愛の建設ほどに確實でないことを十分信じて居る。この新しい主張は觀察を直接に原理に飜譯したもので、この種の凡てのものに免れ難い誤謬を有して居る。衝動の退行的特質の主張は反復强迫の事實を觀察して得た材料を基礎として居る。しかし恐らく私はこの症狀の意義を高く評價し過ぎたかも知れない。かかる觀念を作り上げるには純粹な想像と事實とを度々結びつけることより以外に方法はない。しかしその爲に觀察から離れるといふことがある。從つて原理を構成するに當りて屢々これを行へば行ふ程、最後の結果の信賴度は減じてくるが、しかし信賴し難い程度を確定することは出來ない。故にこの場合に吾人はすばらしい發見をしたかも知れないし、或は恥づべき誤謬に陷つて居るかも知れない。かやうな仕事に私は所謂直覺なるものを信じない。私がこれに就て發見したものは、知の公平の結果であると思つて居る。只終局の事物卽ち科學や人生の大問題を取扱ふ場合に公平な立場を取ることの尠いことは遺憾である。何れの人も深く根ざして居る偏見の支配を受け、彼が思索をする際にも、不知不識にその手中に置かれて居ると私は信ずる。信ずべき根據の乏しい場合には、僅かの好意でも心的勞力の結果に有效である。しか

しかやうな自己批判は意見の相違を、强ひて寛容されんが爲のものでないことを附言する。觀察を分析する際に、何人も第一に矛盾した原理を强く排斥することが出來る。それと同時にその者の主張する原理が、一時的の效力を有することを認めることが出來る。假りに生命と死の衝動に就ての吾人の思索を評價するにしても、一の衝動が他の衝動によりて排除され、或は自我から對象の方に向ふ等の、驚くべく且つ想像し難い複雜な過程の行はれて居ることから、吾人の評價は少しも妨害を受けないであらう。かやうに過程が複雜に見えることは科學的術語、即ち心理學に特有な比喩的表現（一層深い層の心理學といつた方が寧ろ正しい）を以て取扱ふべく餘儀なくされたことから來て居る。しかしこれ等の術語を用ひなければ深い層の過程を叙述することも出來ないであらうし、又實際に全く認知することもしないであらう。之に反して若し心理學的術語の代りに生理的又は化學的術語を用ゆるならば、吾人の叙述の不十分な所は恐らく無くなるかも知れない。蓋しこれ等の術語は又比喩的言語に屬しては居るが、只長い間吾人の熟知せるものであり、且つ一層簡單なものであるからである。

他方に吾人の思索の不確實が、生物學から材料を借りて來る必要の爲に益々增大してくること

を明瞭にしようと思ふ。生物學は無限の可能性を含んで居る。吾人は生理學が最も驚くべき天啓を齎すことを豫期しなければならぬ。而して吾人が今提出した問題に對し、生理學が加何なる答を數十年の後に與へるかを推測することは出來ない。恐らくそれは人爲的に構成された假設を根柢から覆へすやうになるかも知れない。若し然りとすれば、この論文に述べたやうな業績を何故に企てたか、又何故にそれを世界に公表するに至つたかとの疑問を生ずるかも知れない。しかし私の見る所では本書に於て辿つて來た類推、關係、結合等は考察する價値があるやうに見ゆることを否定することが出來ない。

(註) 吾人の議論の進みに於て或程度の發達を遂げた術語を明白にする爲に、玆に少しく註解を附することにする。性衝動が何であるかといふことを吾人はそれが性と繁殖の機能とに關係することから知つて居る。しかし精神分析の研究をつづけて行くと、繁殖に對する關係が餘り密接でないことを認むるやうになり、吾人は性衝動の術語を保留した自己愛的リビドーの發見と、リビドーの概念を個々の細胞にまでに擴大して用ゆることによりて、性衝動はエロスに變形されて來た。エロスは生活物質の部分を相互に推進せしめ結合せしむるやうに努めるものである。通常衝性動と稱へられるものは、對象の方に向つたエロスの

部分である。吾人の思索によると、このエロスは生命の最初から作用し、無機物が生命を得たことによりて生じた死の衝動に對立する生命衝動として、このエロスは示されるものである。極く初期から相互に努力するこの二つの衝動の假説に基いて、生命の謎を解かんことを吾人は求めて居る。自我衝動の概念が、かやうに變形したことは恐らく調査するに困難であらう。最初吾人は對象を目的とする性衝動と區別し得る凡ての衝動方向に、自我衝動といふ術語を適用し、自我衝動とリビドーとして表はれる性衝動とを對立せしめた。その後自我の分析を進めて行つた處が、自我衝動の一部分はリビドー的性質を有し、それ自身を對象として所有することを發見した。故に自己保存の自己愛的衝動は今ではリビドー的性衝動と考へられなければならなくなつた。かくして自我衝動と性衝動との間の對立は、自我衝動と對象衝動との對立に變つた。而して兩者ともリビドー的性質を有する。しかしその代りにリビドー的(自我と對象)衝動と他の衝動との新しい對立を生ずる。而して他の衝動の存在は自我の中に規定され、且つ恐らく破壞衝動の中に發見され得るやうである。吾人の思索は、この對立を生命衝動(エロス)と死の衝動との對立に變形する。

七

以前の狀態を復活せんとの企てが衝動の一般的性質であるとすれば、精神生活に於ける多くの過程が、快の原理と獨立に行はれると主張しても、決して怪しむに足りないであらう。この特質は一々の部分衝動に表れ、その爲に、生物は發達道程の一定の點に復歸されるやうになる。しかし快の原理が未だ力を有して居ないといふことから、それの原理に反對する必要はない。而して衝動的反復過程と快の原理の支配との關係を決定する問題を吾人は未だ解決して居ない。

心的裝置の最初のもので且つ最も重要な機能の一は、流入する衝動的興奮を束縛することであつた。卽ち、それ等を支配する一次的過程を二次的過程によりて置換へ、自由に流動するエネルギーの充積を主として靜肅な（强壯的）充積に變形することであつた。吾人はこの變形の際に發達する不快に氣がつかない。しかしその爲に快の原理が無效になるとは言へない。寧ろ變形は、快の原理に役立たん爲に起るもので、束縛は又快の原理の支配を導入し、確實にする準備の作用

である。

機能と傾向との區別を吾人はこれまでよりも一層明確にしようと思ふ。快の原理は一定の機能に役立つ爲の傾向である。卽ち、それは心的裝置全體を興奮から免れしめ、興奮の量を不變に又は出來るだけ低く保つやうに補助を與へるものである。吾人はこれ等の概念を未だ確實に決定することは出來ないが、しかしかやうに定義した機能は凡ての生活物質の最も一般的な傾向、卽ち無機世界の平和に歸らんとの傾向を有すと言へる。吾人の到達し得る最大の快、卽ち性行爲の快は非常に高上した興奮狀態を、一時沈靜せしむるものであることを吾人は經驗によりて知つて居る。しかし衝動興奮の束縛は一の準備的機能で、それは放射の快によつて終局の調節を測るやうに興奮を導くものである。

これと聯關して、快と不快の感は束縛された興奮過程からも、又同樣に束縛されざる興奮過程からも生じ得るかといふ問題が起る。束縛されざる一次的の過程が、束縛された二次的過程よりも一層强い快と不快とを生ずることは全く明白のやうに見ゆる。一次的過程は時間的に早いもので、精神生活の初めに於ては、この過程以外のものは存在しなかつたのである。若し快の原理が

その時代の過程に行はれて居なかつたとすれば、その後の過程に於てもその原理は建設されなかつたであらうと結論することが出來る。快を得んとの努力は精神生活の初めの方が後よりも遙かに烈しく表れるが、しかし全く無制限に表れたのでなく、度々中斷されなければならなかつたといふ複雜な結論に吾人は到達する。成熟した時代に於ては快の原理の支配が尙一層確實になつたが、しかし他の凡ての衝動と等しくこの原理も制限を免れることは出來ない。兎も角興奮の過程に於て快と不快の感が何よりて生ずるにしても、この原理は二次的過程の場合に於ても、一次的過程の場合と同じく存在しなければならぬ。

茲に於て尙多くの研究を必要とするやうに見ゆる。吾人の意識は內部より快不快の感を知らせるのみならず、尙それ自身に快か不快かの特殊の緊張の感を內部から與へる。これ等の感の助けによりて束縛せるエネルギー過程と無束縛のそれとを相互から區別すべきであるか。或は緊張の感は絕對量、或は恐らく充積の程度に關係し、快不快の系列は時間單位に於ける充積量の變化に關係するか。吾人は又生命衝動が吾人の內部知覺に非常に關係を有することに驚かされる。蓋し生命衝動は平和の攪亂者として表れ、絕えず緊張狀態を伴ひ、それの解除が快として經驗される

からである。之に反して死の衝動は目立たないやうにその機能を滿たすやうに見ゆる。快の原理は直接に死の衝動を助けるやうに見ゆる。死の衝動は勿論生命と死との衝動によりて、危險と認められる外部の刺戟に對して警戒をする。しかし死の衝動は、特に生命を維持する複雜な仕事を營むを目的とする內部の刺戟の增加に對して警戒をする。この點に於て尙回答を與ふることの出來ない無數の他の問題を生ずる。吾人は忍耐して硏究に對する他の手段と、機會とを待たなければならぬ。吾人は又今まで步いて來た道が正しい結果を導かないとすれば、それを棄てるやうに準備して居なければならぬ。棄てた信條に對する代償を科學から求めんとする如き信仰者は、彼の見解を發達させ、又は改造する如き硏究者を惡く解するであらう。しかし吾人は科學的知識の進步が非常に遲々たることに對して、次の如き詩人リユツケルトの(Rückert ; Makamen des Hariri.)語によりて慰藉を求めることが出來る。

飛行することが出來なければ跛行しなければならぬ。
跛行は罪にならないと聖書は敎ゆる。

集團心理學と自我の分析

一　序　言

個人心理學と社會又は集團心理學との對立は一見すると極めて明白のやうであるが、しかし一層精密に吟味して行くと、その區別が曖昧になつてくる。個人心理學は個々の人間を取扱ひ、彼が如何なる道によりて衝動の滿足を求めるかを明かにするものであることは眞である。しかし個人心理學が個人と他人との關係を無視することは極めて稀に且つ例外的の場合である。一個人の心的生活の中には他の個人が模範として、對象として、補助者として、反對者として必ず考察されるもので、從つて個人心理學は最初から同時に廣義の社會心理學であり、且つ正當な意味に於ける社會心理學である。

個人が兩親、兄弟姉妹、愛の對象、教師、醫師に對する關係、卽ち精神分析的研究の主なる題目となつて居る凡ての關係は、社會現象として考察されることが出來る。この點に於てこれ等の關係は自己愛として叙述される一定の過程と對立して居る。蓋し自己愛に於ては、衝動の滿足が

一部分、或は全く他の人間によりて充たされることがないからである。故に、社會的と自己愛的（ブロイエルが内觀的 „autistisch" と名づけたもの）との心的行爲の對立は、全く個人心理學の範圍に屬するが、しかしそれを社會又は集團心理學から分離することは適當でない。

既に述べた兩親、兄弟姉妹、愛人、朋友、教師、醫師との關係に立つ個人は、彼に取りて最も大切となつた一人の人や極く少數の人々の影響を被むる。社會又は集團心理學に於ては、通常前述の如き一方面の關係を研究の對象とせず、多數の人々によりて個人が影響を被むることを引拔いて研究の對象にする。而して、その多數の人々は或事件の爲にその個人と結合するが、その事件以外のことでは多くの點に於て未知人であるかも知れない。故に集團心理學は種族、國民、階級、職業、施設の一員としての個人、或は一定の目的の爲に一定期間集團を構成した人々の集りの成分としての個人を取扱ふ。自然の結合がその仕方に於て分離する時には、これ等の特殊の狀態の下に特殊の衝動が表れたものと容易に認知することが出來る。而してその特殊の衝動は、それ以上に還元することも出來ず、又他の狀態に於ては表れて來ない社會的衝動（群集衝動、集團精神）である。しかし他の條件では生じない新しい衝動を、吾人の精神生活の中に生じ得る程重

大な現象を幾つかの成分に歸することは困難であるやうに見ゆると、吾人は批判し得るかも知れない。從つて吾人がこの場合に可能を豫期し得ることは二つで、第一は社會的衝動は原始的のものでなく、分析し難きものでないこと、第二は家族のやうな一層狹い範圍に於て社會的衝動の發端を發見し得ることとである。

集團心理學は未だ搖籃時代ではあるが、無數の個々の問題を有し、且つこれまで相互から區別されなかつた多くの問題を研究者に提供する。集團構成の種々の形式の單なる分類、及び集團によりて示される心的現象の敍述とは多くの觀察と解釋とを必要とし、已に多くの文獻が與へられて居る。この小冊子の狹い範圍と集團心理學の範圍とを比較する人は、全體の材料の中から一小部分が選ばれて、玆に取扱はれて居ることを直ちに推定するであらう。實際玆では精神分析學の深奥の研究と特に關係ある二三の問題を取扱ふことにする。

二　集團心に就てのルボンの敍述

茲に遙かに有益な仕事は、最初に定義を下すことでなく、先づ今論ぜんとする現象の範圍に關する二三の指示から初め、更に吾人の研究に關係ある二三の特に著しく且つ特質ある事實を選び出すことである。而してこれ等の二つの目的を達するには、吾人はルボンの有名なる著書「群集心理學」から引用しなければならぬ。

今一度事實を明白にしよう。若し素質、衝動、動機、個人の行動の目的、彼に最も接近せる者との關係に就て、心理學が完全に研究し盡し、これ等の事實並にそれ等の關係を明白にしたとしても、尙これまで解決されてない新しい任務が心理學の上に突然表れてくるであらう。卽ち一定の條件の下では、個人は豫期されたと全く異つた仕方に感じ、考へ、行ふといふ驚くべき事實を心理學は解釋しなければならぬ。而してこの一定の條件とは、心理的集團の特質を有する人間の集合の中に入り込むことである。然らば集團とは何か。かやうな決定的影響を個人の精神生活の上に及ぼす力を、集團は如何にして獲得するか。集團が個人に强ゆる心的變化の本質は何であるか。この三つの問題に答へることが、理論的集團心理學の任務である。而してそれ等の問題に近よる最良の方法は、明かに第三の問題から出立することである。個人の反應が變化することの觀

察は、集團心理學に材料を提供するものである。蓋し何れの事物の説明を企てるにしても、それを説明する前に叙述しなければならぬからである。

今ルボンの言葉を引用しよう。曰く、「心理的集團によりて示される最も著しき特質は、次のやうなことである。集團を構成する個人は誰であつても、彼等の生活様式、職業、性格、智能が如何に類似又は相違して居ても、彼等が一の集團に變形されたといふ單なる條件によりて、一の集合精神を有するやうになる。この集團精神の影響の下に彼等が感じ、思考し、行爲する仕方は、各個人が孤立の狀態に於て感じ、思考し、行爲する仕方とは全く異つて居る。集團に屬する人々の觀念と感情とは個人がその集團を構成しない場合には表れもせず、又行爲に變ることもないものである。心理的集團は異質の要素から形成された一時的のものである。かやうに要素が一定時間結合することは、恰も生物を構成する細胞が結合によりて新しいものを形成し、一々の細胞の有したものと全く異つた特質を示すと同一である。」

この處でルボンの主張を中止して、吾人自身の解釋を述べ且つ一の觀察を挿入しようと思ふ。若し集團中の個人が統一體に結合するならば、彼等を結合せしむる何物かが確かに存在しなければ

ばならぬ。而してこの結合物は集團の特質となつて居るものと全く同一であるかも知れない。しかしルボンはこの問題に答へて居ない。氏は個人が集團の爲に被むる變化を考察し、吾人の奧祕心理學 (Tiefenpsychologie) の根本假定とよく一致する所の術語を以て、その變化を叙述して居る。

曰く「集團を構成する個人が、孤立せる個人とどれだけ相違するかを確定することは容易である。しかしこの相違の原因を發見することは容易でない。これ等の原因を幾分なりとも發見する爲に、先づ第一に、近世心理學によりて建設された確證を回想しなければならぬ。近世心理學に於ては、無意識現象が有機的生活のみならず、知的行爲に於ても全く優勢な役目をなして居ることを示して居る。意識的精神生活はそれの無意識生活と比較すると一小部分の重要さを有する。最も微細な分析者、最も精密な觀察者ですら、行動を支配する極めて少數の意識的動機を發見して居るに過ぎない。吾人の意識的行爲は主として遺傳的影響によりて心の中に生じた無意識的基礎の產物である。この基礎は種族精神を構成する無數の共通特質から成り立つもので、それは世代から世代へ傳はつたものである。吾人の行爲の明白な原因の後方に、明白でない祕密の原因が

横りて居り、その祕密の原因の後方に尙多くの他の一層祕密な原因が存するもので、それ等の原因に就て吾人は全く無知である。吾人の日常行爲の大部分は吾人の觀察を逃れて居る隱れた動機の結果である。」

ルボンの考によると、個人の特殊の獲得は集團の中に消滅し、その爲に個人間の特質は無くなる。種族的無意識のものが生じ、異質のものが同質のものの中に吸込まれる。個人の中に異化的に發達する心的上部構造は撤囘され、各人に類似せる無意識的基礎が表れてくると。

この仕方に於て集團中の個人は平均の特質を示すやうになる。しかしルボンは各個人が以前に有しなかつた新特質を示すやうになると信じ、その理由を三種の成分に求めた。

「第一の成分は、集團を構成する個人が、本能に從はんとの、打勝ち難き力の感を群集に屬する爲に獲得することである。而してその本能に從ふことは、若し彼が單獨であれば無理に抑壓を加へたものである。彼は集團を假名のものとし、從つて無責任であるとの考へから、彼自身を抑壓することをせず、個人を常に統御する責任の感が全く消失する。」とルボンは言つて居る。

吾人の見解から言へば、新しい特質の出現に對して多くの價値を置く必要はない。個人が集團

の中では、彼の無意識的衝動の抑壓を撤廢する如き狀態に置かれることを言へば吾人に取りては十分である。彼がその場合に示す外見上新しい特質は、實にこの無意識の表現である。而してこの無意識の中には人間精神に於ける凡ての罪惡が、素質として存在して居る。從つてこの場合に良心の表れないこと、或は責任の感が無くなることを理解することは容易である。所謂良心の核は社會的憂慮 (Soziale Angst) であることを長い間吾人は主張した。*

* ルボンの見地と吾人の見解との間に幾分の相違がある。蓋しルボンのいふ無意識の概念は、精神分析學で採用する無意識の概念とは全く異つて居るからである。ルボンの無意識は種族精神の中に深く埋沒せる様式で、それは精神分析の考察以外のものである。吾人は人間精神の古代からの遺傳を有する自我の核、後にエスと名づけたものは無意識であると認めて居る。しかしその外に遺傳の一部より生ずる無意識に抑壓されたものをも認知する。この抑壓意識の概念はルボンの考への中には發見されない。

ルボンの第二の原因は傳染で、集團はそれによつて特殊の表現を示し、同時に集團の取る方向が決定される。傳染は容易に起り易い現象であるが、しかしそれの説明は困難である。傳染は吾人が後に研究せんとする催眠現象に屬するに相違ない。集團に於ける感情と行爲とはいづれも傳

染的で、個人は集合的興味の爲に自己の興味を容易に犠牲にする位に傳染の程度は高い。而してその傳染は個人の性質と反對した力であり、彼が集團の一部となる時以外には作用しないものであると。

吾人は後にこの最後の主張を基礎として重要なる推測をなさうと思ふ。

ルボンのいふ第三の原因であり、且つ最も大切な原因は、集團に屬する個人の中に生ずる特殊の性質で、それは孤立せる個人によりて示される特質と時々全く反對することがある。私はそれを暗示性と名づけるが、上に述べた傳染は暗示性の結果に過ぎない。この現象を理解するには、近世の生理學的發見を心の中に有する必要がある。吾人は今日種々の手續によりて次のやうな狀態を個人が生ずることを知つて居る。卽ちその個人は彼の意識的人格を全く失ふやうになり、その人格を奪つた術者の凡ての暗示に從つて、彼の性格や習慣と全く反對せる行動をするやうになる。極めて注意深く觀察すると、活動する集團の中に暫くの間入り込んだ個人が、集團によりて與へられた磁石的影響又は吾人の知らない他の原因からの結果として、全く特殊の狀態にあるを感ずることが分かる。而してその特殊の狀態は、催眠を施された者が術者の影響の下に感ずる魅

惑によく似て居る。意識的人格は全く消失し、意志と辨別力は失はれ、凡ての感情と思想とは術者によりて與へられた方向に傾いて行く。

心理的集團の部分を構成する個人の狀態も催眠の場合と殆ど同樣である。彼は最早彼の行爲に就て意識しない。彼は催眠を施された者と同じく、彼の或種の能力は一方に破壞されると同時に他の能力はその强度が非常に高まる。彼は暗示の影響によりて抵抗し難き激烈さを以て一定の行動の實行を企てる。その激烈なことは催眠を施された者の場合よりも、集團の場合が一層抵抗し難いものである。蓋しこの場合の暗示は集團の凡ての個人に同樣に作用する爲に、それの相互作用によりて强力となるからである。

意識的人格の消失、無意識的人格の優勢、暗示と傳染とによりて感情と觀念とが同一方向に變ること、暗示された觀念を直ちに實行に變ずる傾向等が集團の一部を構成する個人の主なる特質であることが分かる。彼は最早彼自身でなく、彼の意志によりて導かれることを止めた自動人形になつて居る。

以上ルボンの言葉を私は引用したが、それは氏が集團中の個人の狀態を全く催眠的狀態である

と說明し、二つの狀態の間の比較をしなかつたことを十分に明白にせんが爲である。吾人はこの點に於て反對を叫ばんとの企てはない。しかし集團の爲に個人が變化する原因の中の最後の二つ卽ち傳染と高上せる暗示性とは明かに同格のものでないことの事實を單に强調しようと思ふ。蓋し傳染は實際暗示性の一表現であるやうに見ゆるからである。尙二つの成分の作用はルボンの著書の中に明かに區別されて居ないやうである。吾人が若し集團に於ける各個人相互の作用に傳染を結びつけ、催眠的影響の現象と同等にした集團に於ける暗示の現象を他の原因に歸するならば氏の主張を最もよく解釋することが出來るやうである。然らば暗示の現象を如何なる原因に歸すべきか。二つの現象を比較する際の一の主要點、卽ち催眠の場合に術者の位置を取る人が、ルボンの集團の說明には缺けて居ることを見ると、氏の說明は、不完全であると言はざるを得ない。しかし氏はそれに拘らず、不明な魅惑の影響と、個人相互の上に働き、その爲に最初の暗示が强力になる傳染の影響とを區別して居る。

玆に又集團中の個人を理解するに補助を與ふる他の重要な見解がある。個人が組織團體の一部を構成するといふ單なる事實の爲に、彼の文化の階段が數段下つて行く。彼は孤立せる時には、

一個の文化人であるかも知れないが、群集中の一人となれば、野蠻人、卽ち衝動によりて働く生物になる。彼は原始人の自發性、强暴、殘忍、熱烈、剛勇を有するやうになる。それに又彼は集團に入り込む時に知的能力が降下するのを經驗する。*

*シラーの次の對句を參照せよ。卽ち「獨りで居る時は誰でも可なりに敏捷であり聰明である。彼等が集團中にある時は愚鈍であることを汝は直に發見するであらう。」

今個人精神の說明を離れて、ルボンが述べた集團心に轉じて說明しよう。集團心に表るる狀態の位置竝にそれの原因を究めることに、精神分析學者は何等の困難を感じない。ルボン自身も原始人及び兒童の精神生活と集團心との類似を指摘することによりて、解釋の道を吾人に示して居る。

集團は衝動的であり、變化的で、且つ刺戟され易い。それは、殆ど全く無意識によりて導かれる。*集團の從ふ衝動は、場合によりて、寬大であるか、又は殘忍であるか、勇敢であるか、憶病であるかである。しかしその衝動は個人的興味、自己保存の興味ですら働くことの出來ない位に常に專橫である。それに就て少しも豫め考察されることはない。それは激情的に要求された事項

であつても、決してそんなに長くなく、固執は不可能である。その欲求と欲求の滿足との間に如何なる猶豫をも忍ぶことが出來ない。それは全能の感を有し、集團中の個人に取りては不可能の概念は消失する。**

* この處ではルボンは無意識の語を叙述的の意味に正しく用ひて居る。而してこの無意識は抑壓されたもののみを意味して居ない。

** Totem und Tabu, III を參照。

集團は非常に影響を被り易く、且つ容易に信じ易いもので、批判的能力に缺け、又有りさうもないと言ふことを集團は考へて見ない。個人が自由な想像の狀態にある時の如く、聯想によりて相互に喚起される心像によりて考へ、それと現實との一致を合理的に審判することをしない。集團の感情は常に極めて單純であり誇張されて居る。集團は又疑惑と不確實とを知らない。*

* 吾人が無意識的心的生活に就て最上の知識を得るに至つたのは夢の解釋に基くのであるが、その夢の解釋の中に、吾人は夢の物語には疑惑と不確實とを無視すること、並に顯在的夢の要素を全く確實のものとして取扱ふことの規則に從ふことを述べた。この疑惑と不確實とは夢の作用を支配する監視に基く

と吾人は述べ、且つ最初の夢の思想は、疑惑と不確實とを批判的過程と認めないと假定した。疑惑と不確實とは、その他の内容と同じく、夢に導く日中の殘留物の内容の一部として、現れてくる。(Die Traumdeutung, 7. Aufl. 1922 S. 386 を見よ)。

集團は直ちに極端に走る。若し疑惑が示されても、直ちに論爭し難い確實に變へてしまふ。反感の痕跡は烈しき憎惡に變化する。*

* いづれの情緒も、この場合と同じく極端に强烈になることは、子供の情緒生活の一様式である。それは又夢の生活にも同樣に表れる。無意識に於ては單一の情緒が孤立する爲に、晝間の僅かな苦痛が夢の中では加害者の死を欲求するやうに表れ、又少しの誘惑が犯罪行爲の夢の動力になる。ハンスザックス(Hanns Sachs)はこれに就て適當な註釋を加へて居る。「夢が現在(實在)に關係することを吾人に知らせる場合に、その夢の内容を意識の中に發見せんと試みるならば、分析の顯微鏡の下では怪物として見えた物が意識界では滴蟲として認められる事を驚いてはならない。」(Die Traumdeutung. S. 457.)

集團はそれ自身全く極端に傾いて居るので、過度の刺戟によりてのみ興奮され得る集團に影響を及ぼさんと欲する者は、彼の議論の中に論理的調整を要しない。最も强烈な色で着色し、誇張

し、同一の事を再三再四反復しなければならぬ。

集團は何が眞理であり誤謬であるかに就て少しも疑はず、尙自己の大なる力を意識して居るから、頑迷であり、且つ權威に服從する。集團は力を尊敬し、親切を以て薄弱の一形式と認めて、その爲に影響を被むることは殆どない。集團が勇士に要求するものは强力であり、强暴である。集團は支配され抑壓されることを欲し、叉その主人を恐れる。根本的に集團は全く保守的で、革新とか進歩とかを凡て嫌ひ、傳統を無限に尊敬する。

集團の道德を正しく判斷する爲には次の如き事實を考察しなければならぬ。卽ち、個人が團體に結びつく時には、彼等の個人的禁止が無くなり、原始時代の遺物として個人の中に眠つて居る殘忍且つ破壞的な衝動が、自由な滿足を得んとして覺醒されることである。しかし暗示の作用によりて集團は叉否認、利己的でないこと、理想に專心すること等の高等な行動をなすことが出來る。孤立した個人に於ては個人的興味が殆ど動機の力となるが、集團に於てはそれが極めて稀に行はれる。個人は集團によりて生じた道德的標準を有すと言ふことが出來る。集團の知的能力は常に個人のそれより遙かに低いものであるが、集團の倫理的行動は個人の水準以下に深く沈むこ

とが出來ると同じく、個人の水準以上に高く昇ることが出來る。

ルボンの叙述の他の特質は、集團心と原始人の心とを同一視することが如何に正當であるかに光明を與へて居る。集團に於ては非常に矛盾した觀念が相竝んで存在することが出來、且つそれ等の間の論理的矛盾から軋轢を生ずることなく、相互に我慢することが出來る。しかしこれが個人、子供、神經症患者の無意識的精神生活に於ても生ずることは、永い間精神分析學の指摘した所である。*

* 例へば幼兒に於ては、彼等に最も接近せる人に對する竝存的情緒態度が長い間相竝んで存在し、その中の一方が、對立する他方の表現によりて干渉されることは無い。この二つの間に實際に軋轢を生ずるならば、子供はその對象を變化し、竝存的情緒の一方をその置換へた對象に轉移することになりて、その軋轢の調停を計るものである。成人の神經症の發達史の示す所によると、抑壓された情緒は、屢々永い間無意識の中か又は意識的空想の中に固執する。而してその情緒の內容は優勢なる傾向に直接反對することは自然である。しかしこの反對よりして、自我はその反對するものに干渉するやうなことは全く無い。空想は永い間我慢して靜にして居るが、通常空想に於ける情緒的充積が增加する爲に、突然空想

と自我との間の軋轢が爆發し、全く普通の結果を齎すものである。

兒童から成人へと發達して行く過程に於て、人格の統一が漸次に擴大して行き、子供時代には孤立して居た衝動や目的追求が總括されて働くやうになる。性的生活に於けるこれと類似の過程は、已に長い間吾人に知られて居る所で、凡ての性的衝動は一定の性器の組織に總括されるものである。(Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, 1905)自我の統一がリビドーの統一と同樣な干渉を被ることは、多くの熟知せる例によりて示される。例へばそれは聖書やそれに類似のものを信ずる自然科學者の如き場合である。自我のその後の分裂が種々と生ずることは、精神病理學の特殊の章を構成して居る。

尚集團は言語の眞の魔力に服從する。言語は集團中に最も恐しい嵐を生ずることが出來、又それを靜めることも出來る。理性と論證とを以て言葉と形式に對して戰ふことが出來ない。言葉や形式は集團の面前では壯嚴を以て話される。而してそれ等が發言されるや否や尊敬の表情が各人の顏に表れ、凡ての頭が下げられる。多くの者は、それを以て自然力、又は超自然力であると考へる。この際吾人は原始人に於ける姓名の禁忌(Tabu)と、彼等が姓名と言語とに歸する魔力を回想する必要がある。*

* Totem und Tabu を見よ。

最後に集團は眞理を決して渇望することをしない。彼等は錯覺を要求し、それなくしてはなすことが出來ない。彼等は絶えず現實のものよりも非現實のものに優先權を與へ、眞實のものと同じ程度に非眞實のものによりて影響される。尙彼等は、この兩者を區別しない明白な傾向を有する。

空想の生活、滿足されない欲求から生じた錯覺の優勢なことが神經症の心理學に於ける決定的成分であることを吾人は已に指摘した。神經症患者は通常の客觀的現實によりて指導されることなく、心理學的現實より指導されることを發見した。ヒステリー的徵候は現實經驗の反復に基かず、空想に基いて居る。强迫神經症に於ける罪惡の感は、實行したことのない罪惡の意向に基いて居る。實に夢や催眠に於ける如く、集團の心的活動には、事物の實在を檢査する機能が、情緒的充積を有する欲求の强さと比較して、背景の方に引込んで居る。

ルボンが集團の指導者に就て述べた所のものは十分でなく、それの基礎となる原理が明白にされて居ない。氏の考によると、生物が一定數に結合するや否や、それ等が動物の群であつても、

又人間の集合であつても、いづれも本能的に首長の權威の下に置かれる。集團は主人なくしては生活の出來ない從順な群である。集團は主人に任命した何れのものにも本能的に從ふ所の從順の渇望を有して居る。

かやうに集團の必要が指導者を歡迎しては居るが、しかしその指導者は彼の個人的性質に於て集團に適應して居なければならぬ。彼は集團の信仰を覺醒する爲に、彼自身強い信仰、又は觀念を有して居なければならぬ。又それ自身の意志を有しない集團が彼から受取り得る所の強き且つ著しき意志を彼は有しなければならぬ。ルボンは種々の指導者を論じ、且つ集團に影響を及ぼす手段を述べて居る。一般的に指導者は彼自身が狂信する觀念によりて指導者たるの價値を有するに至るものであると氏は信ずる。

尙氏は觀念と指導者との二つに神祕的な不可抗的の力があるとする。その力を氏は幻術(Prestige)と名づけた。幻術とは一個人、一作業又は一觀念によりて吾人の上に働く一種の支配力である。それは吾人の批判力を全く痲痺せしめ、驚愕と尊敬とを生ずる。それは催眠に於ける魅惑と同じ感情を惹起するやうに見ゆる。氏はこの幻術を獲得的又は人爲的のものと、人格的のもの

とに區別する。前者は彼の姓名、財產、評判によりて個人に結び付いたものであり、又傳統によりて意見や作品等に結びついたものである。何れの場合にも、それは過去に關係して居るから、この不思議な作用の理解に多くの補助を與へることが出來ない。人格的幻術はそれによりて指導者となつた少數の人に附着せるもので、恰も磁石的魔術の作用であるかの如く、凡てのものを指導者に從はしむる作用を有する。しかし凡ての幻術は成功しなければ、その力を有せず、失敗するとその力を失つてしまふ。

ルボンは指導者の役目竝に幻術の重要を、集團精神に就て氏の企てた立派な叙述と完全に調和せしめて居るとの感を吾人は有することが出來ない。

三　集合精神生活に就ての他の評價

吾人はルボンの叙述を序論として利用した。蓋し氏が無意識精神生活を强調したことが吾人自身の心理學とよく一致するからである。しかし氏の主張が實際に何も新しいものを持ち來さなか

つたことを附言しなければならぬ。氏が集團精神の表現に於ける損失と下落に就て述べたものは凡て氏以前の人々によりて同樣の區別と同樣の敵意とを以て述べられ、文獻の最も早い時代から思想家、政治家、著作家によりて異口同音に反復されて居た。ルボンの意見の最も重要な點を含む二つの論文、即ち集團に於ける知的機能の禁止と情緒性の昂進に關する論文が少し以前にジゲレ（Sighele）によりて公にされた。* 結局ルボンによりて特殊のものとして殘された凡てのものは、無意識の意味と、原始人の精神生活との比較との二つの見解であるが、しかしそれ等とても氏以前に屡々闡說されたことは勿論である。

* Walter Moede; Die Massen-und Sozialpsychologie im kritischen Überblick. Zeit. f. päd. Psych. u. exp. Päd. 1915. XVI を見よ。

尙その外にルボンやその他の人々によりてなされた集團精神の敍述と評價とが全く論議されないことはなかつた。從つて今まで述べたやうな集團精神の凡ての現象は正しく觀察されたといふべきであるが、しかしその他に集團構成の他の表現を區別することが出來る。即ちその場合には全く反對の意味に働き、そのために集團精神も遙かに高等な意見を有し得るものである。

ルボン自身も場合によりては集團の道徳がそれを構成する個人の道徳よりも高等であり得ること、竝に集合體のみが高度の非利己と專心とを生じ得ることを許さんとして居た。曰く、孤立した個人に於ては、個人的興味が唯一の動機の力になるが、集團に於てはそれが殆ど優勢に表れて來ないと。他の著者は個人に倫理的規範を命令するものは社會のみである。しかし個人は通常その高い要求に應ずることが出來ないで居るとの事實を擧示して居る。又他の著者は最も素晴らしい團體作業をなし得る熱烈の現象が、例外的の場合には、社會の中に生じ得ることを指摘して居る。

知的作業に關して存在する一の事實は、思考作業に於ける大なる決定、重大なる發見、問題の解決等が、孤立的に作業する個人によりてのみ可能であるといふことである。しかし集團精神でも、天才的な知的創造をなすことが出來る。例へば言語、民謠、口碑等に特にその創作が表れて居る。それに又個人的思想家或は詩人は彼の生活する集團の刺戟にどれだけ負ふか、又彼は他人と同時に作業して完成した精神作業よりも以上のことを單獨で成就し得るかといふ問題が殘つて居る。

かやうに全く矛盾せる説明に遭遇すると、集團心理學の仕事は何等の結果をも齎さないかも知れないかのやうに見ゆる。しかしその矛盾から逃れる有望な途を發見することは、容易である。多數の異る形成が、集團の術語の下に包括されて居るので、それを區分する必要がある。ジゲレ(Sighele)ルボン、その他のものの主張は、ある經過的の興味が急に種々の個人の集合を引起した生命の短い集團に關係して居る。革命的集團、殊に佛國大革命の特質が彼等の叙述に影響を與へたことは疑もない。これと反對な見解は、人類が生活し、社會組織を構成せる安定的集團又は組合を考察することから生ずる。第一種の集團と第二種のそれとの關係は、短いがしかし高い波浪と長い海のうねりとの關係と同一である。

マクヂューガル(Mc Dougall)は氏の著「集團精神」の中に、今述べたと同じ矛盾から出立し、それに對する解決を組織の成分中に見出した。氏は曰く、最も單純な場合には集團(Group)は全く組織を有しないで集團といふ名稱を與へ難いものであると。氏はこの種の集團を群集(Crowd)と名づけた。しかし人間の群集は、集團組織の端緒を全く有しないで集まることは出來ないことと集合心理學に於ける多くの根本的事實がこの單純な集團の中に特に容易に觀察され得ることを氏

は述べて居る。偶然的に集合した人々が心理學的術語の意味に於ける集團の性質を有する何物かを構成し得る前に、一の條件が滿足されなければならぬ。即ちこれ等の個人は相互に共通な何物かを有しなければならぬ。例へば對象に於ける共通興味、ある狀態に於ける類似の情緒的偏見、竝にある程度の相互影響を有しなければならぬ。この心的等質の度が高ければ高い程、一層容易に個人は心理的集團を構成し、又集團精神の表現が一層著しくなる。

集團構成の最も著しく且つ最も重要なる現象は、集團に屬する各員の情緒が高上又は强烈化することである。マクヂューガルの考へによると、人間の情緒は、他の條件の下では達することの出來ない位の高い程度に、集團に於ては激起する。遠慮なく激情に自身を委ね、集團の中に入り込み、個人的制限の感を失ふことは集團の人々に取りて愉快な經驗である。かやうに個人が共通衝動によりて支配される有樣を、マクヂューガルは、一の原理によりて說明する。その原理を氏は原始的同感的反應による情緒の直接感應の原理と名づけて居る。單言すれば吾人が旣に述べた情緒的傳染によりて說明する。その事實は、情緒狀態の表號を知覺すると、知覺者はそれと同一の情緒を自動的に生ずるやうになるといふことである。而して同一の情緒を同時に觀察する人數

が多ければ多い程、この自動的强迫は强力になる。個人は批判力を失ひ、同一の情緒に陷つてしまふ。しかし彼はかやうにすることによりて彼にこの結果を引起した他人の興奮を增大し、かくして個人の情緒的充積は相互感應によりて强くなつて行く。ある事項は他人と同一のことをなすやうに强迫的に働き、多勢と一致するやうにする情緒が素朴であり單純であればある程、尙多くかやうな仕方に集團の中に擴がりて行く。

情緒の高上するこの機制は、集團から生ずる他の影響によりて有利になる。集團は無限の力と打勝ち難き危險との印象を個人に與へる。集團は暫くの間、全部の人間社會の代りになり、權威の支配者であり、個人はそれの罰を恐れ、そのために多くの禁止に從ふものである。個人が集團に反對することは個人に取りて明かに危險であり、彼の周圍の者の例に從ふことが一層安全であり、所謂狼が群をなして吼えるやうなことをする。彼は新しい權威に服從する爲に、彼の以前の良心を働かしめないやうにし、禁止の撤回から生じた所の增加せる快感に誘惑されてしまふ。故に集團中の個人は、正常の生活條件の下では避けて行はないやうな事物を集團に於て行つたり又は賞讃したりすることは、それほど珍しい事ではない。かやうにして吾人は謎の如き語の「暗示」

によりて屢々包括された神祕を幾分明白にすることを望むことが出來る。

マクヂューガルは、集團に於ける智能の集合的禁止に關する議論に反對しない。氏は曰く、低い智能の所有者は、高い程度の智能の所有者を自身の水準まで引下げるものである。從つて高度の智能の所有者は活動の障害を被むる。蓋しそれは一般に情緒の高上が健全なる知的作業に不利な狀態を生ずること、竝に個人が集團によりて脅かされ、心的活動の自由を失ふこと、及び各個人の自己の行爲に對する責任感が低くなつてくることから來て居る。

組織されない單純なる集團の心理的行動に就ての全體的判斷が友情的でないことはマクヂューガルも亦ルボンと同樣である。かかる集團は非常に情緒的、衝動的、激情、輕躁、矛盾、無決斷であり、又その行動は極端で素朴な情緒と精錬されざる情操とを示し、極度に暗示に感じ易く、熟慮をせず、早急に判斷し、單純且つ不完全な形式の推理以外のことは不可能で、容易に支配され、指導され、自己意識に缺け、自尊心と責任感とを失ひ、集團自身の力の意識によりて支配される傾向があり、爲に、無責任竝に絕對的力に歸し得べき凡ての惡行爲をなすやうになる。從つてその行動は普通人の行動よりも寧ろ氣儘の子供や、教育を受けない激情的な野蠻人が未知の境

遇に於て行動するのに似て居り、甚だしい時は人間の行動といふよりも野獸の行動といつてよい位である。

マクデューガルは高度に組織された集團の行動と、吾人が今述べたやうな行動とを對立させて居るから、吾人はこの組織が何によりて成立するか、如何なる成分によりて、それは生ずるかを知らんとする點に特に興味を持つ。氏は集合精神生活が高等の水準に高上する主要條件として五つを列擧する。

第一の根本的條件は、集團が永續する場合には或程度の連續性があるといふことである。それは材料的でもよく又形式的でもよい。前の場合は、同一個人が一定期間集團の中に存在することで、後の場合は固定した態度が集團の中に發達し、個人の相續によりてそれが維持されることである。

第二の條件は、集團の部員の中に集團の本質、機能、行動、要求に就ての一定の觀念が構成されることで、その觀念構成よりして個人は集團全體に對する情緒的關係を發達せしむることが出來る。

第三の條件は、集團は多くの點では異つて居るが、しかしある點で類似した他の集團と一定の關係、恐らく競爭の關係に置かれることである。

第四の條件は、集團は傳統、慣習、習慣を有し、殊に部員相互の關係を決定する如きものを有することである。

第五の條件は、集團はそれを構成する個人の機能の特殊化と分化とに表れる一定の構造を有することである。

マクヂユーガルによると、それ等の條件が滿たされると集團構成の心理的不利は除去される。而して知的能力の集合的降下は、知的問題の解決を集團に命ぜず、個人でそれを解決するやうにすることによりて防がれる。

マクヂユーガルが集團の組織として示した條件は、他の仕方に叙述することが一層正當であり得るやうに見ゆる。個人の特質であるが、しかし集團構成の爲に個人の中に消滅する特質を、集團に如何にして供給するかといふ問題が玆に生ずる。何となれば原始的集團以外の個人は、彼自身の持續性、自己意識、傳統、慣習、自己特有の機能と位置とを有し、彼の競爭者から離れて居

るからである。この特質は彼が組織なき集團に入り込むことによりて暫くの間失はれる。若しその目的が個人の屬性を集團に供給することであると認めるならば、吾人はトロッターの價値ある解釋を回想するであらう。[*] 卽ち氏は集團構成の傾向の中に凡ての高等有機體の多細胞的性質が、生物學的に連續することを認めると述べて居る。

* Instincts of the Herd in Peace and War. 1916.

四　暗示とリビドー

吾人は根本的事實、卽ち集團中の個人が、その集團の爲に屢々彼の心的活動の奥底からの變化を被むる事實から出立した。彼の情緒は非常に强くなるが、知的活動は著しく減退する。而して情緒も知的活動も共に集團中の他の個人に明かに類似して行き、その結果として各個人に特有な衝動の禁止が無くなり、各個人獨得の傾向の表現が失はれるやうになる。これ等の好ましからざる結果は少くともある程度まで集團の高等な組織によりて防がれると言はれた。これは集團心理

學の根本的事實、即ち原始的集團に於ける情緒の高上と知力の禁止に就ての二つの主張に矛盾しない。吾人の興味は、集團中の個人によりて經驗される如上の心的變化を、心理學的に說明せんとする點に向つて居る。

既に述べた個人の威嚇、換言すれば自己保存の衝動の行爲の如き合理的成分は、觀察し難い現象であることは明白である。その他社會學や集團心理學の權威者の說明として吾人に與へられたものは、假令その名稱こそ暗示とか、タルド (Tarde) の所謂模倣とか異つて居るが、內容は全く同一である。而して吾人は模倣が暗示の概念に歸着せられ、暗示の結果の一つであると主張する著者*に、同意せざるを得ないのである。ルボンは社會現象の不可解の凡てのものを、二つの成分、即ち、個人の相互暗示と指導者の幻術に歸した。しかしこの幻術は暗示を引起す作用の中に認められる。マクヂューガルは情緒の原始的感應の原理が暗示の假定なくして行はれ得るとの印象を吾人に暫く與へた。しかし尙深く考察すると、この原理は模倣や傳染の在來の主張と少しも變らないで、只情緒の成分を特に强調した點だけの相違であることに氣が付く。吾人が他人に於ける情緒の表號を認知する時に、それと同一の情緒を引起さんとの傾向を有することは明白であ

る。しかし吾人は何故にそれに反對し、抵抗し、全く反對な仕方に反應することに屢々成功しないか。吾人が集團の中にあれば、何故にこの傳染に常に服從するか。この傾向に從ふやうに吾人を強ゆるものは模倣であり、情緒を感應せしむるものは集團の暗示作用であると、吾人は再び言はなければならぬ。尚その上マクヂューガルは暗示から全く免れることは出來ない。何となれば吾人は氏竝に他の著者から、集團はそれの特殊の暗示性によりて他から區別されるといふことを聞いて居る。

* Brugeilles; L'essence du phénomène social; la suggestion. Revue philosophique, XXV. 1913.

從つて暗示（尚正確に言へば暗示性）は他のものに歸することの出來ない原始的現象であり、人間の精神生活の根本的事實であると容易に主張されるであらう。ベルンハイム(Bernheim)も亦同様の見解を有して居た。氏の驚くべき技術を私は千八百八十九年に見たことがある。しかし私は氏の暗示の嚴格なことに敬意を感じたことを今尚記憶する。一患者が氏に從順を示さなかつた時に「何をしてるのです、暗示に反對しようとするのか」と患者に吹鳴つた。私はこれは明かに不正であり、亂暴な行爲であると獨語した。蓋し人間は暗示に從ふやうに試みんとして居ても、

反對暗示を生ずる權利を確かに有するからである。その後暗示によりて凡てのものを說明せんとすることを控へなければならぬといふ見解に對し、私は反對するやうになつた。それに關聯して私は古い謎を反復する。*

クリストフがクリストを生んだ。

クリストが全世界を生んだ。

そんならクリストフは何處に足を置いたか言つて御覽。

* Konrad Richter. Der deutsche St. Christoph. Berlin 1896. Acta Germanica, V, I.

私は約三十年間暗示から離れて居た後に再びその謎に近寄つても、その狀態に少しの變化もないことを發見する。この主張に對し、只一つの例外を發見することが出來るが、茲にいふ必要がない。蓋しそれは精神分析の作用を證明するものであるからである。暗示の概念を正しく構成せんとの努力、卽ちその名稱の便宜的使用を確定せんとの特殊の企てが行はれたことを私は知つて居る。* 而してその努力は決して餘計なことでない。蓋しその語の使用が漸次に擴大され、意味は

漸次に任意的になりて、それが如何なる種類の影響にも適用されるやうになるかも知れないからである。例へば英語の to suggest と suggestion とが獨語の nahelegen と Anregung とに相應するやうになるかも知れない。しかしこれまで暗示の本質に就て、即ち適當の論理的根據なくして影響を生ずる條件に就ては全く說明されなかつた。最近三十年間の文獻を分析して、如上の主張を支持するやうに企てたいが、しかし玆ではそれを中止する。蓋しこの問題に關する夥しい研究が私の手近に準備されて居ることを知るからである。

* Mc Dougall ; A Note on Suggestion. Journal of Neurology and Psychopathology. Vol. I. No. I, 1920.

その代りに私は集團心理學に光明を與へるために、リビドーの概念を用ひることの企てをしよう。その概念は精神神經症の研究に非常に役立つたものである。

リビドーは情緒の原理から得た一表現である。愛情の語の下に包括さるべき凡てのものに關係する衝動のエネルギーをリビドーと名づける。而してそのエネルギーは今日の處測定し難いとは言へ、量的大さを有するものと考へられる。吾人が愛情を意味するものの中核（これが一般に愛

情と言はれ、詩人が歌ふ所のもの）は性的結合を目的とせる性愛から出來て居る。しかし吾人は何れの場合にも愛情の名稱を分擔して居る所のものから一方に自己愛を分離せず、又他方に兩親や子供に對する愛、友情、一般的の人間愛、具體的事物や抽象的觀念に專心することをも分離しない。以上の主張の正當なことは精神分析的研究が吾人に教へた事實に基いて居るので、その研究によると、凡てこれ等の傾向は同一の衝動活動の表現であることを示して居る。兩性間の關係に於ては、これ等の衝動は性的結合の方に推進されるが、他の狀態では、これ等の衝動はこの目的から離れ、或はその目的に達することを妨げられる。尤もその場合にはそれの同一を保つことを知らせるやうにするだけ十分な最初の性質を保存する。例へば自己犧牲とか、接近せんとの努力とかの樣式に表れてくる。

吾人の考ふる所によれば、このリビドーの語は種々の用法を有する愛情なる語を全く正當に總括したものであり、又吾人の科學的解明や叙述の基礎として用ひるにはその語より以上によい語を見出すことが出來ない。かやうに決定することによりて精神分析學は世間から憤怒を被ることを免れた。尤も憤怒を引起したことは亂暴な革新行爲の罪であつた。しかし精神分析學は愛情を

この廣い意味に解した最初のものでない。それの起原、機能、性愛に對する關係に於て、哲學者プラトーンのエロス（Eros）が精神分析學の愛の力卽ちリビドーと全く一致する。それは旣にナツハマンゾーン（Nachmansohn）及びフイスター（Pfister）によりて詳細に示されて居る。使徒ポールがコリント人への有名な書簡の中に、愛情をその他凡てのもの以上に評價した時に、彼は同じく廣い意味に愛情を解して居る。* しかし世人がそれに氣づかないといふことは彼等がこれ等の大思想家を推稱すと言ひながら、眞面目に大思想家の言を受取らないことの證據である。

* 私が假令、人間や天使の言葉で話しても愛がなければ、私は發聲する黃銅の樂器か又は鳴りひびく鐃鼓と同じである。

精神分析學はこれ等の愛の衝動に、それの一層有力なる理由、卽ちそれの起原に基いて、性的衝動の名を與へる。敎育を受けた大多數の人はこの術語を侮辱であるとし、それの復仇として彼等は汎性慾說の非難を精神分析學に與へた。性を以て人間本質を辱かしむるものと考へる人は、一層上品な表現であるエロス（Eros）及びエロテイツク（Erotik）の語を自由に利用してよい。私も最初からそのやうに使用したならば、多くの非難を免れ得たかも知れない。しかし私はそれ

を欲しなかつた。蓋し意志が弱いと言はれることを避けたいからである。人はこの道を通りて何處に落込むかを言ふことは出來ない。人は先づ言葉に從ひ、然る後少しづつ事物に從ふ。私は性を言ふ爲に恥辱を感ずることが何等かの價値があると考へることは出來ない。恥辱を緩和する希臘語のエロスは結局吾人の獨逸語の(Liebe)(愛情)の飜譯に過ぎない。而して待つことを知る人は何等の讓步をなす必要がない。

愛情關係(一層中性的表現を用ひると、情緒的結合)が集團精神の主要素をなすことの假定を以て吾人は研究を初めよう。而してこれまで權威者がかかる關係に就て少しも述べなかつたことを回想せよ。その關係に相當する事實は明かに暗示の遮障の後方に隱蔽されて居る。吾人の假定は先づ次の二つの思想を基礎として居る。第一に集團は明かにある種の力によりて結合されて居ることである。而して世界の凡てのものを結合する所のエロスにこの仕事を歸せしめないで、他の如何なる力にこの仕事を歸することが出來るか。第二に若し個人が集團に於て彼の特異性を失ひ、他の部員の暗示によりて影響を被むるとすれば、彼が他の者に反對するよりも、寧ろ彼等と調和を保つことの必要を感じて、彼等自身の爲にそれを爲すのであると吾人は考へる。

五　二つの人爲的集團、教會と軍隊

吾人が集團の形態學に就ての知識よりして回想し得ることとは、集團の種々の種類、竝にその發達に於ける反對せる方向を吾人が區別し得ることとである。集團には極めて經過的のものあり、又非常に持續的のものもある。又同種の個人からなる同質的集團と異質的集團とがあり、自然的集團と外部の力によりて結合を維持する人爲的集團とがあり、原始的集團と一定の構造を有する高等の集團とがある。しかし未だ研究が屆いて居ないといふ理由よりして、吾人はこれまで權威者が注意を拂つて居ない區別の方を特に强調しようと思ふ。而して私は指導者のない集團と、指導者を有するそれとの區別を述べることにする。尙普通に行はれる仕方と反對して、吾人は比較的簡單な集團構成から出發しないで、高く組織された持久的人爲的集團から初めよう。かかる構造の中で最も興味ある例は、信仰者の團體たる教會と軍隊とである。

教會と軍隊とは人爲的集團で、或外部の力によりて不統一を防ぎ、組織の變化を抑へて居る。

一般に人はかかる集團に入らんと欲するか否かに就て相談も受けず、又選擇をも與へられない。それを去らうとすると、通常迫害や嚴罰を被り、或は全く一定の條件に束縛される。これ等の組合が何故にかかる特殊の防禦手段を要するかを吟味することは吾人の目下の興味に外れて居る。吾人は唯一の事情、即ち他の場合には倘遙かに隱れて居る一の事實が、上記の仕方で分裂を防ぐ高度の組織を有する集團の中に明白に觀察され得るといふ點に興味を有する。

教會（吾人は便利上カトリツク教會を代表として取らうと思ふ）と軍隊とは他の點では相違するが、何れも首領があるといふ點に同一の錯覺を有する。即ち教會ではキリスト、軍隊に於ては大元帥がありて、集團中の個人は凡て一樣にその首領を愛する。凡ての事がこの錯覺に依存し、その錯覺が無くなると、教會も軍隊も外部の力が許す範圍に於て分裂する。この同等の愛はキリストにより明言されて居る。即ち私の最も賤しき同胞の一人に汝が行つたものを、汝は私に行つたと。彼は信仰者の集團の一々の者に對し親切な長兄の關係に立ち、又彼等の父の代表者である。個人の上になされる凡ての要求は凡てこのキリストの愛から引出される。デモクラチツクな性質が教會を通じて流れる。蓋しキリストの前では何れの者も平等であり、何れの者も彼の愛を

平等に受けることが出來るからである。キリスト教會と家族との間の類似が祈求されること、並に信仰者はキリストに於ける兄弟、換言すればキリストから被る愛を通じての兄弟であると相互に呼ぶことには深い理由がある。各個人がキリストに結びつく所の結合が相互を結合する原因であることは疑ひもない。同様なことが軍隊にも言へる。大元帥は凡て彼の兵士を一様に愛する父であり、その爲に兵士は互に戰友になる。軍隊は階段ある集團を構成する點に於て組織上教會から異つて居る。一々の隊長は謂はば彼等の大元帥であり又彼等の同僚の父である。同様なことは彼等の部隊の一々の下士官に就ても言へる。軍隊と類似の組織が又教會にも組織されたことは眞である。しかしそれは經濟的に同一の役目を演じない。何となれば吾人は個人に就ての知識と心配とを人間の大元帥よりもキリストに對し、一層多く要求するからである。

軍隊がリビドー的構造を有すとの概念、即ち軍隊を結合せしむるに必要な自身の國、國民の名譽等の觀念は軍隊中に發見されないとの概念に對して反對があることは無理もないことである。しかしそれに對する回答としては、その種の軍隊は異つた種類の結合で、最早單純な結合でないと言へる。何となればシーザー、ワアーレンスタイン、ナポレオンの如き大將軍の例を見ると、

かかる自國とか國民の名譽とかの觀念が軍隊の存在に不可缺のものでないやうである。吾人は指導觀念が指導者に置換へることの可能と兩者の間の關係とを茲に少しく述べて見よう。リビドー的成分が軍隊の唯一の成分として働かないにしても、その成分を看過することは、理論上缺點を有するばかりでなく、尙實際的に危險であるやうに見ゆる。獨逸の科學と同じく非心理學的であつた普魯西の軍國主義は、大戰爭に於て、このリビドー的成分を無視した結果に惱まされたと言ふことが出來る。獨逸の軍隊を荒らした戰爭神經症は、大部分個人が軍隊中に行はんと豫期した役割を滿たすことの出來なかつたことに對して個人を保護する爲に生じたものと認められる。ジンメル（E. Simmel）の通信によると、上官によりて酷く取扱はれることが、この疾病の動機中最高のものと考ふることが出來る。この場合にリビドー的要求の重大なことが尙よく認められて居たならば、米國大統領の十四箇條の空想的約束が、それほど容易に信じられなかつたであらうし又立派な武器が獨逸指揮者の手で破壞されなかつたであらう。

この二つの人爲的集團に於て、各個人は一方にリビドー的結合によりて指導者たるキリスト又は大元帥に結びつき、他方に集團中の他の部員に結びつくことは注意すべきことである。この二

つの結合が如何にして相互に關係するか、それ等は同種類であり同價値であるか、それ等を心理學的に叙述し得るか等の問題は次の研究に殘さなければならぬ。しかし多くの權威者が集團心理學の中に指導者の大切なことを十分に認めなかつたことを吾人は少しく非難しようと思ふ。然るに吾人が研究の第一目的として指導者を選んだことは、一層有利な狀態に吾人を導いた。集團心理學の主要なる現象、卽ち集團に於て個人が自由を失ふ現象を說明するに當りて吾人は正しい道を辿りて居るかのやうに見ゆる。若し各個人がかかる强烈なる情緒的結合によりて二つの方向に束縛されるならば、彼の人格中に觀察された變化と制限とを、その關係から說明するに困難を感じないであらう。

集團の主要素が集團中にあるリビドー的結合に存すといふ如き結果の暗示を、吾人は軍隊で最もよく研究された恐慌(Panik)の現象の中に發見する。この種の集團が統制を失つた時に恐慌は生ずる。上官の命令が少しも聞き入れられず、各人が自分のことのみ心配して、他人のことを少しも考へないといふことが、恐慌の特質である。相互の結合は破れ、異常な無意味の憂慮が生ずる。この主張に對して、それは却つて反對であるとの非難が生ずるであらう。卽ち憂慮が非常に

大なる爲に、他人との結合や他人を省みるやうなことが凡て無くなるのであると非難するであらう。マクヂューガルは氏が最も强調した傳染（原始的感應）によりて情緖の高上する代表的の例としてこの恐慌（軍隊の恐慌ではないが）を擧げて居る。しかしこの合理的な說明の方法はこの場合に全く不適當である。說明を要する眞の問題は、何故にその憂慮がそんなに烈しくなつたかといふことである。この場合に危險の大なることには責任がない。何となれば將に恐慌を來たさんとする軍隊が、以前にはそれと同じ、又はそれ以上の危險に遭遇しても立派な振舞をして居るからである。危險の威嚇的なことが恐慌の主要素でなく、恐慌は極く些細な出來事から屢々爆發する。恐慌による憂慮を感ずる個人が、自身のことのみ心配するやうになつた時に、彼はこれまで危險をして小さく見えしめた情緖的結合が存在しなくなつ たとい ふ事實の證據を得るであらう。彼はその危險に彼一人で當面するといふことが、危險を一層大にするに相違ない。故に恐慌による憂慮は集團のリビドー的組織の弛緩を豫想するもので、その弛緩に對し適當な仕方に反應したことが憂慮である。而してそれと反對な說明、卽ち危險に當面する際の憂慮の爲に集團のリビドー的結合が破壞されるといふことは否定されることが出來る。

集團中の憂慮が感應（傳染）の爲に非常な程度に增加するとの主張は、如上の解釋と決して矛盾しない。マクヂューガルの見解は、危險が非常に大であり、集團が强き情緒的結合を有しない場合に正當である。例へば劇場や娯樂場に於て火事が起つたやうな時にその條件は具備される。しかし眞に恐慌を理解するに都合よき場合、卽ち吾人の目的に最もよく用ひられ得る場合は上に述べた如きもので、危險が通常の程度又は以前に屢々遭遇した程度以上に增加しなくても軍隊は恐慌を惹起すものである。恐慌といふ語の慣用が的確に決定されなければならぬとは豫期されない。時としてそれは集合的憂慮を示し、時としては凡ての制限を超ゆる時の個人の憂慮に用ひられ、又屢々憂慮の爆發が場合によりて保證されて居ない時にその名稱を用ひる。若し恐慌の語を集合的憂慮の意味に取れば、吾人は尙廣汎な類推をなすことが出來る。個人に於ける憂慮は危險の大なることによりても、或は情緒的結合（リビドー充積）の弛緩によりても生ずるもので、後の場合が神經症的憂慮である。[*] それと全く同じ仕方に於て恐慌は一般的危險の增加によりて、或は集團を結合する情緒的結合の消失によりて生ずる。而して後の場合が神經症的憂慮と類似して居る。[**]

* Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. XXV.

** フェルツェギー（Bela V. Felszeghy）の興味ある、しかし空想的論文 Panik und Pankomplex. Imago, 1920, Bd VI. を比較せよ。

マクヂユーガルのやうに恐慌を集團精神の最も明白なる機能の一として記述するものは、集團精神がそれの最も著しき一表現たる恐慌の中には消失するといふ矛盾に到達する。恐慌が集團の分裂を意味することは疑ふ能はざることで、恐慌は集團の人々が恐慌以外の場合には相互に示した顧慮を凡て失つた結果である。

恐慌の爆發の代表的の例はユーヂツト及びホロフエルン(Judith und Holofern)に關するヘツベル(Hebbel)の劇のネストロイ(Nestroy)の狂句の中に示されて居る。一人の兵士は、「將軍が首を失つた」と叫んだ。それで凡てのアツシリヤ人は逃走した。ある意味に於て指導者を失ふこと、彼に就て疑惑を生ずることは假令危險が同一であつても、恐慌の爆發を生ずる。集團の人々相互間の結合は、彼等の指導者に對する結合が無くなると同時に通常失はれる。集團は恰もボログナの瓶の如く、それの頭部が破れると全部が破壞する。

宗教團體の分解は觀察するに容易でない。少し以前に、私はロンドンの僧正によりて推擧された、カトリツク方面から出た英語小説「暗黒であつた時」を手にした。その本には、かやうな分解の可能とそれの結果とが巧みに且つ明確に描寫されて居た。この小説は現代に關係するやうに推定されるが、その中には、人間キリスト及びキリストの信仰に敵意を示す徒黨が如何にしてエルサレムに於ける墓を發見するに成功したかを物語つて居る。この墓には、アリマテーアのヨーセフが述べた言葉が刻まれてある。卽ち彼は敬虔の餘りキリストの身體を埋葬の後三日目に祕密にその墓から移して、この地に埋めたと。この手段によりてキリストの復活と彼の神性に就ての信仰は取除かれる。而してこの考古學的發見の結果が歐洲文化の動亂であり、且つ凡ての犯罪と非行の非常な增加である。而して僞造者の計畫が發覺した後初めてこれ等の犯罪や非行は止むものである。

この場合宗教團體に起ると想像される分裂の際に表れる現象は憂慮でない。この場合には憂慮を生ずる理由はなく、その代りに他の人民に對する殘忍な敵對的衝動が現れる。而してそれは以前にはキリストの平等愛の爲に現れることが出來なかつたものである。* しかしキリスト王國の間

でも信仰者の團體に屬しないもの、キリストを愛しないもの、キリストが愛しなかつたものは、この結合の外に立つて居る。故に宗教はそれ自身愛の宗教であると言つて居ても、それに屬しないものには殘酷であり、愛が無いに相違ない。根本的に何れの宗教も同樣に、それが包括する凡てのものに對しては愛の宗教であるが、しかしそれに屬しないものに對しては、殘忍であり頑迷である。しかし個人的には如上の事實を發見することが困難であるから、その點に就て信仰者を餘り嚴しく非難すべきでない。不信又は無頓着のものは、その點に於て、心理的に倘更都合がよい。今日異說を容れない頑迷が以前の世紀ほど烈しく且つ殘酷で無くなつたとしても、人間の風習が柔弱になつたと結論することは出來ない。その原因は寧ろ宗教感情及びそれに基くリビドー的結合が弱くなつたことに求めらるべきである。若し他の集團結合が宗教的結合の代りをするならば、(社會主義的結合がこの代りをなすことに成功して居るやうに見ゆる)、宗教戰爭の時代に於けると等しき頑迷をその集團以外の人に示すであらう。若し科學的意見の相違が集團に對し、宗教と同樣な意義を與ふることが出來れば、再び同一の結果がこの新動力の爲に反復されるであらう。

＊君主の父權が消滅した後に、これと類似の現象の生じたことを說明せる P. Federn : Die vaterlose Gesellschaft. 1919 を比較せよ。

六　其上の問題と仕事の方向

吾人はこれまで二つの人爲的集團を考察し、彼等が二つの情緒的結合によりて支配されて居ることを發見した。その中で指導者との結合が、集團の部員間の結合よりも遙かに決定的成分であるやうに見ゆる。

尙集團の形態學の中には研究し叙述すべき多くの事項が殘つて居る。これ等の結合が出來上らない間の單なる人間の集合は集團でないとの確定的事實から吾人は出立しなければならぬ。しかし又人間の集合に於ては心理的集團を構成せんとの傾向が容易に著しくなり得ることを許さなければならぬ。自發的に生じた多少安定的なる各種の集團に注意を向け、それ等の集團の起原及び分離の條件を吾人は研究しなければならぬ。就中指導者のある集團とそれのない集團との間の區

別を取扱はなければならぬ。指導者を有する集團が一層原始的であり且つ完全なるものではないか。又他の場合に於て、指導者は觀念、抽象によりて置換へられることが出來ないか。(未見の首領を有する宗教的集團が既に一の過渡的階段を構成して居る)。一つの共通傾向、即ち多數の人民が分擔し得る一の欲求が同樣に代表物として役立たないか等の問題を吾人は考察しなければならぬ。この抽象物は吾人が二次的指導者と名づけ得る人間に多少全く合體せしむることが出來、且つ指導觀念と指導者との關係から興味ある種々のものが生ずる。この指導者又は指導觀念は謂はば消極的であるかも知れない。即ち特殊の人間又は施設に對する嫌惡が積極的の愛好と同一の統一的方法に於て作用し、且つ積極的結合と同じ種類の情緒的結合を惹起すかも知れない。玆に於て指導者は集團の主成分として不可缺のものであるかとか、或はその他の問題が生じてくる。

しかし集團心理學の文獻中に一部分取扱はれて居る此等凡ての問題は、集團の構造中に吾人が遭遇した根本的心理學的問題に對する吾人の興味を變化せしむることは出來ないであらう。而して群集の特質はリビドー的結合であるとの證據に最も直接に吾人を導く所の考察に、先づ吾人の注意は引かれるであらう。

人間一般の間に存する情緒的關係の性質を取出して見よう。凍えたる豪猪に就てのショーペンハウエルの有名な直喩によると、誰も、彼の隣人に全く接近するやうに近寄ることが出來ない。(豪猪は寒い時には相互に接近して暖さを保たうとする。しかし餘り接近すると刺がつかへるので直ぐに離れる。寒くなると近寄り、刺が觸れると離れるといふやうに、あつちこつちに動き廻るが、遂に一定の距離を保つことが、最も堪へられる仕方であることを發見するといふことである)。

精神分析の證明によると、暫くの間續く二人間の親密なる情緒關係、例へば結婚、友情、兩親と子供との關係は、嫌忌と敵對の感の沈澱物を殘すもので、それ等の感は最初抑壓作用によりて除去されなければならなかつたものである。*仕事の上の同僚が普通に口論をしたり、部下のものが目上のものに不平を言ふ場合には、この感が赤裸々に表れる。人が一層大なる結合をなす時にも同一の事が生ずる。二人の家族が結婚によりて結びつくと、何時でも一方が他方より優越であるとか、生れがよいとか考へる。二つの相隣れる町では、一方は他方から最も嫉視される競爭者になる。いづれの小さい村でも他の村を輕蔑する。密接な關係を有する民族は、相互に疎遠にす

る。南方獨逸人は北方獨逸人を好まないし、英國人はスコツトランド人を誹謗し、スペイン人はホルトガル人を輕視する。相違が大となれば、殆ど除くことの出來ない位の嫌忌を惹起すことは決して驚くべきことでなく、例へばフランス人と獨逸人、アリアン人とシエム人、白人と黑人との關係は然りである。

＊恐らく母と男の子との關係は唯一の例外であらう。それは自己愛に基いて居る。從つてその關係はその後の競爭者によりて妨げられず、性的對象選擇の基本的試みによりて强力になる。

その他の時には愛した人に對し、敵意を示す場合を、吾人は感情竝存(Gefühlambivalenz)と名づける。而してその事實を吾人は密接の關係にある興味の軋轢の多數の原因によりて、全く合理的な仕方で說明する。未知人に接近する際に感ずる赤裸々の敵意と嫌忌の中に、吾人は自己愛(Narzissisum)の表現を認めることが出來る。この自己愛は個人の自己主張の爲に働くのもで、又個人の發達の特殊の方向から脫逸を生ずることが、方向に就ての批判とそれの變化の要求とから來るかの如く自己愛は振舞ふものである。この細かい相違の點に何故にかやうに自己愛は敏感であるかを吾人は知らない。併しかやうな結合に於て人は容易に嫌忌を示し、進擊をなすことは眞で

ある。而してその原因に就ては知られて居らず、只根本的特質によると言ひ得るかも知れない。*

* 近頃公にした「快の原理を越えて」の中に、愛と憎の兩極性を、生命と死の衝動間の假說的對立に關係づけんと企てた。而して性的衝動は生命衝動の最も純粹な例であると述べた。

しかしこれ等凡ての頑迷なことは、集團が構成されることにより、又は集團の中に居ることから、一時的又は永久的に消失する。集團構成が持續し、又は擴大される限り、個人は恰も一樣であるかの如く振舞ひ、相互の特異性に堪へ、自己を他人と同一水準に置き、他人に對して嫌忌の感を生じない。吾人の理論的見解によると、自己愛は一の成分、卽ち他人とのリビドー的結合によりて制限されることが出來る。自己に對する愛は只一つの妨害を有して居る。卽ちそれは他人に對する愛、對象に對する愛である。玆に於て直ちに問題を生ずるのは、リビドーの附加なく、興味のみによる社會は他人を寬容し、他人を顧慮するやうに必ずしもならないかといふことである。この非難に對しては、自己愛の永久的制限の爲にかやうな寬容や、顧慮は生じないと答へてよい。蓋し直接の利益が他人との共同作業によりて獲得された以上にこの寬容は持續しないからである。尙又この駁論の實際的價値は、想像する程大でない。何となれば經驗の示す所によると

共同作業の場合には、リビドー的結合が共同作業者の間に規則正しく構成され、それによりて彼等の間の關係が、單に利益であるといふ點以上に持續し强固になるからである。個人的リビドーの發達に關する精神分析的研究に於てよく知られて居ることと同一の事項が人間の社會關係にも生ずる。リビドーは大なる生活要求の滿足の上に支持され、それの第一の對象として、その過程に參與する人を選擇する。全體としての人類の發達には、個人の場合と同じく、愛のみが、利己主義から利他主義に變化すといふ意味の文化の成分として働く。而してこの愛のみが働くことは婦人の好むものを節約せんとする凡ての義務をも含む所の婦人に對する性愛と、共同して働くことから生ずる所の他人に對する、去勢され、昇華された同性愛との二つの場合にも眞である。

故に若し集團に於て自己愛は集團以外に働かないやうな制限を被むるとすれば、それは集團構成の主要素が集團の部員相互に於ける新しいリビドー結合から成り立つといふ强い證據である。しかし今吾人の興味を引く問題は、集團に存在するこれ等の結合は、如何なる性質のものであるかの急迫せる問題である。これまで神經症の精神分析的研究に於て吾人が主として取扱つたものは、直接に性の目的を追求する愛の反動がそれの對象と結びつく所の結合作用であつた。集團

に於ては明かにこの種の性的目的の問題は取扱はれることが出來ない。この場合に吾人はそれの最初の目的から變化した愛の反動を取扱ふのである。尤もその反動はこの變化の爲に弱く働くことはない。吾人は旣に通常の性的對象充積の範圍の中に反動が性的目的から轉向する現象を觀察した。吾人はその現象を愛することとの階段として記述し、自我に於ける一定の蠶食であると認めた。集團中に存する結合に轉移し得る條件が、この愛することとの現象中に發見されるとの確信を以て、吾人はこの現象を一層精密に注意することにしよう。しかし性的生活に見る如き、この種の對象充積が他の人間との情緖的結合の唯一の方法であるか否か、或はその種類以外の機制を考慮しなければならぬか否かのことも亦吾人は知りたい。實際吾人は精神分析よりして情緖的結合の他の機制の存在することを學んだ。それは所謂同一視(Identifizierung)で、十分に知られて居らず、且つ叙述するに困難な過程である。吾人はこの過程を考察する爲に、暫く集團心理學の問題から離れることにする。

七　同　一　視

同一視は他人との情緒的結合の最も早い表現として精神分析學に知られて居る。それはエディプス錯綜の早い歴史の中に役目を演じて居る。幼き男兒は彼の父に對して特殊の興味を表す。彼は父のやうに生長し、父と同じ樣になり、凡ての場合に父の代りにならんと欲する。簡單に言へば、彼は父親を理想とすると言へる。この行動は父（及び一般の男性）に對する受動的又は女性的態度と無關係で、それは寧ろ立派な男性的態度である。それは極めてよくエディプス錯綜に適合し、錯綜への準備を助ける。

この父との同一視と同時に、或はそれより少し後れて、男兒は依賴型（Anlehnungstypus）性衝動は最初滿足をする爲に獨立的手段をとらず、自己保存の衝動に依賴することによりて滿足する。故に個人の性的對象の第一の選擇は依賴型であると言はれる。）に從つて、母親の方へ眞の對象充積を發達せしむることを始める。從つて彼は二つの心理的に異る結合、卽ち母に對する直進

的性的對象充積と、父に對する代表的同一視とを示す。この二つは相互の影響や干渉を被ることなく暫くの間相竝んで存在する。心的生活の統一化への抵抗し難き進歩のために、それ等は遂に合一する。正常のエディプス錯綜は、この合一から生ずる。幼き男兒は、母との間を父が邪魔することに氣付く、彼が父と同一視することが敵對的着色を生じ、母に對して父の位置を占めんとの欲求と同じくなる。同一視は實にその最初から竝立的である。それは溫情の表現に容易に變ると等しく、他人を排除する欲求にも容易に變ることが出來る。それはリビドー組織の最初の口唇時代(orale Phase)の派生物のやうに振舞ふ。その時代に於ても欲求し尊重する對象が食べることと合體し、又かやうなものとして、その者を食べてしまふ。人肉を食ふことは明かにこの見地から殘つて居る。彼は食ふほど敵を愛するもので彼は愛するもののみを食ふものである。*

* Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie 及び Abraham: Untersuchungen über die früheste prägenitale Entwicklungsstufe der Libido. Internat. Zeit. f. Psychoanal. 1916. Bd. IV 等を見よ。

父と同一視することのその後の歷史は容易に見失はれる。エディプス錯綜は轉換して、父が女性的態度の對象となり、その對象によりて直接に性的衝動の滿足を求めんとするやうになるかも

知れない。その場合に父と同一視することは父との對象結合の先驅になつて居る。同樣なことが幼い女兒に於ても行はれる。

父と同一視することと、對象として父を選ぶこととの區別を公式的に言ふことは容易である。第一の場合では、人間の父は各人がありたいと欲するものであり、第二の場合では、各人が持ちたいと欲するものである。卽ちその區別は結合が主體に結びつくか、或は自我の對象に結びつくかに基いて居る。故に前者は性的對象選擇が行はれる以前に作用することが出來る。この區別を超心理學的に明瞭に敍述することは非常に困難である。他の者を模範として採用したと同じやうに、自身の自我を對象にせんと努力する作用が同一視であるといふことだけを吾人は認知する。

同一視が神經症的徵候の組織の中には複雜な結合を生ずるので、吾人はその複雜を解明しようと思ふ。玆では幼い女兒のことを述べることにするが、その女兒が母と同じ不快の徵候、例へば同じく苦しい咳をなすやうになつたと想像せよ。これは種々の仕方に變つて行くかも知れない。同一視がエディプス錯綜から來ることもあるが、この場合には母の位置を取らんとの、敵意的欲求を示す。而して父に對する對象的愛情が徵候として表れ、母の位置を取らんとの欲求は、罪惡

の感として實現されるものである。「汝は母たらんと欲した。今は少くとも苦しんで居る」。これがヒステリー的徴候構成の全機制である。或は一方にその徴候は愛される人のそれと同一のこともある。例へば「ヒステリー分析の小篇集」中に記述しあるドーラは父の咳を模倣した。この場合には同一視が對象選擇の代りに表れたもので、それは又、對象選擇が同一視に退行したと說明することが出來る。同一視は情緒的結合の最も早い起原的形式であると吾人は聞いて居る。徴候が構成される條件の下では、抑壓作用が表れ、且つ無意識的機制が優勢なる場合では、對象選擇は同一視に復歸し、換言すれば、自我が對象の特質を受取るやうになることが屢々である。この同一視に於て、自我は時として愛しない人を模寫したり、時として愛する人を模寫したりすることとは著しいことである。二つの場合に於て、同一視は部分的であり、且つ非常に制限されたもので、それの對象となる人から單一の特質を借り來るに過ぎないことに吾人は驚かされる。

徴候構成の中に特に屢々起り、且つ大切な第三の場合がある。この場合に、同一視は模寫される人に對する對象關係を全く無視する。例へば寄宿舍の一女生徒が祕密に愛し、且つ嫉妬を感じて居たものからの手紙を持つて居たと想像せよ。而して彼女はそれに對してヒステリーの發作を

以て反應すとすれば、それを知る彼女の友人のあるものは心的傳染によりてその發作を招ぐであらう。その機制は同一狀態に自身を置くことの可能又は置かんとの欲求に基く同一視の機制である。他の女兒は又祕密の愛情關係を有せんことを欲し、罪惡の感の影響の爲に、それに結びついて居る苦痛を受取る。彼等は同情からその徵候を受取つたと推定することは、正當でないであらう。却つて反對に同情は同一視のみから生ずるもので、それは次の事實から證明される。卽ち女學校の友達間に通常存在するよりも、少ない同情が豫め存在すと推定される場合でも、この種の傳染や模倣は生ずるものである。一人の自我は一つの點に於て他人の自我と重要なる類似のあることを認知した。その一つの點とは吾人の例によると情緖に對する類似の準備である。同一視はこの準備の上に構成され、病的狀態の影響の下では、同一視は一人の自我が生じた徵候にまでも轉移する。かくして徵候による同一視は、抑壓されて居なければならぬ二つの自我が一致せることの表號になる。

これ等の三つの源泉から學んた所のものを次の如く總括することが出來る。第一に同一視は對象との情緖的結合の起原的形式である。第二に同一視は退行的方法によりて謂はば對象が自我に

投入（Introjektion）することによりて、リビドー的對象結合の代りになる。第三に同一視は共通性質を新に知覺することによりて、性衝動の對象でない人間にも生ずることが出來る。この共通性質が重要なものであればある程、この局部的同一視は有效になり、かくしてそれは新結合の發端をなすやうになる。

集團の部員間の相互結合は、重要なる情緒的共通性質に基く、この種の同一視の性質を有することを吾人は豫知する。而してこの共通性質が指導者との結合の性質の中にあることを推測することが出來る。他の豫知としては、同一視の問題を遺漏なく論じ盡して居ないことと、心理學でいふ移入（Einfühlung）の過程に當面して居ることとである。而してその移入の過程は他人に於ける他我（Ichfremde）の理解に最も大なる役目を演じて居る。しかし吾人はこの場合に、同一視の直接の情緒的結果のみを取扱ひ、知的生活に於けるそれの意義に就ては省くことにする。

精神分析的研究は既に時々精神症の困難な問題を取扱つたが、その結果、直に理解し難いやうな他の二三の場合の同一視を吾人に示すことが出來た。私はその中で二つの場合を詳細に述べて吾人の考察の材料としよう。

男子の同性愛の發生は大部分次の如くである。年少の男子はエディプス錯綜の意味に於て母親に非常に長く且つ強く執着して居る。しかし、遂に青年期の終りに於て、母を他の性的對象に取換へる時期がくる。玆に於て急激なる變化が起る。年少の青年は彼の母を棄てず、彼自身を母と同一視する。彼は自身を彼女に變形し、且つ彼の自我に置換はり得る對象卽ち彼の母から經驗したやうな愛情と心配とを與へ得る對象を捜がす。これは屢々生ずる過程で、吾人は好むだけ幾らでも確證し得る所のものである。而してその過程は有機的推進力と急激なる變形の動機とに關して下された假說とは全く獨立したものである。この同一視に就て著しい事はそれの豐富な仕組である。それはこれまで對象であつたものの模範によりて、自我を重要な樣式の一つ、卽ち性的特質に變形する。この過程に於て對象そのものは廢棄される。その廢棄が全く行はれるか、或は無意識の中に保存されるといふ意味に於て行はれるかは現在の議論以外の問題である。廢され又は失はれた對象と同一視して、その對象の代りにすること、卽ちこの對象が自我に投入することは最早吾人に取りては珍らしくない。この種の過程は時々幼い子供に於て直接に觀察されることが出來る。少し以前にこの種の觀察が「萬國精神分析學雜誌」の中に公にされた。それによると子

猫を失つて不幸に感じて居た一人の子供が、今は彼自身子猫であると宣言し、從つて四つ這ひになつて歩き廻り、食卓で食事をしようとしなかつたといふことである。*

* Marcuszewicz: Beitrag zum autistischen Denken bei Kindern. Internat. Zeit. f. Psychoanal. 1920. Bd. VI.

かやうな對象の投入の他の例は鬱憂症の分析によりて得られる。この病氣は最も著しき興奮の際に、愛する對象の現實的又は情緒的損失を計算する。これ等の場合の主なる特質は、自我の殘酷なる自己輕視で、それに嚴しき自己批判と烈しき自己非難とが結合して居る。分析の示す所によると、この卑下と非難とは根本に於て對象に適用されたもので、對象に對する自我の復仇を示して居る。私が他の場合に述べたやうに、對象の陰影が自我の上に映つて居る。* この場合の對象の投入は全く明白である。

* Trauer und Melancholie. Kleine Schriften zur Neurosenlehre. 1918.

しかしこれ等の鬱憂症は又吾人の後の議論に對し、他の重要なるものを吾人に示して居る。即ちこの疾患は自我が分裂して二つの部分に分かれ、その一つは他のものに對して激怒して居るこ

とを吾人に示す。この他の部分は、投入によりて變化したもので、失はれたる對象を包有して居る。しかしかやうに殘酷に振舞ふ部分は吾人に知られないことはない。それは良心、卽ち自我の批判力を包含して居る。而してこの良心は正常時には自我に對して嚴しくもなく不正でもない批判的態度を取るものである。かかる能力は自我の中に發達し、自我の殘りのものから切離され、それと爭鬪をするやうになるとの假定に吾人は他の場合（私の論文、自己愛並に苦悶と憂欝）に於て達した。而してそれを自我理想（Ichideal）と名づけ、それの機能としては自己觀察、道德的良心、夢の監視、抑壓に於ける主なる作用であると述べた。尙それは子供の自我が自己滿足を見出した最初の自己愛の相續人であることを述べた。又それは環境が自我に求め、自我が常にそれに從ふことの出來なかつた要求をその環境の影響から漸次に集めて行く。而して人が彼の自我そのもので滿足することの出來ない時には、自我から分化した自我理想に滿足を見出すことが出來るやうにする。尙觀察の錯亂に於ては、その批判力の不統一が明白になり、その批判力の起原は權威者、殊に兩親の影響の中に發見されることを吾人は他の論文自己愛の中に述べた。しかしこの自我理想と眞の自我との間の距離の大さが個人によりて夫々相違すること、並に多くの人々

に於ては自我の中のこの分離が子供に於けると同じ程度であるといふことを附言することを吾人は忘れてはならぬ。

しかし集團のリビドー的組織を理解するために、これ等の材料を使用し得る前に、吾人は對象と自我との相互關係に就ての他の例を考察する必要がある。*

* 吾人は病理學より取つた如上の例で以て、十分に同一視の性質を言ひつくしたといへないこと、並にその結果として、集團構成の謎には觸れなかつたことをよく知つて居る。尙一層根本的な且つ包括的な心理的分析をこの點に加へなければならぬ。同一視より摸倣を越えて移入に行く一の道がある。換言すれば吾人が他人の精神生活に對して一定の態度を取り得るやうにする機制を理解する一の道がある。尙存在する同一視の表現中に說明を要すべきものが夥多ある。他の場合には同一視は次の如き結果を生ずる。卽ち人は自己と同一視するものに進擊することを制限し、或は差控へ、又はそのものに補助を與へる。階級感情の根柢となつて居るやうな同一視の研究に於てロバートソン・スミス(Robertson Smich)は驚くべき結果に到達した。卽ちこの同一視は共通物質の認知に基くことを發見した。(Kinship and Marriage) 從つてその同一視は共同の食事によりて生じ得るかも知れない。これ等の樣式は、私の

「トテムとタブー」の中に述べた人間家族の早期の歴史とこの同一視とを結びつけることを可能ならしめて居る。

八、愛することと催眠

言語の慣用は假令それが氣まぐれであつても、ある種の實在を固執するものである。かやうにして言語の慣用は吾人が理論上愛情として分類する極めて多様な情緒的關係にまで愛情の名を與へて居る。しかし又この慣用はこの愛情が固有の、正しき、眞の愛情であるかとの疑ひを生じ、且つ愛情現象の範圍内に愛情の凡ての階段が存在し得ることを暗示して居る。これと同様なことを吾人は觀察の中に容易に發見することが出來る。

一の場合では、愛すること（Verliebtheit）は、直接に性的滿足を目的とする性的本能の方面からの對象充積に外ならない。尙この目的が達せられる時に、その充積は消失する。而してそれが一般的感覺的愛情と言はれるものである。しかし吾人の知る所によれば、リビドー的狀態は決し

てかやうに簡單でない。人間は恰度消失した要求の復活を確實に打算することが出來、それが又性的對象に持久的充積を向け、激情のない間でもそれを愛することの第一の動機であったに相違ない。

人間の愛情生活の極めて著しき發達史から引出した第二の成分を玆に附加しなければならぬ。子供は最初の位相、卽ち通常五歲頃で終りになる位相に於て、愛に對する第一の對象を兩親の何れかに發見する。而して滿足を要求する子供の性的衝動の凡ては、この對象に結合する。その後入り來つた抑壓作用が、この幼兒の性的目的の多數を廢棄するやうに强ひ、兩親に對する關係に奧深い變化を殘すものである。子供は尙兩親に結びついて居るが、しかし目的を禁止されたもの(Zielgehemmte)として敍述さるべき衝動を以て兩親に結びついて居る。子供がその後愛情の對象に對して感ずる所の情緖は溫情(Zärtliche)として敍述される。早期の感覺的傾向が多少强く無意識の中に保存されることは明かで、ある意味に於ては、最初の流の全部が存在をつづけるといふ位である。*

* Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. 參照。

青春期に於て、直接の性的目的への烈しき努力のあることを吾人は認知する。不利の場合にはその努力は持續する溫情の情緒傾向から分れて感覺的流の形に於て殘るものである。その時吾人は一の像を見るが、その像の二つの方面は、ある文學の方面から好んで理想化される所のものである。この種の人は、彼が非常に尊敬するが、しかし性的活動を惹起さない婦人に對しては烈しい熱情を示し、彼が愛して居らず且つ輕視する他の婦人に對しては强力になる。* しかし青年は非感覺的、天國的愛情と、感覺的地上的愛情との間にある程度の綜合を持來たすことに屢々成功する。而して彼の性的對象に對する關係の特質は目的を禁止されない衝動と、禁止された衝動との相互作用によりて規定される。純粹の感覺的愛情と反對して、人が愛して居ることの深さは目的禁止を受けた溫情の衝動の參加する大さによりて測定することが出來る。

*Ueber die allgemeinste Erniedrigung des Liebeslebens. Sammlung, 4 Folge, 1918.

愛することの問題と關聯して、最初より吾人を驚かしたものは性的超評價の現象である。それは愛する對象が批判をある程度まで免れることで、愛人の特質は凡て愛しない人間よりも高く評價され、又愛しなかつた時よりも愛するに至つた後の方が高く評價されることである。若し感覺

的傾向が幾分强く抑壓又は排除されるならば、その對象の精神的卓越のためにその對象を感覺的に愛するやうになつたとの錯覺を生ずるが、しかし實際にはそれと反對に感覺的魅惑のために、その者に精神的卓越を與へたかも知れない。

この場合に判斷を誤らず傾向は理想化（Idealisierung）のそれである。しかしそれによりて吾人の衝動の方向を容易に知ることが出來る。對象は吾人自身の自我と同じ樣に取扱はれ、吾人が愛情に陷る時には自己愛的リビドーの夥しき量が對象の方に溢れて行くことが認知される。愛情選擇の多くの場合に、對象が吾人自身の未だ達せざる自我理想の代表として役立つことは明白である。吾人は完全の爲にその對象を愛するもので、その完全は吾人自身の自我の爲に達せんと努力したものであり、尙又吾人の自己愛を滿足する爲に、この廻り路によりて求めんとしたものである。

性的超評價と愛することが尙增加すると、この像の解釋は尙明白になつてくる。直接に性的滿足に向けられた努力は普通起るやうに全く突返へされるかも知れない。例へば靑年の感傷的愛情の如きはそれである。而して自我は漸次に謙遜になり、對象は漸次に偉大に且つ貴重になり、遂

にはその對象が自我の自己愛の全部を所有するやうになり、それの自然の結果として、自己犧牲を生ずる。謂はば對象が自我を食ひ盡したのである。謙遜、自己愛の制限、自己傷害の特質は何れの愛することの場合に表れる。その極端な場合には、それ等の特質が只强力になり、且つ感覺的要求の撤廢された結果として、全くの支配權を得るやうになる。

これは愛情が不幸であり、滿足の出來ない場合に特に容易に生ずる。何となれば如何なる性的滿足も性的超評價が常に低減されて行くからである。昇華された抽象觀念への專心と區別されないやうな對象への自我の專心が表れると同時に、自我理想に分配された機能は全く働きを中止する。その能力によりて行はれて居た批判は沈默するやうになり、爲に對象がなし、且つ求めるものは何れも正當になり、非難のないものになる。良心は對象の爲になされた何れの物にも適用されず、愛に盲目になつた人は後悔することなく犯罪者になる。而して對象が自我理想の代りになつたとの樣式にこの全體の狀態を總括することが出來る。

魅惑とか溺惑とか記述される愛情の極度の發達と、同一視との間の區別をいふことは容易である。同一視に於ては、自我は對象の特質を以てそれ自身を豐富にするもので、フエレンツチの言

葉を借りて云へば、自我は對象をそれ自身に投入したのである。所が極度の愛情に於ては、自我は貧弱になり、對象に降服し、對象を自我の最も重要な成分の代りにして居る。しかしかやうに叙述することは一層精密に考察すると、實際に存在しない現象を存在するかの如く誤らしめるやうである。何となれば經濟的見地からいふと、貧弱とか豐富とかの問題はない。愛することの極端の場合は、自我が對象を自身に投入した狀態であるといふことが出來る。次の如く區別をいふときは恐らくその事項の中心に一層よく觸れるかも知れない。即ち同一視の場合には、對象が失はれ又は棄てられた。その後對象は再び自我の中に建設され、自我は失はれた對象の模範に倣つて一部分變化をする。他の場合には對象が保存され、自我により、又自我の出費によりて對象の超充積を生ずる。しかし玆に再び困難が表れてくる。同一視は對象充積を放棄したことを確かに豫想し得るか。保存された對象と同一視することはあり得ないか。吾人はこの微妙な問題を論じ初むる前に、他の問題即ち對象は自我の代りになるか、又は自我理想の代りになるかの問題が、却つてその事項の眞の主要點を含むといふ見解が吾人に生じてくる。

愛することから催眠までの間隔は明かに廣いものでない。兩者の一致點は明白である。催眠術

者に對しては、愛する對象と同樣な服從、謙遜、批判の缺乏がある。又被術者自身で發意することも同樣に吸收されて無くなり、催眠術者が自我理想の位置を取ることも明白である。催眠では凡ての事が一層明白であり、一層强く示されてあるから、愛することを催眠によりて說明する方が、催眠を愛することによりて說明するよりも遙かに目的に叶つて居る位である。催眠術者は唯一の對象で、彼以外の誰にも被術者は注意しない。術者が要求し又は確言することは何でも夢のやうな仕方に被術者の自我が經驗するといふ事實は、自我理想の機能の中、事物の實在を檢査する仕事の存在することを、吾人は言ふのを省いたことを想起する。* 事物の實在を檢査する義務を通常履行する心的能力によりて自我の實在が證明されるならば、自我が實在の知覺を得ることは不思議でない。無禁止の性的目的への努力が全く缺けて居ることは、極端な純潔の現象を生ずることに貢獻して居る。催眠的關係は、無限の愛情を專注することで、但しこの場合に性的滿足は缺けて居る。所が愛する場合には、この性的滿足が一時退くことはあるが、しかし背景の中に殘存して居て、後日の目的となり得るやうになつて居る。

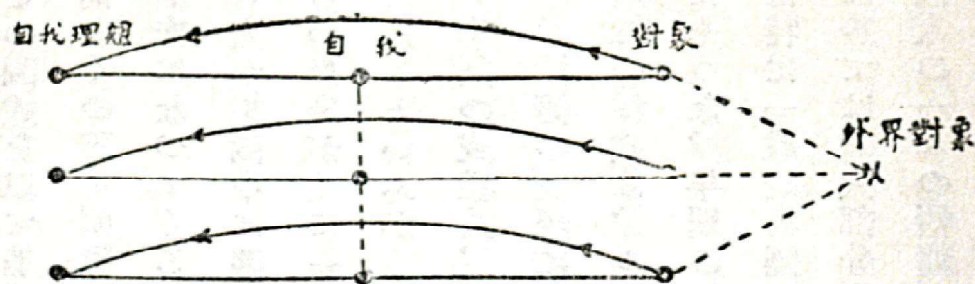
* Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre, Kleine Schriften zur Neurosenlehre, Vierte

Folge, 1918.

しかし他方に催眠的關係（この言ひ表し方が許されるとすれば）は、二つの部員からなる集團構成であると言へるかも知れない。故に催眠と集團構成とを比較するといふことは妥當でなく、寧ろ催眠と集團構成とは同一であるといふ方が遙かに眞實である。催眠は集團の複雜なる構造から一の要素を分離して吾人に示してくれて居る。卽ちその要素といふのは、指導者に對する個人の行動である。催眠はその數が制限されて居ることによりて集團構成から區別されるが、その區別は、恰も催眠が直接の性的努力の缺けて居ることによりて、愛することから區別されて居ると同樣である。この點に於て催眠は集團と愛することとの中間位置を占めて居ると言へる。

目的を禁止された性的傾向が、人間相互の持續的結合をなし遂げることは、興味あることである。この目的禁止の性的傾向は完全な滿足を得ることが出來ない爲に、エネルギーの放射がなく永久に減衰しないが、目的を禁止されない性的傾向は、性の目的が達せられる何時でもエネルギーの放射を來たし、非常な減衰を被るといふ事實から、如上の事は容易に理解される。感覺的愛情は、それが滿足される時に消滅する運命を有して居る。それをして持續せしむるには、純粹の

温和な成分、例へば目的禁止の如き成分を最初から混じて置くか、或は溫和な傾向に變形しなければならぬ。

催眠は直接の性的傾向を有しない愛することの狀態であると、これまで合理的に說明したことに例外を示すやうな樣式が存在しなければ、吾人は催眠によりて集團のリビドー的組織の謎を直ちに解決することが出來るであらう。集團のリビドー的組織の中には、說明し難き且つ神祕のものとして認められなければならぬものが未だ澤山ある。それには優勢な力を有するものと、力なく助けなきものとの間の關係から生ずる痲痺の附加的要素がある。而してこの痲痺は動物に生ずる驚愕催眠(Schreckhypnose)への過渡であるかも知れない。痲痺の生ずる樣式、竝にそれの睡眠に對する關係は明白でない。不思議な仕方にある人々はそれに罹るが、他の者は全くそれに抵抗する。これはその中に未知の成分があることを示して居る。しかしそれは恐らくリビドー的態度の純潔からくるかも知れない。催眠にかかつた人は他の點では完全に暗示に服從する時ですら尙彼の道德的良心は抵抗を示す。しかしこの抵抗は通常行はるる催眠に於ては或知識が保存されることから生ずるかも知れない。卽ち取扱はるる事項は單なる遊戲で人生に遙かに大切な他の狀

態を忠實に再生したものでないとの或知識が保存されて居るから生ずるかも知れない。

これまでの議論を基礎として吾人は集團のリビドー的組織の圖式を與へることが出來ると信ずる。或は少くとも吾人がこれまで考察したやうな集團卽ち指導者を有し、且つ餘り多くの組織の爲に二次的に個人の特質を獲得することの出來なかつた集團の圖式を與へることが出來る。この種の一次的集團は同一の對象を彼等の自我理想の代りにして居る一定數の個人である。而して彼等は同一對象を自我理想として居る結果、彼等の自我を相互に同一視するものである。この關係を圖示すると上の如くである。

九　群集衝動

この圖式を以て集團の謎を解決したとの錯覺に吾人は長く止まることは出來ない。吾人は實際に尙多くの點を明瞭にしなければならぬ催眠の謎にまで追ひやられたことを回想する時に、直ちに不安になつてくる。而して他の反對が尙大いに硏究すべき途を吾人に示して居る。

吾人が集團中に觀察する强烈な情緖的結合は、卽ちその部員に獨立と發意とが缺如せること、部員の反應が凡て一樣なること、集團人の水準にまで低下すること等の特質を說明するに全く十分であるといふかも知れない。しかし若しそれを全體として眺めるならば、集團はそれ以上である。集團の或樣式、例へば知力が弱くなること、情緖の禁止性が無くなること、中庸と遲延との不能、情緖の表現に於て凡ての制限を越ゆる傾向、情緖を凡て行動の形式に代へることや、その他類似の樣式は、ルボンによりて强く敍述されて居るが、それは吾人が野蠻人や子供の中に發見したやうな、早期の階段に心的活動が退行して居るとの明白なる像を吾人に與へる。この種の退行は特に一般的集團の主なる特質であるが、しかし吾人の聞く所によると、組織された人爲的集團に於ては、大部分その退行は防止されることが出來る。

個人の一々の情緖と個人的知的行爲は、單獨に働くには餘りに弱く、集團中の他の人々の同樣

な反應によりて强力になることを絶對的に待たなければならぬことを吾人は認知して居る。この依賴の現象の如何に多くが人間社會の正常の組織に存在するか、個人の創意と勇氣とが集團中に如何に僅かに發見されるか、種族的特質、階級的偏見、輿論等の形式に表れる集團の態度によりて、個人のどれだけ支配されるか等に就て吾人は想起する。暗示の影響は單に指導者によりてのみ行はれず、尙各個人が他の個人の上にも暗示を與へることを知る時に、その影響は一の大なる謎になる。而して吾人は指導者に對する關係を不當に强調し、相互暗示の成分を餘りに背景に引込めてしまつたことを吾人自身に非難しなければならぬ。

かやうに吾人は中庸の態度を取つた後、尙簡單な根據から說明を試みて居る他の主張に耳を傾けようと思ふ。その說明はトロツター(Trotter)の集合衝動に就ての思慮ある著書の中に發見される。只私の遺憾に思ふ點は、この著書が近時の大戰爭によりて生じた反感から全く免れて居ないことである。*

トロツターは、集團中に起るとして記述される心的現象を群集衝動(群居性)から引出して居

* W. Trotter : Instincts of the Herd in Peace and War. 1916.

る。その衝動は動物の他の種族に於けると同樣に人間に於ても先天的のものであるとする。この群居性は生物學上多細胞性に類似して居り、謂はば多細胞性の持續である。リビドー說の見地から言へば、群居性はリビドーから生ずる傾向のその後の表現で、その傾向は同種類の凡ての生物によりて感ぜられ、漸次に包括的單位に結合するものである。個人は單獨の時には不完全を感ずる。幼い子供の示す憂慮は旣にこの群集衝動の一表現であるやうに見ゆる。群集に反對することはそれから分離すると同樣で、反對することを避けるやうに苦心する。しかし群集は新奇又は異常のものから離れる。群集衝動は一次的のあるもの、それ以上分割し難きもののやうに見ゆる。

トロツターは一次的衝動（或は本能）として、自己保存、榮養攝取、性、群集のそれを列擧する。最後のものは屢々他のものと反對の位置に置かれる。罪惡及び義務の感は群居動物の特殊の所有である。トロツターは又精神分析學が自我の中に存在すと述べた抑壓力を群集衝動から引出して居る。尙精神分析的處置の際に醫師の出逢ふ抵抗をも同一の源泉から引出して居る。言論は群集中の相互理解に資する力を有する時にその意義を發揮するもので、個人相互の同一視がその言論に大に與りて居る。

ルボンは主として代表的の經過的集團構成を、マクヂューガルは安定せる組合を取扱つたが、トロツタ－は群居動物としての人間が生活する最も一般的の集合に彼の興味の中心を置き、それの心理的基礎を與へて居る。しかしトロツタ－は群集衝動を泝つて考察する必要がなかつた。何となれば氏はその衝動を一次的のものとし、それ以上に分析することが出來ないものとしたからである。ボーリス・サイディス (Boris Sidis) は群集衝動を暗示性にまで泝ることを企てたが、常にそれは氏に取つては餘分の說明になつて居る。その說明はよくあり勝な且つ不滿足な形式のものである。寧ろ暗示性が群集衝動から派生したものであるとの反對の主張が、この問題に一層多くの光明を與へるやうに見ゆる。

トロツタ－の主張に對して、集團中の指導者の役目を全く考慮しないと攻擊することは、氏以外の人の主張に於けるよりも、遙かに正當である。吾人は指導者を看過すれば集團の本質を理解することが不可能であると主張しようと思ふ。群集衝動は全く指導者に對する餘地がない。指導者は偶然に群集の中に發生する。尙又この衝動から神の要求へ導く道もない。群集は牧者を缺いで居る。しかしこの外にトロツタ－の主張は心理學的に覆へされる。換言すれば、群集衝動は分

析し難きものでないこと、即ち自己保存や性の衝動と同じ意味の一次的のものでないことは少くとも眞實らしく思はれる。

群集衝動の個體發生を辿ることは勿論容易なことでない。幼兒が獨り居る時に示す憂慮はトロッターによると群集衝動の表現であると主張するが、しかし一層容易に他の解釋を暗示する。憂慮は子供の母に關係し、その後他の親しい人に關係する。それは滿足されざる欲求の表現で、子供は不滿足の欲求を憂慮に變化する外に他の方法を知らない爲である。*一人居る時の幼兒の憂慮は、任意の群集の人々によりて靜まるものでない。寧ろ反對にこの種の未知人の近寄ることの爲に憂慮を惹起すものである。子供に於ける群集衝動、又は集團感情の本質に就ては長い間何も觀察されてない。かやうなものは、子供と兩親との關係から、殊に多數の子供を育てる育兒院に於て發達する。而してそれは年長の子供が、年少のものに示す最初の嫉妬に對する反動として表れる。年長の子供は相續者を嫉妬して排除し、兩親を引離し、それの凡ての特權を奪はんとすることは確實である。それに拘らず、この年少の子供は、少しも變化なく兩親から愛せられるので、年長の子供は自己を傷けることなくしては敵對的態度を支持することの不可能なるを知り、爲に

他の子供と自身とを同一視するやうに强ひられる。かくして子供の群の中に公共的又は集團的感情が發達し、それが後に學校に於て遙かに發達を遂げる。この反動構成によりて生じた最初の要求は、公平であり、凡てに對する平等の取扱である。この要求が學校に於て如何に聲高く且つ執念深くなされるかを吾人は凡て知つて居る。人は自分が可愛がられる者になることが出來なければ少くとも他の者が可愛がられる者となることを欲しない。保育室や學級に於て、嫉妬が集團感情に置換ることとは、若し同樣の過程がその後他の事情の下に再び觀察されることが出來なければ眞實でないやうに考へられるかも知れない。かの激情的に愛し合つて居る婦人や女兒の群が、歌手やピアノ彈奏者の周圍に演奏の後群つてくることを考へて見よ。それ等の一々の者は他の殘りの者に對して、嫉妬を感じて居ることは確かである。しかし人數が多くて、愛の目的に達することが出來ず、彼等はそれを止め、而して相互の髮を引張る代りに、その場合の主人公を彼等共通の行動で崇拜し、彼の垂れた髮の一部を持つことを喜ぶであらう。最初は競爭者であるが、後には同一對象に對する類似の愛情によりて相互を同一視することが出來る。一般にある如く、一の衝動狀態が種々の結果を生じ得るとすれば、現實の結果が一定量の滿足を與へ得る時に、人生の

事情の爲にその目的に達することを妨げられる如き他の結果が假令一層明白であつても、看過されることは決して驚くべきことでない。

* 憂慮に就ては Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, XXV を見よ。

その後社會の中に集團精神 (Gemeingeist) の形式に於て表れるものは、それが最初猜忌であつたものから派生したことを示して居る。誰でも出過ぎることを欲しないし、いづれの者も同一であり、同一のものを所有しなければならぬ。社會的公平といふことは、吾人自身に餘り多くの事をなす爲に、他人がなすことなくして斷念しなければならなくなつたり、又同一の仕事であれば他人がそれを要求することの出來ない位になることを意味する。この平等に對する要求は、社會的良心竝に義務の感の根本である。それは黴毒患者が病毒を他人に傳染せしめはしないかと恐れる憂慮の中に思ひがけなく表れる。そのことに就て、精神分析學は、吾人に次の如き理解を與へて居る。この傳染憂慮 (Infektionsangst) は病毒を他人に傳播せんとの無意識的欲求に反對する恐しき反抗に相應する。卽ち患者は何故に自分一人だけ傳染し、他人から隔離されなければならぬか。何故に他人はさうでないかと反問する。これと同一の原理がソロモンの判斷に就ての美し

い逸話の中に發見される。即ち一人の婦人の子供が死ぬならば、他の婦人も生きた子供を有してはならない。愛子を失つた婦人はこの要求を認めるであらう。

かやうに社會的感情は、最初敵意の感であつたものが、同一視の性質を有する積極的調子の結合に變換することに基いて居る。吾人がこれまで事件を追跡することの出來た限りでは、この變換は集團以外の一個人と一般的の温情的結合をなした結果であるやうに見ゆる。同一視に就ての吾人の分析は、これで全部を盡したとは言へない。しかし吾人はこの一の様式即ち平等化が强く實行されなければならぬとの要求に復歸することで、吾人の現在の目的には十分である。吾人は已に敎會と軍隊との二つの人爲的集團の議論の中に、それ等の最初の條件は、彼等の凡ての部員が一人の指導者によりて同様に愛されなければならぬことであることを聞いて居る。しかし集團中の平等の要求はその部員にのみ適用されて、指導者に適用されないことを忘れてはならぬ。凡ての部員は相互に平等でなければならぬ。しかし彼等は凡て一人の人間によりて支配されることを欲する。相互に同一視し得る者は平等であり、只一人が彼等に卓越するといふことは、生命を支持し得る集團中に現在せる狀態である。玆に於て人間は群集動物（Herdentier）であるとのト

ロッターの主張を吾人は敢て訂正を加へ、人間は寧ろ群衆動物（Hordentier）で、首領によりて導かれる群衆中の個々の生物であると主張しようと思ふ。

一〇 集團と原始群衆

人間社會の原始形式は、有力なる男性によりて専制的に支配された群衆であつたとのダーウィンの推測を私は千九百十二年に採用した。それはこの群衆の運命が人類の由來の歴史の上に不滅の痕跡を殘したことを示すためであり、且つ殊に宗教、道德、社會組織の發端を包含するトーテム崇拜の發達が首領を亂暴に殺すことと、父の群衆が兄弟の社會に變形することとに關係して居ることを示さんためであつた。* これは確かに一の假説に過ぎないもので、かの考古學者が歴史前の暗黒を明るくせんと努むる他の假説と同様である。即ち親切な英國の批評家クレーゲル（Kroeger）によりて頓智的に「如何にも物語」(Just-so story) と名づけたものと似て居る。しかし私はかかる假説が漸次に新しい領域に聯絡と理解とを持來すことが出來ると證明されるならば、その

假說を信ずることが出來ると思ふ。

* Totem und Tabu.

人間の集團は類似の同僚の群の中に優勢の力を有する一個人の像を再び吾人に示すが、その像は原始群衆（Urhorde）の觀念中にも包含されて居る。吾人が屢々叙述したことから知られる如き集團の心理學、即ち意識的の個人の人格が消滅すること、思想と感情とを一の共通せる方向に集中すること、情緒と無意識的心的生活の優勢、意向が生ずるや否や直ちに實行する傾向等の凡ては、原始的心的活動、即ち最初の群衆に歸し得る如き活動へ退行せる狀態に相應して居る。*

* 吾人が今人類の一般的特質の中に叙述したものは、特に原始群衆に適用しなければならぬ。個人の意志は餘りに弱くあつた。彼は行動を敢てすることが出來なかつた。集合的衝動以外に働く衝動は無く、只一の共通の意志が存するだけで、單一の意志は無かつた。觀念も亦それの一般的擴散の知覺によりて强力にならなければ、執意に變ることは出來なかつた。この觀念の弱いことは、群衆の凡ての部員の示す情緒的結合の强力なことによりて說明しなければならぬ。しかし彼等の生活狀態の類似と私有財產の缺除とが、個人的精神行爲の一樣性を決定する助けになる。吾人が子供と兵士とに於て觀察する如く、

共通活動は、排泄機能に至るまで行はれる。只一の大なる例外が性行爲に表れる。性行爲に於ては、第三者は少くとも餘分の者であり、極端の場合には、苦痛の期待の狀態に置かれる。群集に對する性的必要（性器的滿足に對する必要）の反動に關しては下に述べることにする。

かやうに集團は原始群衆の復活であるやうに見ゆる。實際原始人が各個人の中に生殘りて居る如くに、かやうな原始群衆は再び任意の群衆の中に生ずる。人間は習慣的に集團構成の支配の下にある限りに於て、吾人は原始群衆の殘存を集團の中に發見する。集團心理學は最も古い人間の心理學であると吾人は結論しなければならぬ。集團の凡ての痕跡を顧慮することなく、單に個人心理學として孤立せしめた事實は、後になつて、古い集團心理學から漸次に引拔いたもので、從つてそれは不完全なものと言はなければならぬ。吾人はこの發達の出發點を後に說明することにする。

尙精密に考察すると、この主張がどの點に於て訂正を要するかが分かる。寧ろ個人心理學は集團心理學と同じ位に古くあるに相違ない。蓋し最初から二種の心理學、即ち集團の個々の部員の心理學と、父、首領、指導者のそれとがあつたからである。集團の部員は恰も今日見る如く結合

して居た。しかし原始群衆の父は自由であつた。彼の知的行爲は孤立して居ても尙强く且つ獨立して居た。而して彼の意志は他人から强力にされる必要が無かつた。その爲に、彼の自我はリビドー的結合を有せず、彼自身以外のものを愛せず、他人は只彼の必要に役立つといふ限りに於て存在したと吾人は假定する。彼の自我は單なる必要以上に何も餘分なものを對象に交付しなかつた。

人類の歷史の極初から旣に彼は、ニーチエが將來出現すると豫期した超人(Übermensch)であつた。今日でも集團の部員は、彼等の指導者から、平等に公平に愛せられるとの錯覺を必要とする。しかし指導者自身は自己以外を愛する必要なく、彼は支配者的性質、絕對的自己愛、自己確信を有し、且つ獨立的であることが出來る。吾人は愛情が自己愛を防壓することを知つて居る。又愛情がかやうな仕方に働くことによりて、文化の一成分に如何にしてなつたかを吾人は示すことが出來る。

群衆の原始的父(Urvater)は、後になつて神格化されたやうに不死ではなかつた。彼が死ぬと他の者によりて置換へられなければならなかつた。彼の地位は彼の最も若い息子によりて相續さ

れるのであるが、その息子はその時まで他のものと同じく集團の一員に過ぎなかつた。それで集團心理學を個人心理學に變形する可能がなければならぬ。恰も蜜蜂は必要の場合には幼蟲を働蜂の代りに女王蜂になすことが可能であるやうな變形が、容易に成遂げられる條件を發見しなければならぬ。それに就て吾人は一の可能を想像することが出來る。原始的父は彼等の直接の性的傾向を滿足するために彼の息子を妨害した。彼は息子に禁戒を强ひ、且つ目的を禁止された性的傾向から生ずる彼と又は他人との情緒的結合をなすやうに强ひた。謂はば彼は息子を集團心理に向ふやうに强ひた。彼の性的嫉妬と頑迷とが結局集團心理の原因になつたのである。*

* 息子が父から逐出され、引離される時に、他人との同一視から同性的對象愛に進み、かくして父を殺す自由を得たと假定してよい。

彼の相續者となつたものは又性的滿足の可能が與へられ、その爲に、集團心理の條件から逃れる道が開かれる。リビドーが婦人に固定することと、遲延又は蓄積の必要なくして滿足し得ることとは、目的を禁止された性的傾向の意義を失はしめ、彼の自己愛を十分な强度に高めるやうにする。この愛情と性格構成との關係に就ては後の追加の章で述べる。

人爲的集團が支持される仕組と原始群衆の組織との間の關係はこの場合に特に吾人に教ゆる所が多いから、今少しく强調してよいと思ふ。軍隊や教會が支持されることは、指導者が凡ての個人を平等に且つ公平に愛するとの錯覺に基くことを吾人は述べた。しかしこれは原始群衆に於ける狀態を、單に理想的に改造したに過ぎない。原始群衆の場合には、凡ての息子は原始的父によりて迫害されたことを知つて居り、又等しくその父を恐れて居た。凡ての社會的義務は、この改造に基いて構成されるのであるが、その改造は、旣に原始群衆の次に表れる人間社會の形式、即ち、トテム族の中に豫想されて居る。自然の集團構成としての家族が破壞し難き力を有することは、父の平等なる愛情に就ての必然的假定が、家族に對しても眞に適用し得られることを示して居る。

しかし原始群衆から集團が導き出されたことに就て、吾人は尙多くを豫期する。それは集團構成に於ける理解し難く且つ神祕なもの、即ちこれまで催眠とか暗示とかの謎の如き言葉で蔽はれて居たものを理解するに吾人に補助を與へるものである。而して私は又それによりて理解し得ると信ずる。催眠には何か直接に不穩のもの（Unheimliches）が存在することを想起して見よ。し

かしこの不穩なものの特質は抑壓を受けた、或古い且つ親熟のものたることを暗示する。[*] 先づ催眠が如何にして導かれるかを考察して見よう。催眠術者は被術者の意志を奪ふ所の不思議な力を有すと主張し、被術者もそれを信ずる。この神祕の力、今日でも尙通俗には動物磁石と屢々言はれる力は、原始人がタブーの源泉として認めて居る力と同一である。卽ちその力は王や酋長から發散するもので、その力(mana)に近よることは危險であるとされる。催眠術者は、この力を所有すと想像されるが、如何にして彼はそれを表すか。被術者は、術者を眼で見るやうに命ぜられる。催眠をかける最も代表的の方法は、術者を見ることである。それは原始人に取りて酋長を見ることが危險であり、且つ堪へ難きことであることと同一で、それは又後になつて主神を見ることが死を惹起すと同樣である。モーゼスですら彼の人民とエホバとの間の仲介者として働かなければならなかつた。蓋し人民は神を見ることに堪へかねたからである。モーゼスが神の面前から歸つてきた時に、彼の顏は光つた。それはマナ(mana)のあるものが彼に乘り移つた爲で、恰も原始人の間の仲介者に起ると同一である。[**]

* Das Unheimliche. Imago, 1919, Bd. V.

** Totem und Tabu.

催眠は又他の方法で起り得ることは眞である。例へば光る事物を凝視したり、單調の音を傾聽しても可能である。このことが誤解を來たし、不適當な生理說を生ずるに至つた。實際この方法は單に意識的注意の轉換と固定とに役立つて居る。その狀態は術者が被術者に向つて「汝自身を全く私と關係せしめ、世界の殘りのものと全く無關係であれ」といふのと同樣である。かやうな言葉を使ふことは催眠術者に取りて技術上不適當であることは勿論である。それは被術者を彼の無意識的態度から引離し、意識的反對を惹起すやうに刺戟する。催眠術者は被術者の意識的思想をその者自身の意向に向けることを避け、且つ世界が被術者に取りて無興味に見ゆるやうな活動に被術者を沈める。しかし同時に被術者は彼の全部の注意を無意識に術者に集注しつつ、又その術者に對し一種の關係（Rapporte）即ち委任の態度を取りつつあるものである。かやうに催眠にかける間接の方法は、頓智に用ひらるる多くの技術と同じく、無意識の出來事の過程に干渉を與ふる心的エネルギーの一定の分配を防止する如き結果を有する。而してこれ等の間接方法は凝視又は打音の手段による直接方法の影響と同じ結果に導く。*

＊被術者の態度は術者に對して無意識に向けられて居るのに、單調無興味の知覺を被術者は意識して居るといふ狀態は、精神分析的取扱ひの出來事の中にも、それと竝行した狀態を發見する。その狀態に就て玆に述ぶる價値がある。分析の進みに於て尠くとも一度は次の如き瞬間が來る。卽ち患者は積極的に何も心の中に生じて居ないと頑固に主張する時期がある。彼の自由聯想は停止し、聯想を運動に置く平常の動力がその效力を失ふ。强ひて聯想を求めた結果、遂に彼は相談室の窓から見ゆる景色、而前にある壁紙、天井から吊されてあるガスランプなどを考へて居るといふやうになる。その時吾人は直ちに彼が轉移に陷つて居ること、竝に醫師に關係せる無意識の思想に禁囚はれて居ることを發見する。而して患者にその說明を與へるや否や、患者の聯想の停止が消失するのを發見する。

催眠術者が催眠の初めに屢々なす所の、眠るやうにとの命令を與へる時に、彼は自身を被術者の兩親の位置に置きつつあるとのフエレンツイ(Ferenczi)の發見は眞である。氏の考によると、催眠は二種に區別される。一は機嫌を取り、慰めることで、母親を模範にしたものであるが、他は威嚇することで、父親から導き出したものである。＊催眠に於ける眠れとの命令は、世界の凡ての興味を撤回し、施術者に興味を集注せよとの命令と全く同じ意味である。而してその命令は被

術者に左様に理解される。何となれば外界の興味を撤回する所に、睡眠の心理的特質は存し、睡眠と催眠狀態との間の血緣はその點に存するからである。

* Ferenczi, Introjektion und Übertragung. Jahrbuch f. psychoanal. u. psychopath. Forschungen. I, 1909.

かやうな手段によりて催眠術者は術者の古い遺産の一部を喚起する。その遺産は彼をして兩親に服從せしめ、父に對する關係の中に個人的復活を經驗したものである。かくして喚起される觀念は最高の且つ危險な人格で、その人格に對しては受動的マソヒズム的態度のみが可能であり、その人格に被術者の意志は服從されなければならぬ。然るにその人と單獨で居ること、その人の顏を凝視することは、冒險な企てのやうに見ゆる。かやうな仕方に於て原始群衆の一々の部員と原始的父との關係を幾分表象することが出來る。他の反應から知らるる如くに、個人はこの種の古い狀態を復活する爲に、種々の程度の個人的傾向を保存した。しかし催眠は只一の遊戲であり古い印象の虛僞的復活であるとの知識は保存されることが出來る。而して催眠中の意志停止に基く餘り眞面目の結果に對する抵抗をその知識によりて用心する。

暗示現象の中に示される集團構成の恐ろしく强迫的な特質を、吾人は原始群衆に於けるそれの起原にまで泝り得ることは正當である。集團の指導者は尙恐るべき原始的父である。集團は無制限の力によりて支配されることを欲する。それは權威を極度に慕ふ。ルボンの語によると、それは服從を渴望する。原始的父は自我理想の代りに、自我を支配する所の集團理想である。催眠は二人の集團として叙述される權利がある。暗示に對する定義としては次の如き確信が存在する。即ちそれは知覺や推理に基いたものでなく、エロス的 (erotische) 結合に基いて居るとの確信である。*

* この節に於ける議論は、吾人をして催眠に就てのベルンハイムの概念を捨て、素朴な以前の概念に歸らしむるやうにしたことを玆に强調する價値があるやうである。ベルンハイムによると、凡ての催眠現象は暗示の成分に溯ることが出來、それ以上の說明は不可能であるやうに見ゆる。しかし吾人の結論によると、暗示は催眠狀態の一部分の表現であり、催眠は人間家族の早い歷史から無意識に殘存した傾向に基くといふことが出來る。

一一 自我の階段

権威者によりて與へられた集團心理學に就ての相互に補充する叙述を心中に有しながら、吾人は今日の個人の生活を見渡す時に、それ等の示す複雜の爲に、包括的解釋を企てる勇氣を失ふかも知れない。一々の個人は多數の集團の構成分子で、彼は同一視の結合によりて多くの方向に結合して居り、且つ種々の模範の上に彼の自我理想を建設して居る。從つて個人は多數の集團心を分擔して居る。例へば彼の屬する民族、階級、信仰、組合、國家等の集團心を分擔して居る。而して彼は獨立と創意の一小片を有すといふ範圍に於て、それ等の團體の上に彼自身を高めることが出來る。上の如く一樣であり持續的である作用を有する安定且つ持久的集團構成は、ルボンが集團精神の立派な心理的特質の輪廓を作り上げた所の、迅速に構成された經過的集團よりも觀察者に訴へる點が尠い。他のものの上に加へられたかの如き喋しい一時的集團の中に、吾人が個人的發達と認むべきものが一時的に全く消失するといふ不思議な事が表れる。

吾人はこの不思議なことを說明するのに、個人は彼の自我理想を捨てて、その代りに指導者の形を取つた集團理想を採用する爲であるとした。しかしこの不思議なことは何れの場合にも一樣に大であるとは言へないとの訂正を附加しなければならぬ。多數の個人に於て、自我と自我理想との間の分離は餘り遠く進んで居ない。二つのものは尙容易に一致する。自我はそれの以前の自己愛的滿足を屢々保存する。指導者の選擇はこの事情の爲に極めて都合がよい。指導者は只特に著しき純粹な形式に於ける代表的な個人の特質を有することを要し、大なる力とリビドーの自由との印象を與へることを要する。而してその場合に强き首領に對する要求が屢々彼を迎へ、その他の場合では與へられない優勢を彼に附與する。集團の他の人々、即ち幾分の訂正なければ彼等の自我理想が指揮者に合體しないやうなものは、暗示によりて、換言すれば同一視によりて他のものから引裂かれる。

集團のリビドー的組織の說明に吾人が貢獻することとの出來たものは、自我と自我理想との間の區別に導き、且つ對象を自我理想に同一視したり置換へたりすることの二種の結合にまで泝らしめる。自我分析の第一步として、自我に分化的階段があるとの假定は、種々の方面の心理學から

漸次にその正當を認められなければならぬ。私の「自己愛序説」の論文中に、この區分を支持するに先づ利用され得る凡ての病的材料を蒐集した。しかし精神症の心理學に一層深く入り込む時に吾人の豫期し得ることは、その分化的階段の意義が、遙かに大となることを發見することである。自我はそれから發達した自我理想に對して對象關係に立つこと、神經症の研究によりて知るに至つた外界の對象と全體自我との間の凡ての相互作用が自我の內部の新しい舞臺で反復され得ることを想起して見よ。

この場合に私は、この見地から可能に見ゆる結果の一つを追求し、他の場合*に未解決に殘した問題の議論を玆に續けよう。吾人が知るやうになつた心的分化の一々は、心的機能の困難の新な加重を表し、その機能の不確實を增加し、機能の破壞、即ち疾病の出發點となるかも知れない。かくして吾人は、絕對的自己滿足の自己愛から、變化する外界の知覺、竝に對象發見の發端に至るまでの階段をその發生の順序によりて作り上げた。而してこれに次の事實が聯合する。即ちその事實といふのは、吾人は事物の新しい狀態に永い間堪ゆることが出來ないこと、吾人は剌戟が缺除し、且つ對象の無い以前の狀態に、周期的に睡眠中に復歸することである。しかし吾人はこ

の際外界の例に倣つて居ることは眞で、その外界は晝と夜との周期的變化によりて、吾人の被る刺戟の大部分を一時撤回して居る。病的に一層重大なる第二の例は、かやうな拘束を受けない。吾人の發達の進みに於て、聯絡ある自我と、それ以外にある無意識の抑壓された部分とに、吾人の心的存在は分裂を生じた。而してこの新しく獲得した自我の安定性は、絶えず震盪を被ることを吾人は知つて居る。又一方に抑壓され排除されたものは、夢や神經症に於て、入場を許されようと戸口を叩く。尤もその戸口は、抵抗によりて保護されて居る。吾人の覺醒せる健康時に於ては、特殊の策略を用ひて、抵抗を欺き、抑壓されたものを許すやうにし、それを吾人の自我の中に一時引入れることによりて吾人の快感を增加するやうにする。頓智と滑稽、又一般的喜劇の一部はこの種の快感によりて說明することが出來る。神經症の心理學を知れるものは、餘り主要でない同樣な例を思ひ浮べるであらう。しかし私は計畫せる適用に急ぐことにする。

* Trauer und Melancholie. Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, IV, 1916/18. Sammlung kleiner Schriften zur Neurosenlehre, 4. Folge. [Ges. Schriften, Bd. V.]

自我理想が自我から分離することは永い間忍ぶことが出來ず、一時破棄されなければならぬこ

とは全く考へ得ることである。自我に課せられた凡ての拋棄と制限とに於て、禁止の周期的破壞が規則的に行はれる。これは實に祭禮の規定に示されて居る。それは最初法律によりて規定された放逸に外ならないで、祭の愉快な特質は放逸によりて生ずる解放に歸すべきである。* ローマ人のサツルヌス祭、吾人の近代の謝肉祭はその主要點に於て原始人の祭と一致する。この祭は通常各種の放逸と、他の時には最も神聖な戒律であつたものを犯すことに終るのである。しかし自我理想は自我が服從しなければならぬ凡ての制限の總和である。故に自我理想の廢止は、自我に對して今一度滿足を與へる所の大なる祭であるに相違ない。**

* Totem und Tabu.

** トロツターは抑壓を群集衝動にまで辿つた。私は Einführung der Narzissmus の中に、理想が構成されたことは自我の側から言へば抑壓の條件であると主張して居るが、それはトロツターの主張と矛盾するよりも寧ろ表現の他の形式に氏の主張を飜譯したといふべきである。

自我の中に存在する或るものが自我理想と一致する時に、常に勝利の感を生ずる。罪惡の感（並に劣等の感）は自我と自我理想との間の緊張の表現として理解することが出來る。

氣分の一般的感情が、非常な沈滯から、ある種の中間狀態を通りて健康の高上した感へと周期的に動搖する人間があることはよく知られて居る。この動搖は辛うじて認知されるものから極端な場合に至るまで極めて異つた大さの振幅を有する。而してその極端な場合は躁狂と鬱狂の形を取りて、その人間の生活の上に非常な苦痛と且つ妨害を導き入れる。この周期的憂鬱の代表的の場合に、外部の興奮する原因は、何等決定的役目を演ずるやうに見えない。內部の動機に就てはこの患者と他の患者との間に量に於ても質に於ても何等の相違が發見されない。心的外傷を容易に辿り得る周期的憂鬱の他の全く類似せる場合に就ては後に述べることにする。

かやうな氣分の自發的動搖の根據は知られて居ない。鬱狂が躁狂によりて置換へられる機制に就て吾人は洞察を缺いて居る。從つてこれ等の患者は次の如き吾人の推測が眞に適用され得る如き人間であると自由に推定することが出來る。卽ち彼等の自我理想は、以前に特に嚴格に自我を支配して居たが、後になりて一時自我の中に溶解されるかも知れないと推測することが出來る。

不明瞭な點を避けることを吾人は維持しよう。吾人の自我分析の基礎から考へると、躁狂の場合には自我と自我理想とが融合することを疑ふことは出來ない。その融合のためにその者は勝利

と自己滿足の氣分に浸り、自己批判の妨害を受けず、禁止、他人を考慮すること、自己非難等の撤廢を樂しむことが出來る。鬱狂の不幸は彼の自我に於ける二つの力の間の烈しき軋轢の表現であることは、明白ではないが、極めて眞實らしく思はれる。その軋轢に於ては感受性の高くなつた理想は、殘酷にも、自我に對する非難を劣等の迷想と自己憂鬱とによりて表すものである。吾人がよく假定した、新組織に對する周期的反抗に於て、自我と自我理想との間の變化的關係の原因を吾人は求めて居るか、或はそれに對し責任ある他の條件を吾人は作らんとして居るかは問題である。

躁狂への變化は鬱狂的憂鬱の證候の必然的樣式でない。一回又は周期的に反復する單純の鬱憂症がありて、如上の發達を示さない。他方に興奮せしむる原因が明かに病源的役目を演ずる鬱憂症がある。それは愛する對象が死んだとか又はある事情の爲にその對象を失ひ、その對象からリビドーを撤回するを餘儀なくされるに至つた後に生ずるものである。この種の心的起原の鬱憂症は躁狂に終ることが出來、且つこの循環はある場合には自發的に見ゆるやうに容易に數回反復されることが出來る。かやうにこの病氣の狀態は稍不明瞭で、僅かに二三の鬱憂症のみが精神分析

的に考察された位である。吾人が今日まで理解して居る限りでは、愛情の無價値を示した爲に、對象が捨てられた場合である。その對象はその後同一視によりて自我の內部に再び建設され、且つ自我理想によりて嚴しく咎められる。對象に向けられた非難と攻擊とが鬱憂症的自己非難の形を取つて表れてくる。**

* Abraham : Ansätze zur psychoanalytischen Erforschung und Behandlung des manisch-depressiven Irreseins. usw, 1912, in „Klinische Beiträge zur Psychoanalyse“ 1921.

** 一層精密に言へば、對象に對する非難と攻擊とはその人自身の自我に向けられた非難の背後に隱れて居る。而して固定、頑固、命令的なることを自己非難に附與し、爲にそれ等が鬱憂病者の自己非難の特質になつて居る。

この種の鬱憂症は結局躁狂へ變化するかも知れない。而してこの出來事の可能は、症狀の他の特質とは獨立せる樣式を示して居る。

それに拘らず、自我理想に對する自我の周期的叛逆の成分を二種の鬱憂症、即ち心的起原のものと自發的のものとの考察に適用することは私に取りて困難でない。自發的鬱憂症に於ては、自

我理想は特殊の嚴正を表すやうに傾き、爲に自動的に理想の一時的停止を生ずと假定することが出來る。心的起原の鬱憂症に於ては、自我はそれの理想からの虐待によりて、叛逆するやうに鼓舞される。而してその虐待は、拒否された對象との同一視を生じた時に、經驗されるものである。

一二　追　加

吾人の考察は今や假りの終末に達したが、その考察の道程に於て、吾人は多くの側路を通つて來た。吾人はその側路を最初避けたが、しかしその中には、吾人に洞察を與へるものが多くあつた。吾人はかやうに側路に入つた爲に取殘して置いた二三の點を茲に取上げようと思ふ。

（A）自我と對象との同一視と、自我理想を對象によりて置換へることとの間の區別は、吾人が研究を初めた二つの大なる人爲的集團、即ち軍隊とキリスト教會とによりて興味ある說明を發見する。

兵士は彼の首領、卽ち軍隊の指揮者を理想とするが、他方に彼は彼自身を彼の同僚と同一視しこの自我の社會から、相互補助を與ふること、竝に仲間の所有を分配することの義務を引出す。しかし若し兵士が彼自身を大將と同一視することを試みるならば滑稽になる。ワルレンシユタインの兵營に於ける兵士はこの理由で曹長を笑つた。

彼が咳拂ひをし、唾液を吐く通りに、

汝は巧みに彼の眞似をした！

それがカソリツク教會では異つて居る。一々の基督教徒は、彼の理想としてキリストを愛し、同一視の結合によりて凡ての他の基督教徒と結合して居ると感ずる。しかし教會は彼にそれ以上を要求する。彼は又彼自身をキリストと同一視し、凡ての他の基督教徒を、キリストが愛する如くに愛しなければならぬ。故に教會は、集團構成によりて生ずるリビドーの位置が二つの點に於て補充されなければならぬことを要求する。卽ち同一視が對象選擇を生じた所に附加され、對象は同一視の存する所に附加されなければならぬ。この附加は明かに集團の構成以上に行く。人は善良な基督教徒たり得るが、しかし自分をキリストの位置に置き、キリストのやうに凡ての人類

を愛を以て抱擁すとの觀念から離れて居ることが出來る。人は弱い生物であるので、救世主の精神の偉大と愛の力とを示し得ると考ふる要はない。しかしこの集團に於けるリビドー分配の一層大なる發達は、恐らく基督教が一層高等な倫理的水準に達して居ると主張し得る成分になつて居る。

（B） 吾人は人間の精神發達に於ける一定の場所を明記することが出來、且つその場所に於ては集團心理學から個人心理學への進步が、集團の一々の部員によりて完成されたことを述べた。*

* この處以下に述ぶる所は、オットー・ランクとの意見の交換の結果書かれたものである。（,,Die Don Juan-Gestalt“. Imago, VIII. 1922 を見よ。1924 年に一册の本となつた。）

この目的のために、吾人は暫く原始群衆の父に就ての科學的神話に歸らなければならぬ。その父は、後に世界の創造主に高められた。蓋し彼は最初の集團を構成した凡ての息子を生產したから正當に創造主になつたのである。彼はそれ等の一々の者の理想であり、同時に恐れられ、崇拜された。その事實は後にタブーの觀念に導いた。これ等の多數の個人は結局共に結合し、彼を殺し、寸斷した。勝利者の集團の誰もが彼の位置を取ることが出來ない。或は彼等の一人がそれを

行ふと、戰爭が新に初まり、彼等の父の遺産を凡て棄てなければならぬと理解するに至るまで戰爭はつづく。その時彼等は凡て同等の權利を以て兄弟のトーテム社會を構成し、殺戮者の記憶を保存し補償するトーテム禁止によりて結合する。しかし成就したことに對する不滿足は尙殘り、それが新しい發達の源泉になる。この兄弟の集團に結合した人々は、新しい水準に於て舊き狀態を復活せしめんとする方に漸次に向つて行つた。男子はも一度家族の主長となり、父なき時期に建設された婦人政治の特權を破壞した。これに對する補償として彼はその時母の神性を認めたかも知れない。その神に奉仕する僧侶は母を保護するために去勢された。それは原始群衆の父によりて與へられた例に倣つたのである。しかし新しい家族は古い家族の陰影に過ぎなかつた。そこには多數の父があり、一々の者は他人の權利によりて制限されて居た。

その際ある個人は思慕の急迫のために集團から離れて、父の役目を取らんと動かされたかも知れない。これを行つた者は最初の叙事詩人であつた。而してその進步が彼の想像の中に完成された。この詩人は彼の眞情を詐つて思慕の意味に代へて言ひ表した。卽ち、彼は英雄神話を創作した。その英雄は自分で父を殺した男子であつた。而してその父はトーテム時代の怪物として尙神

話の中に表れて居る。父が男兒の最初の理想であつた如くに、詩人は父の代理たる英雄を創作して最初の自我理想とした。英雄になつた者は母の最愛者である最年少の息子であつた。それを母は父親の嫉妬から保護したもので、その者が原始群衆の時代には父の繼承者であつた。戰爭の賞品であり、殺戮者の誘惑であつた婦人は、歴史以前の虚僞の詩人的空想に於ては、恐らく犯罪への誘惑者、且つ煽動者に變つたのである。

英雄は群衆全體が企てんとした仕事を單獨で成し就げんと要求する。しかしランク（Rank）が觀察した通りに、お伽噺の中には承認されなかつた事實の痕跡が明白に保存されてある。何となれば吾人はその中に屢々次のやうな事を發見する。卽ちある困難な仕事を實行しなければならぬ英雄は、蜂や蟻の如き小動物の群の助けによりてのみその仕事を成し遂げることが出來るのを發見する。而してその英雄は通常最年少の息子で、且つ父の代表者の面前には屢々馬鹿で謂はば無害のものとして表示される。これ等の動物は原始群衆に於ては兄弟で、それは恰も昆蟲が夢の象徵では兄弟や姉妹（輕蔑的に嬰兒として考へられる）を意味すと同樣である。尙神話やお伽噺中の仕事は、いづれも英雄的事業の代用物と容易に認めることが出來る。

神話は一の階段で、その階段を通りて個人は集團心理から出現して來たのである。最初の神話は憶かに心理的のもので、英雄神話である。說明的自然神話は、可なり後になつて表れたに相違ない。詩人はこの階段を取り、且つこの仕方に於て想像的に集團から自己を解放したが、ランクの觀察によると、詩人は現實中に集團に復歸する道を發見することが出來るといふことである。何となれば彼は集團の方に出かけて行つて彼の創作した英雄の事業を集團に物語るからである。この英雄は根柢に於て彼自身に外ならない。かくして彼は自身を現實の水準に下げ、彼の話を聽くものを想像の水準に高める。しかしその聽者はその詩人を理解し、原始的父を慕ふことの同一關係を有することによりて、聽者は彼等自身をその英雄と同一視することが出來る。*

* Hanns Sachs : Gemeinsame Tagträume 參照。これは千九百二十年ハーグで開かれた第六回精神分析學會に於て讀んだ論文を氏自身が收約したるもの。Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, VI, (1920) その後本の形で公にされた。(Imago-Bücher, Bd. 3).

英雄神話の虛言は英雄の神格化に於て頂上に達する。恐らく神格化せる英雄は父神(Vatergott)よりも早いかも知れない。而して、神としてこの原始的父への復歸の先驅者であつたかも知れな

い。神の系列を年代的にいふと母神(Muttergöttin)——英雄——父神である。しかし今日吾人が認むる所の神の様式は、決して忘れることの出來ない原始的父の高上したものに過ぎない。*

* この簡單な叙述に於て、私は古譚、神話、お伽噺、風俗史等にある材料を持つて來て、この解釋の支持にすることを斷念する。

(C) 私はこの論文に於て、直接の性的衝動とその目的を禁止された性的衝動に就て多くを述べた。この區別が餘り多くの反對を被らないことを希望する。しかしこの問題に就ての詳細な議論は、假令既に大部分述べたことを單に反復することですらも歡迎されないことはなからうと思ふ。

子供に於けるリビドーの發達は、彼等の目的に於て禁止された性的衝動の第一且つ最上の例であることを吾人は知つた。子供が兩親や面倒を見る者に對して有する凡ての感情は、子供の性的傾向を發露せしむる欲求に容易に移行する。子供は彼の愛する人間から、彼の知る溫情の凡ての表號を要求する。彼は愛する對象を接吻し、觸れ、眺めることを欲し、それ等の性器を見んとの好奇心があり、それ等が內密の排泄機能を行ふ時に一所に居らんとの欲求がある。結婚を何と解

釋して居るかは不明であるが、母や乳母と結婚することを約束し、父親に子供を生むやうに要求する。子供時代の直接の觀察、竝にその時代の記憶の分析的研究は、溫情及び嫉妬の感情と性的意向との完全なる融合を明かにし、且つ子供が不完全に集注した性的傾向の對象として彼の愛する人間を取る根本的方法が如何なるものかを示して居る。*

* Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. 參照。

吾人の知る所によると、子供の愛情の最初の形態は（それの代表的のものはエデイプス錯綜と同一であるが）潛在期の最初から、抑壓作用を被るものである。抑壓された後に殘るものは、純粹に溫情的結合として表れ、その結合は同一人間に關係し、最早、性的のものとして敍述されないものである。心的生活の奧祕を明かにする精神分析學は、子供時代の極く初期の性的結合が假令抑壓され、無意識になつても尙固執することを示すに困難ではない。如何なる溫情を見ても、それは對象となれる人間か、又はその人間の原型（Imago）との感覺的對象結合の後繼者たることを主張する勇氣を精神分析學は吾人に與へる。ある場合に於て、以前の完全なる性的流が抑壓の下に尙存在するか、或は已に盡きてしまつて居るかは、特殊の考察をしなければ明かにすること

とは出來ない。尙一層精密に言へば、性的流は一の形式及び可能として尙存在し、常に退行により充積され、且つ活動せしめられ得ることは確實である。唯一の問題は如何なる程度の充積と實行力とをそれが現在有するかといふことで、これは常に答へることの出來ないものである。これと聯關して二つの誤謬の源泉を除くために、雙方に對し一樣な注意を必要とする。即ち抑壓された無意識の意義を低く評價する Scylla と病的標準によりて凡ての正常を判斷する Charybdis とである。*

* シラとカリブデイスとはホーマーのオデッシーにある海の怪物、後にはこの怪物はイタリア國のメッシナ海峽に在る岩と渦とであると解せられた。（譯者）

抑壓されたものの奧祕に徹底しようともしないし、又徹底出來ない心理學は、溫情的結合を以て、性の目的を有しない傾向の表現であると見做し、假令それがかやうな目的を有する傾向から導き出された場合でも、性に無關係であるとする。*

* 組織が少しく複雜である敵意の情もこの規則に反しない。

これ等のものが性の目的から轉向したことをいふことは正當である。尤も超心理學の要求を確

めるやうな目的轉向の叙述には多少の困難が伴つて居る。尙その目的を禁止された衝動は、常にそれの最初の性的目的を幾分保存する。温情ある歸依者、朋友、又は崇拜者ですら身體的接近を欲し、使徒ポーロ的意味に於て愛される人の容貌を求める。若し吾人が欲するならば、目的轉向の中に性衝動の昇華作用（Sublimierung）の發端を見とめることが出來る。或は他方に尙遙か遠い所に昇華作用の極限を定めることが出來る。目的を禁止された此等の性衝動は禁止されないものよりも遙か大なる機能的長所を有する。禁止された性的衝動は實際に完全な滿足を得ることが出來ない爲に、永久的結合を創造することに特に傾く。これに反して直接に性的である衝動は、滿足する度每にエネルギーを失ひ、性的リビドーの新な蓄積によりて再び新にされることを待たなければならぬ。而してその場合に時々對象は變化することが出來る。禁止された衝動は禁止されない衝動とある程度に混合することが出來る。而して前者が後者から生じた如くに、前者は退行して後者に變形することが出來る。先生と生徒、演奏者と聽者、その間に、特にそれが婦人の場合には、尊敬と崇拜とに基く友情的性質の情緒關係から、色情的欲求が如何に容易に發達するかはよく知られて居る。（モリエールの Embrassez-moi pour l'amour du Grec. 參照）この種の

無目的の發端を有する情緒的結合の發達は、實に性的對象選擇に對し、屢々往來した道を提供する。フイスターは「ツイツエンドルフ伯の敬神」の*著書中に、烈しき宗教的結合が熱烈な性的興奮に如何に容易に變化し得るかの極めて明白であり、且つ關聯せる例を與へた。他方に持久的の純粹の溫情的結合に變化することは、短命な直接的の性的傾向に取りて極めて普通である。而して激情的愛情から生じた結婚が鞏固な結合になることは大部分この過程に基いて居る。

* Pfister, Frömmigkeit der Grafen von Zinzendorf. 1910.

目的を禁止された性的傾向は、內外の障碍が性の目的を達せしめないやうにする時の直接の性的衝動より生ずると吾人は聞いて驚かされないであらう。潜在期の抑壓はこの種の內的障碍であり、或は寧ろ內的になつた障碍である。原始群衆の父は彼の性的頑迷の爲に、凡ての彼の息子を節度あるやうに强ひ、目的の禁止された結合に逐ひやつたが、彼自身は性的快樂の自由を保存し爲にこの種の結合なくして止まつたと吾人は假定した。集團の基礎となれる凡ての結合は目的を禁止された衝動の特質を有する。しかし茲に於て、直接の性的衝動と集團構成との間の關係を取扱ふ新しい問題の解明に吾人は近づいた。

（D）最後に述べた二つの事項は、直接の性的衝動が集團の構成に不利益であることの發見に對し準備を與へて居る。家族の發達史の中に性愛の集團關係（集團結婚）のあつたことは眞である。しかし性愛が自我に對して尚一層大切になり、且つそれが戀愛の特質を一層高く發達せしむるに從つて、性愛は益々強く男と女の二人に制限されるやうに要求された。一夫多妻的傾向は連續して變化する對象の中に滿足を發見するやうになつて居る。

性的滿足の目的のために結合する二人は、彼等が集團から離れることを求める限りに於て、群居衝動、集團感情に反することを證明しつつあるやうである。彼等が一層多く愛するやうになるに從つて、益々二人だけで滿足する。集團の影響の拒否は羞恥の感の形で示される。極度に烈しい嫉妬の情は、性的對象選擇を、集團結合によりて侵害されることを防ぐために生ずるものである。愛情關係の濕情的、即ち個人的成分が感覺的成分の背後に全く隱れる時に、他人の面前で二人が性交をなすことが出來、又遊興の時の如く集團で同時的性行爲を行ふことが出來る。しかしそれと共に性的關係の早い階段への退行が生じて居る。この階段に於ては愛することは未だ何等の役目をなさず、凡ての性的對象は同一價値であるやうに判斷された。この同一價値といふのは

幾分バーナード・ショウ(Bernard Shaw)の警句、卽ち愛することは一人の婦人と他の婦人との相違を非常に誇張することであるとの意味に取つたのである。

愛することは後になつて男子と婦人との間の性的關係にその出口を發見したこと、從つて性的愛情と集團結合との間の對立は後の發達であることの夥多の徵候がある。この假定は初期の家族に就ての吾人の神話と矛盾して居るやうに見ゆるかも知れない。何となれば吾人の推定によると兄弟の軍勢が父親殺しに逐ひやられたことは結局母や姉妹に對する彼等の愛情であつたからである。而してこの愛情は衰へない原始的の結合、換言すれば溫情と感覺的のものとの密接な結合以外のものであると假定することは困難である。尙深く考察すると、この反對は却つて確證になつでしまふ。父親殺しの反動の一は結局トーテム時代の異族結婚の制度であつた。卽ちそれは子供時代から愛されて居た家族の婦人と性的關係を作ることの禁止であつた。この仕方に於て楔が男子の溫情と感覺的感情との間に打込まれ、それは今日尙彼の愛情生活に確乎と固定して居る。*この異族結婚の結果として、男子の感覺的必要は未知の且つ愛しない婦人で滿足されなければならなくなつたのである。

* Ueber die allgemeinste Erniedrigung des Liebeslebens. 1912. を見よ。

大なる人爲的集團たる教會と軍隊とには婦人を性的對象とする餘地がない。男子と婦人との間の愛情關係はこれ等の組織以外に留まる。男子並に婦人から構成される集團が形成される場合でも性の區別は何等の役目をなさない。この場合の集團を結合するリビドーは同性愛的のものか又は異性愛的のものかを尋ねることは殆ど何等の意味がない。何となれば、それは性に從つて分化されてないからで、特にリビドーの生殖組織の目的を全く無視して居るからである。

他の點に於ては集團中に吸收された個人に於てすら、直接の性的傾向によりて、幾分の個人的活動をする。若しその傾向が餘りに强くなると、各の集團構成を分裂せしむる。これはカソリツク教會に於てその信仰者に結婚しないで居るやうにすすめ、牧師には獨身を命ずる事の最上の動機となつて居る。愛に陷つた爲に、教會を離れるやうになることは牧師に於てすら屡々見られる所である。同樣に婦人に對する愛は種族、國民的區劃、社會的階段組織の集團結合を破壞し、且つそれは文化的に重大な結果を生ずる。同性愛はそれが目的を禁止された性的傾向の形を取る時ですら、集團結合と遙かによく適合することは確實である。而してこの著しき事實を說明するに

は尙多くのことを言はなければならぬ。

精神々經症の精神分析的研究の教ゆる所によると、その疾患の症狀は抑壓されては居るが、尙活動して居る直接の性的傾向に基いて居る。しかもこの症狀を完全に言ひ表すには、目的禁止の傾向が、それの禁止に於て全く成功せず、或は抑壓された性的目的に復歸する餘地のあることを附言しなければならぬ。このことは神經症患者が非社會的になり、普通の集團構成から離れることと一致する。神經症患者は愛する場合と同樣な分裂的作用を集團の上に行ふと言はれる。他方に有力なる動力が集團構成に與へられる所では、神經症は減少し、或は少くとも一時的に消失するやうに見ゆる。この神經症と集團構成との間の對立を治療に應用せんと企てられたことは正當である。今日の文化の世界に於て宗教的錯覺が消失したことを後悔しない人々でも、錯覺が尙結合を有する限り、神經症の危險に對する最も有力なる保障として、錯覺によりて結合せる人々にその錯覺を與へるといふことを許すであらう。神祕宗教的又は哲學宗教的宗派や組合に於ける凡ての結合の中に、凡ての種類の神經症の片寄つた治療法が表現されて居ることを容易に認めることが出來る。この治療法の凡ては直接の性的傾向と、目的を禁止された性的傾向との間の對立に

關係して居る。

若し神經症患者が獨りで殘されると、彼の排斥された大なる集團構成を、彼自身の症候構成に置換へることを餘儀なくされる。彼は自身の爲に彼自身の想像の世界、彼自身の宗教、彼自身の幻想の系統を創造し、片寄つた仕方に博愛主義の制度を復活する。而してその博愛主義は直接の性的傾向によりて演ぜられる優勢なる部分であることを明白に證明して居る。*

* Totem und Tabu. の第二節 Das Tabu und die Ambivalenz の終りの方を見よ。

（E）　結論に於て、リビドー說の見地から、吾人が取扱つた所の、愛すること、催眠、集團構成、神經症の狀態の比較評價を附加しよう。

愛することは、直接の性的傾向と目的を禁止された性的傾向との同時的存在に基く。而してこの場合には對象は自己愛的自我リビドーの一部を自身の方に取込んで居る。故に愛することは自我と對象とに對し唯一の空間を有する狀態である。

催眠は二つの人間に限られて居る點で愛することに似て居る。しかしそれは目的を禁止され、對象を自我理想の代りにする所の性的傾向に全く基いて居る。

集團は催眠過程を複雜にしたものである。集團はそれを結合せしむる衝動の性質に於て、又自我理想を對象に置換へることに於て催眠と一致する。しかしその上に他の個人との同一視が附加されて居る。而してその同一視は恐らく最初對象に對し同一關係を有したことによりて可能となつたものである。

催眠と集團構成との二つの狀態は、人間リビドーの系統發生からの遺傳的貯蓄である。尤もそのリビドーは催眠に於ては豫備傾向の形式の中に示され、集團に於てはこの外に又直接の遺物として示される。直接の性的傾向が目的禁止の性的傾向によりて置換へられることは、二つの狀態に於て、自我と自我理想との分離を促進する。而してその分離の端緖は既に愛することの狀態の中に存在して居る。

神經症はこの系列の外に位する。それは人間リビドーの發達の特異性に基いて居る。即ち直接の性的機能が潜在期によりて中斷され、その機能の開始を再びしたことに基いて居る。* 催眠と集團構成とは、退行の性質を有する點に相似て居るが、愛することには、この退行が存在しない。神經症は直接の性的衝動から目的禁止の性的衝動への進步が、完全に成就されて居ない場合に表

れる。神經症はかかる發達を經過した後に自我に取入れられた衝動と同一衝動の他の部分との間の軋轢に過ぎない。その他の部分といふのは、全く抑壓された他の衝動的欲求の如く、直接の滿足を得んとして、抑壓されて居る無意識から努力する衝動である。神經症は內容的に極めて豐富である。蓋しそれは自我と對象との間にありとあらゆる關係、卽ち對象が保存され、或は棄てられ又は自我の中に建設されるといふやうな凡ての關係を包含し、且つ自我と自我理想との間の軋轢關係をも包括して居るからである。

* Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. 第五版 1922. 96 頁を見よ。

自我とエス

序言

これより述べんとすることは、千九百二十年の私の論文「快の原理を越えて」の中に初めて表れた思想の進展である。それに對する私の個人的態度はその際述べた通りに、一種の情深い好奇心といひ得るかも知れない。私は前記の論文に於て、それ等の觀念を取上げ、精神分析に於て觀察した種々の事實と結合せしめ、その結合から新しい結論を引出さんと努めた。しかし、本論文に於ては生物學から新に借りてくることをせず、從つて「快の原理を越えて」よりも遙かに精神分析に接近して居る。その中に含まれた思想は、思索的よりも寧ろ綜合的であり、それの目的も高いものであるやうに見ゆる。しかしその思想が最も大膽な所で止まつて居ることを私は知つて居るし、又その制限に全く同意する。

同時に思想の進みは、これまで精神分析の取扱つた對象でない事物に觸れる。且つそれは分析から手を退いた非分析者又は以前の分析者によりて提議された多數の原理に關係することを避け

ることが出來ない。尙私は他の場合には他の研究者に負ふ所あるを感謝するを常とするが、しかしこの場合には何等の恩惠を感じない。若しこれまで精神分析が適當な考察を與へなかつたある事物が存すとすれば、それはそれ等の結果を看過したり、或はそれ等の重大なことを否定することを望んだ爲でなく、それ以上行くことの出來ない特殊の道を追跡したためである。而して最後にこれ等の事物が追跡された時には、その事物は他の人々に見えるよりも異つた形に精神分析には表れてくる。

一　意識と無意識

この最初の章に於て、何も新しくいふべきものはなく、前に屢々述べたこととの反復を避けることは不可能である。

心的生活を意識と無意識とに分けることは精神分析學の根本假定である。而してこの區別は普通の精神過程と同じく大切な病的精神過程を理解せしめ、精神分析學をして科學たらしむることが出來るやうにする。換言すれば、精神分析學では、意識を以て心的生活の本質とすることが出來ないが、しかしその他の特質に附加したり、又はそれから離れることもある心的生活の一の特質であると認めなければならぬ。

心理學に興味を有する凡ての者が、この本を讀むだらうとの假定が許されるならば、その讀者の中には、この點に止まりてそれ以上進まない者があることを豫め考へて置かなければならぬ。蓋し茲には精神分析學の最初の常套語があるからである。哲學的教育を受けた大多數の者に取り

ては、意識的でない精神的のものがあるとの考へ方は矛盾して居り、論理上反駁されるやうに見ゆる。それは結論を必要とする催眠と夢の心的現象（それは全く病的表現を除外して）を彼等が研究しなかつた結果であると私は信ずる。かやうに彼等の意識の心理學は夢と催眠の問題を解決することが出來ない。

「意識的」といふ術語は、最も直接に且つ確實なる知覺に基く所の純粹に叙述的のものである。經驗によると、心的要素（例へば觀念の如き）は通常永久的に意識されない。却つて意識の狀態は極めて經過的で、今意識して居る觀念も次の瞬間には最早存在しない。只最も容易に再現し得る一定の條件の下に於てのみ意識的となることが出來る。その中間に如何なる表象が存したかを吾人は知らない。吾人はそれを潜在的（latent）の觀念と名づけることが出來、その語を以て、吾人は何れの時にも意識的となり得る觀念であることを意味する。或はその觀念は無意識的であつたと言つても又等しく正當の叙述になる。かやうにこの意味に於ける「無意識的」の術語は、潜在的で何時でも意識的となり得ることと一致する。これに對し哲學者は反對するであらう。曰く、「否、無意識的の術語は玆に適用されない。觀念が潜在狀態にある限り、それは全く心的要素

でなかつた」と。この點に於て彼等に反對することは、言葉の論爭以上に何も利益する所はないであらう。

しかし吾人は精神力學の行はるる一定の經驗を探究することによりて、他の道を沿うて「無意識的」の術語又は概念に到達した。詳言すれば、極めて有力なる心的過程又は觀念が存在すること（玆に於て初めて量的又は經濟的要素が考察の中に入つてくる）、その觀念はその他の觀念の如く凡ての結果（順次に觀念として意識され得る結果をも含む）を、意識することなくして心の中に生ずることが出來ることを、吾人は假定しなければならぬ。以前に屢々說明したことを玆に再び反復することは不必要である。只これが精神分析的原理の入込んだ點であると言へば十分であ る。卽ちその原理によると、かかる觀念は一定の力によりて反對されるために意識的となることが出來ないが、その力がなければ意識的となり得ること、竝にその觀念は他の認知される心的要素と少しも異つて居ないことが分かる。精神分析の技術に於て、反對する力を除去することが出來、その除去によりてその觀念が意識的になるといふ手段が發見されたといふ事實は如上の原理を打消し難いものにする。かかる觀念が意識的となる前に存在した狀態を抑壓（Verdrängung）

と名づけ、壓服を持來たし且つそれを支持する力は分析を行ふ際に、抵抗（Widerstand）として認知される。

故に無意識の概念は抑壓の原理から得られ、抑壓されたものは無意識の原型であると言へる。所がこの無意識には二種類ある。一は潜在的で意識的となり得るもの、他は抑壓されて通常の仕方では意識的となり得ないものである。この精神力學に於ける洞察は術語や叙述に影響を及ぼさない譯には行かない。潜在的であり且つ叙述的意味では無意識であるが、力學的意味では無意識でない場合を「前意識的」（vorbewusst）と名づけ、力學的に無意識に抑壓された場合を「無意識的」と名づける。かくして吾人は今三つの術語、即ち意識的、前意識的、無意識的を有することになり、それ等は純粹に叙述的意味のものでないことになる。前意識は無意識よりも意識に遙かに接近せるもので、無意識を吾人は心的であるといふ以上、潜在せる前意識は、勿論心的である。しかし何故に吾人は哲學者と一致することをせず、强ひて前意識並に無意識を意識的のものから區別するか。哲學者は前意識と無意識とを心的區劃（Psychoid）の二つの種類又は階段として叙述し、調和を保つことを主張する。しかしその主張には無限の困難が結果してくる。かやう

に定義した心的區劃の二種は心的と言はれるものと殆ど凡ての他の點に一致することの重要なる事實が、一の偏見のために背景の中に押込められたのである。而してその偏見はこの心的區劃、又はその區劃の最も重大なことを知らなかつた時代から始まつたものである。

叙述的意味に於ては二種の無意識があり、力學的意味に於ては只一つあるといふことを忘れない限り、吾人はこの三つの術語を以て愉快に仕事を初めることが出來る。この區別は叙述の多くの場合に無視することが出來るが、しかし他の場合には勿論不可缺のものである。同時に吾人は無意識の術語の二つの意味に多少慣れて、可なりよくそれ等を取扱つて居るが、しかし私の知る所では倘兩者の曖昧をさけることは不可能である。意識と無意識との區別は結局肯定され又は否定されなければならぬ知覺の問題であり、知覺そのものの行爲は何故にその事物が知覺されるか又は知覺されないかの理由を少しも吾人に知らせない。而して實際の現象が、その根柢に横たはる力學的成分を、明瞭に表さないことを非難する權利を有する者は誰もない。*

* これは拙著 Bemerkungen über den Begriff des Unbewussten,（Ges. Schriften, Bd. V.）を參照されたい。無意識の批判に於ける新轉回はこの場合考察する價値がある。精神分析の事實を承認するが、

しかし無意識を承認しない多数の研究者は、現象としての意識の中に强度や明瞭度の種々の程度を區別することが出來るとの、爭ひ難き事實の助けにより次の如き主張をする。一方に生々した、銳敏且つ確定的な意識がある如くに、他方に吾人は幽かな且つ殆ど氣付かれない意識過程を經驗する。而してそのものに精神分析學は不適當な名稱の無意識を適用せんと望んで居る。しかし一方と同じく他方も亦意識的であり、又意識の中にあるもので、若し十分な注意をそれに向けると、十分强い意識的のものになることが出來ると論ずる。

便宜又は情緖的成分を基礎とするこの種の問題の決定が議論によりて影響され得るといふ限りに於て吾人は次の註釋を附加することが出來る。意識の明瞭の程度に就ての議論は決して確定的のものでなく又次の類似の主張と同程度の價値を有するに過ぎない。卽ち「照明には、最も輝いて目が眩む位の光から極めて幽かな微光に至るまで多くの階段がある。從つて吾人は全く暗黑といふ如きものはないと結論してよい」と。或は「活力には種々の程度がある。從つて死といふ如きものはない」と。かかる主張はある場合に於ては意味があるが、しかし實際的目的には無價値である。若しこの主張よりして「故に火を點ずるに及ばない」とか「故に生物は不死である」とかの結論を引出して見ると、無價値なことが分かる。尙意識的のものの槪念の下に、意識されないものを包括することは、吾人が心に就て有する唯一

の直接且つ確實なる知識を破壞することになる。而して結局吾人が何も知らない意識は、無意識精神よりも遙かに不都合であるやうに私には思へる。最後に氣づかれないものと、無意識のものとを等しとする企ては、その中にある力學的條件を考察しないことから來て居るもので、その條件こそ實に精神分析的見解を構成する決定的成分である。何となればそれは二つの事實を無視する。第一にこの種の氣づかれない或ものに十分な注意を集注することは非常に困難であり、極めて大なる努力を要すること、第二にそれが成遂げられた時に、以前氣づかれなかつた思想が意識によりて再認されないが、しかし、屢々それと全く異なり且反對して見え、直ちに意識によりて否認されることである。故にかやうな無意識的のものを捨てて、殆ど又は全く氣付かれない意識に賴らんとすることは、結局心的と意識的との同一を全く決定的のものと認める偏見の一表現に過ぎない。

しかし精神分析の仕事を尙進めて行く中に、これ等の區別だけでは不適當であり、實際の目的に對して不十分であることが證明された。これは多くの仕方に明白にされたが、しかし決定的の例は次の如くである。各個人には自我と稱する心的過程の脈絡ある一の組織がある。この自我は意識を包含し、外部世界へ興奮が解發せらるる進路、卽ち動力（Motilität）の進路を統御する。

尙それはそれ自身の凡ての部分過程を調節し、夢に於ける監視の役目をつづけるが、夜に於ては眠につくものである。この自我から抑壓は生じ、その作用によりて心の中の或傾向は意識から切斷されるのみならず、尙その傾向の他の表現竝に活動の形式から切斷される。分析をするとこの抑壓によりて除外された傾向は、自我と反對して居ることが分かる。故に分析法の任務は、自我が抑壓されたものに對して表した抵抗を除去することになる。分析をつづけて居る際に、患者に一定の仕事を命ずると困難を感ずるのを吾人は見受ける。彼の聯想は抑壓されたものに近づかなければならぬ時に中止する。その時抵抗を受けて居ると患者に告げるが、彼はその事實に全く氣づかない。抵抗が今働いて居るといふことを、彼の不快の感から推測しても、尙その抵抗は何であるか、如何にそれを叙述すべきかを知らない。しかしこの抵抗は自我から發し、且つそれに屬することは疑ふことの出來ないものであるから、吾人は豫知し難い狀態に居ることを發見する。即ち吾人は自我そのものの中に或物を發見したのである。それは無意識のもの、且つ抑壓されたものの如く行動するものである。換言すればそれは意識されることなくして有力なる作用をなし意識的となり得るにはその前に特殊の仕事を必要とするものである。分析の實際からいふと、若

し吾人が以前の表現の仕方を採用し、神經症は、意識と無意識との軋轢から生ずと說明するならば、無限の混亂と困難とに遭遇する。故に吾人はこれ等の對立を棄てて、心の組織的條件に就ての吾人の洞察から得た他の對立、卽ち組織的自我と、それから抑壓され分離された自我との對立を採用しなければならぬことになる。*

* Jenseits des Lustprinzips. 參照。

しかし吾人の新しい觀察の結果は、無意識に就ての吾人の概念に對して一層大切である。力學的考察が吾人に第一の訂正を惹起した心の組織に就ての吾人の知識は第二の訂正に導いた。吾人は無意識のものは抑壓されたものと一致しないことを認める。抑壓される凡てのものは無意識であることも眞であるが、しかし無意識の全部は抑壓されることはない。尙自我の一部(自我の大切な部分たることは神が知つて居る)は無意識であるかも知れない。否疑もなく無意識である。而してこの自我に屬する無意識は前意識の如く潜在的でない。蓋しそれが潜在的であるとすれば意識的になることとなくして、作用することが出來ないことになり、且つそれを意識的とする過程は大なる困難に遭遇しないであらう。かくして抑壓されない第三の無意識を假定する必要に迫ま

られる時に、無意識たることの特質が吾人に對して意義を失ひ初めることを許さなければならない。その無意識は遠大の且つ避くべからざる結論の基礎となることの出來ない程多義的の性質になる。しかし吾人はこの特質を無視することを警戒しなければならぬ。蓋し結局意識的たることか否かの特質は奥祕心理學の暗黑を貫通する單一の光線であるからである。

病的研究は吾人の興味を抑壓したものの方にのみ集注せしめた。吾人は自我に就て一層多くを知りたいと欲する。今吾人はそれが固有の意味に於ける無意識たり得ることを知つて居る。從來吾人の研究をすすむる際に有した唯一の支柱は、意識的たること又は無意識的たることの特徴であつた。而して最後にこの特質は如何に曖昧であるかを發見した。

今吾人の有する知識は常に意識に束縛されて居る。無意識に就ての知識ですら、それを意識的となすことによりてのみ得ることが出來た。しかし如何にしてそれは可能であるか。吾人がある物を意識的とするといふ時に、それは何を意味するか。如何にしてそれは生じ得るか。

この點に關しどこから出發しなければならぬかを吾人は既に知つて居る。意識は心的裝置の表面であると吾人は述べた。換言すれば吾人は外界に最も近く位して居る系統に對し一の機能としてそれを振當てた。この場合に局所的術語は機能の本質を敍述するに役立つのみならず、尙解剖

二　自我とエス

的事實に相當する。[*] 吾人の考察は又この知覺の表面器官を出發點として取らなければならぬ。

* Jenseits des Lustprinzips を見よ。

外部から受取つた知覺即ち感官知覺と內部からの知覺の凡ては、（吾人が感覺と感情と名づけるもの）最初から意識的である。しかし曖昧且つ不正確に、思想過程の名の下に總括し得る所の內部過程に就ては如何であるか。それ等は心的エネルギーの轉移を示して居る。このエネルギーは行爲の方に進む時に、裝置の內部の何處かに轉移を生ずる。その時意識の發達を許す處の表面の方に思想は進むか。或は意識が思想の方に來るか。これは心的生活の空間的又は局所的概念を眞面目に承認せんとする時に生ずる困難の一である。この二つの可能は、等しく想像し難いものである。その場合に何か第三の事項が存在しなければならぬ。

私は他の所で、[*] 無意識的並に前意識的觀念（思想）の間の眞の相違は次の如くであることを暗示した。即ち前者は認知されずに殘つて居る或種の材料の上に出來上つたものであるが、後者は言語表象との結合が附加されて居る。これは前意識と無意識との二つの系統の特徵を、意識に關係せしめないで發見する最初の企である。「如何にして事物が意識的になるか」の問題を一層便利

に言へば、「如何にして事物が前意識的になるか」の問題になる。それに對する回答は、「その事物に相應する言語表象と結合することによりて」となるであらう。

* Das Unbewusste. Internat. Zschr. f. PsA, III. 1915. [Ges. Schriften, Bd. V.]

これ等の言語表象は記憶殘留物である。それ等は嘗て知覺であり、又凡ての記憶殘留物と同じく再び意識的となることが出來る。その本質に就て述ぶる前に、新しい見解の如きものが吾人に表れてくる。卽ち嘗て意識的知覺であつたもののみが意識的になり得ること、並に內部から生ずる何れのもの(感情でなく)でも意識的たらんと求むるものは、外部的知覺にそれ自身を變形することを試みなければならぬことである。而してこれは記憶痕跡によりて行ふことが出來る。

記憶殘留物は、知覺——意識系統に直接に隣接せる系統の中に包含されて居るものと吾人は考へる。而して記憶殘留物に屬する充積は內部から容易に知覺——意識系統の方へ擴がり得るやうになつて居る。吾人はこの場合に直ちに幻覺のことを想起し、又最も明瞭なる記憶は常に幻覺と外部の知覺とから區別し得る事實を想起する。しかし記憶が再生する時には、記憶系統中の充積は保存されるが、知覺と區別し難い幻覺は、充積が記憶痕跡から知覺要素にまで擴がるのみなら

ず、尙全くそれに移り行く時に生ずることが出來る。

言語的殘留物は本來聽的知覺から生ずる。恰もそれは前意識系統が特殊の感官的源泉を有する如くである。言語表象の視的成分は二次的に、讀方によりて獲得され、先づ等閑にされるかも知れない。同樣に言語の運動心像も、聾啞者を除いては補助的役目を演ずるかも知れない。結局言語は本質上聽いた語の記憶痕跡である。

吾人は簡單に述べんとの興味の爲に、言語でなく、事物の視的記憶殘留物の重要なることを閑却してはならない。又視的殘留物に復歸することによりて、思想過程が意識的になることが出來るし、尙多くの人々に於てはそれが好んで用ひられるやうに見ゆることを否定してはならぬ。ヴアレンドンク (J. Varendonck) の觀察による夢及び前意識的空想の研究は、この視的思考の特殊の性質に就て一の觀念を吾人に與へて居る。意識的となるものは通常思想の具體的資料のみであること、思想を特に顯著とする所の資料の種々の要素間の關係は視的に表現されることが出來ないことを吾人は知つて居る。故に視覺像に於て思考することは意識的となることの極めて不完全な一形式である。ある仕方に於て、それは言語で思考することよりも一層無意識過程に接近す

る。而してそれは個體發生的にも亦系統發生的にも後者より一層古いことは疑ひもない。

吾人の議論に歸つて述べる。若しこれが無意識であるものが、前意識となる方法であれば、抑壓されるものは如何にして（前）意識的となり得るかの問題は次のやうに答へられるであらう。それは分析的仕事によりて、かやうな前意識的仲介者（Mittelglied）を供給することによりてなされる。故に意識はそれが存する場所に止まり、之に反して無意識は意識に上つて來ない。

外部知覺と自我との間の關係は全く明白であるが、內部知覺と自我との關係は特殊の硏究を要する。意識の全部を、知覺――意識の表面的系統に關係せしむることが正當であるか否かの疑ひが今一度生ずる。內部知覺は心的裝置の最深の層に於て、種々と確實に生ずる過程の感覺を生ずる。この感覺と感情に就ては全く知られない。それに就て吾人の有する最もよい例は、快不快の系列に屬するものである。それ等は外部的に生ずる知覺よりも遙かに根本的要素があつて、意識が不明瞭になる時ですら尙存在することが出來る。それ等の大なる經濟的意義と、それの超心理學的基礎に就て、私は他の所で意見を述べて置いた。これ等の感覺は外部知覺のやうに多細胞的である。これ等は同時に異つた場所からくることもあり、又異なる或は反對せる性質を有するこ

とも出來る。

快的性質の感覺は先天的に强迫的性質を有しないが、不快的性質のそれは非常に强迫的性質を帶びて居る。後者は變化と放出とを促すもので、不快はエネルギーの充積を高上せしめ、快はそれを低下せしむる。快及び不快として意識されるものは心的經過の中で質的並に量的に不限定の要素であると假定すれば、その不限定のものは實際に存在する場所に意識され得るか、或はそれは先づ知覺系統に傳達されなければならぬかの問題を生ずる。

臨床的經驗が最後のことを決定する。それによると、この不限定要素は抑壓された衝動の如き振舞をする。それは自我に强迫を氣付かしむることなくして推進力を行ふことが出來る。强迫に對する抵抗、放出反應の閉止があると、この不限定要素は直ちに不快として意識される。身體的必要から生ずる緊張と同じく身體的苦痛も無意識に止まることが出來る。この外部知覺と內部知覺との中間に位する事物は、その原因が外界にある時でも內的知覺のやうに作用する。故に感覺も感情も知覺系統に達することによりてのみ意識的になることは眞である。若し前進の途が妨げられると、それ等は感覺として表れない。尤もそれ等に相應する所の不限定要素は、興奮經過に

於ては同一である。全く正しくない無意識表象の類推からして、吾人は簡約せる全く不正な仕方で無意識感覺のことを話す。しかし兩者は相違するもので、無意識表象に於ては意識に上る前に結合連鎖が出來上らなければならぬが、感覺に於ては直接に傳達されて、その必要がない。換言すれば意識と前意識との間の相違は、感覺に取りては何等の意味を有しない。この場合に前意識は生ぜず、感覺は意識的か又は無意識的かである。感覺が言語表象と結合する時に於てすら、それが意識的となるには、前意識となることなく、直接に意識的となるものである。

言語表象の役目は今や全く明白になつた。それの仲介によりて內部の思想過程が知覺になる。これは凡ての知識は外部の知覺にその起原を有すとの原理の說明のやうである。時として思考の過程の超充積が起ることがある。その場合に思想は恰も外部から來たかの如く、現實になり、眞實のものと考へられる。

外部及び內部知覺と、知覺——意識の表面系統との間の關係を明瞭にした後、吾人は進んで自我の概念を建設することが出來る。自我はそれの核たる知覺系統から出立し、記憶殘留物に隣接せる前意識を第一に包括する。しかし自我は旣に學んだ如くに無意識である。

今吾人は一人の著者の暗示に從ふことによりて非常な利益を得るやうである。その著者は嚴格な純粹科學と關係する何物をも有しないと個人的動機よりして傲然と主張した。それはグロッデック (Georg Groddeck) のことであるが、氏は吾人が自我と稱するものは人生を通じて主として受動的に行動すること、竝に氏の言葉を借りると、吾人は未知の統御し難い力によりて「生活せしめ」られて居ると常に强調した。* 吾人は凡て同樣の印象を有し、(尤もその印象によりて凡ての他の事をも排除する程に壓倒されないかも知れない)、且つ科學の組織の中にグロッデックの見解の地位を見出すに失望しない。私は知覺系統から出立し、第一に前意識である所の實體を自我と名づけ、この實體が擴がり、無意識のやうに振舞ふ所の、心の他の部分をグロッデックの用語に從つて、エス (Es) と名づける。**

* G. Groddeck, Das Buch vom Es. 1923.

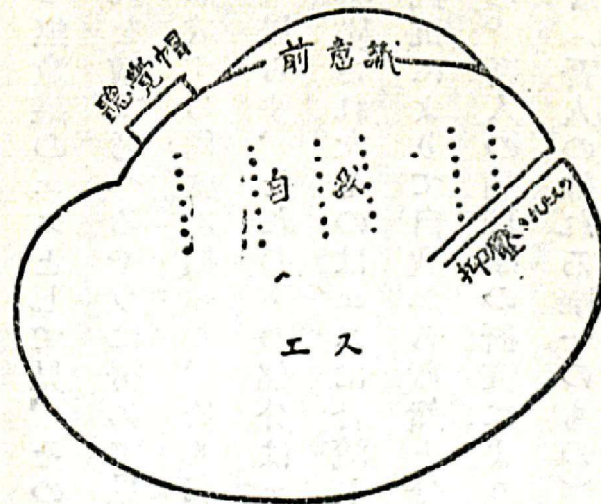
**グロッデックは疑もなくニーチエの例に倣つた。ニーチエは吾人の本質中の非人間的のもの、謂はば自然法に從ふものに對して、この文法上の語エスを常々使用した。

(譯者) ドイツ語のエスは文字通りに譯すと「それ」である。英譯ではitとせず、ラテン語のidを

用ひて、普通の文法上の用語と區別して居る。玆では原語を用ひた方が混亂を來たさないと考へてエスとした。

この概念が叙述と理解の上に長所があることを吾人は直ちに知るであらう。個人の心を未知の且つ無意識のエスとして見、その表面に自我が存在し、その核から知覺系統が發達したとする。これを綜で考へるやうに努めて見ると、自我はエスの全體を包括せず、只知覺系統が自我の表面を形成する程度に擴がり、恰も卵の上に胚芽が附着せるやうである。自我はエスより截然と分離して居らず、それの下の部分はエスと合流して居る。

抑壓されたものはエスに合流して居るが、單にその一部をなして居る。抑壓されたものは抑壓の抵抗によりて自我から截然と分離して居る。それはエスを通してのみ自我と交通することが出來る。吾人の病理學の研究によりてその大綱を捕へるに至つた殆ど凡ての區劃は、心的裝置の表面層(吾人の知れる唯一のもの)に關係することを吾人は直ちに認知する。これ等の狀態を圖示すると次圖の如くにすることが出來る。この形體は特殊の適用をなす爲のものでなく、只說明の目的に企てたに過ぎない。只附言すべきは、自我は聽覺帽(Hörkappe)を有することで、腦髓解

剖の教ゆる所によると、それを一方にのみ所有する。而してそれは斜に附いて居る。

これによると、自我はエスの一部分で、知覺——意識を通して働く外部世界の直接影響によりて變化されるものであることが容易に知られる。ある意味に於て、自我は表面分化の一延長である。尙又自我はエスとエスの傾向の上に外界の影響を有效にする仕事を有し、且つエスの中に權勢を揮つて居る快の原理の代りに現實の原理を置換へようと努めて居る。知覺はエスに於ては衝動に轉落する役目を、自我に對して行ふ。自我は理性と冷靜と名づくるものを表し、それに反してエスは激情を包含する。凡てこれは吾人の熟知せる通俗の區別と一致する。しかし、同時にそれは平均又は理想の場合にのみ適用されると見做すべきである

自我の機能的に重要なることは、動力の進路に對する統御が正常的に自我の上に運び入れられ

るといふ事實の中に示される。かやうにエスに對する自我の關係は、馬の異常な力を押へて居る馬上の人のやうなものである。只相違するのは、騎者は彼自身の力で統御するが、自我は他から借りた力を用ゆることである。尙この譬喩を用ゆると、若し騎者が馬から離れないやうにするには、往々馬の行かんと欲する所に馬を導くことを餘儀なくされる如くに、自我はエスの欲求を恰も自己の欲求の如くに絕えず實行する。

自我の構成とそれがエスから分化されることとに働く條件が知覺系統の影響以外にあるやうに見ゆる。身體そのもの及び殊にその表面は外部と內部の知覺を生ずる場所である。それは他の事物と同じ仕方に見られ、それに觸れると、二種の感覺を生ずる。その一は內部知覺と同一である。身體が知覺世界の他の事物の中に特殊の位置を得る仕方は精神生理的に十分に論議された。痛みはその過程に於ける一部の役目を演ずるやうに見ゆる。吾人の器官に就ての新しい知識が、痛みを感ずる病氣の時に得られるといふことは、一般に吾人自身の身體の觀念を得る仕方の模範である。

自我は最初身體的自我である。それは單に表面的實體たるのみならず、尙表面の投射である。

若しそれに對する解剖學的類推を發見せんと求むれば、吾人は容易にそれを解剖學者の腦の小人(Gehirnmännchen)と同一視することが出來る。それは腦皮質の中に逆さに立ち、それの踵を空中に上げ、後方に顔を向け、それの言語領域は左側にある。

自我と意識との關係は既に度々述べたが、尙この場合に重要なる二三の事實が殘されて居る。吾人は行く所として常に社會的又は論理的價値標準を取るべく馴れて居るので、下等の情慾の活動が無意識の中にあることを聞いて驚かされない。尙又心的機能が吾人の價値の階段に於て高ければ高いほど、一層容易に確實なる意識への進路を發見することを知る。しかし茲に於て精神分析的經驗が吾人を失望せしむる。一方に吾人は熱心なる集注を要する極めて複雜な知的作業が意識に來ることとなく、前意識的に行はるゝことがある。例へば前日非常な努力をしても解決の出來なかつた數學又はその他の問題の解答が睡眠中又は覺醒後直ちに得られることがある。

しかし尙一層不可思議の現象がある。自己批判の能力と良心、卽ち非常に高い階段にある心的活動が無意識であり、又極めて重大な結果を無意識的に生ずる人があることを吾人の分析中に發見する。故に分析の際に抵抗が無意識に止まることは決してこの種の單獨の場合でない。しかし

吾人が批判能力を有するに拘らず、無意識の罪悪感を述ぶる必要のある新經驗は、他の事實よりも遙かに吾人を當惑せしめ、新しい問題を提供する。殊に多數の神經病者の中には、この無意識の罪惡感が著しく經濟的役目をつとめ、回復の途上に最も有力なる障碍を置くことを吾人が漸次に知るやうになる時に、新問題に遭遇する。若し吾人の價値階段に今一度歸るならば、自分の最低のものと最高のものとは無意識たり得ることを言はなければならぬ。それは恰度意識的自我、殊に身體的自我に就て主張したことに、一の證據を供給したかのやうである。

三　自我と超自我(自我理想)

自我は知覺系統の影響によりて變化されるエスの一部であり、精神界に於ける眞の外界の代表者であるに過ぎないとすれば、吾人は極めて簡單なる事物の狀態を取扱ふことになる。しかしそれには尙複雜なものがある。吾人は自我の中に分化せる一の階段の存在すること、即ち自我理想(Ich-Ideal)又は超自我(Über-Ich)と稱するものを假定しなければならぬとの考察は既に他の所*で公にした。その假定は尙有效である。** 自我のこの部分は、その他の部分よりも意識と結合することの少ないといふ新しい主張が今說明を要求して居る。

* Zur Einführung des Narzissmus. Massenpsychologie und Ich-Analyse.

** 事物の現實を檢査する機能をこの超自我に歸した點に誤りをしたやうに見え、その點の訂正を要する外は凡て正當である。現實の檢査は寧ろ自我そのものの一の機能であるとの見解は、自我と知覺世界との關係に就ての吾人の知識と完全に一致するであらう。「自我の核」に就ての以前の暗示は、可なり不確

定のもので、知覺――意識系統のみが自我の核として認め得ると訂正する必要がある。

この點に於て吾人の領域を少しく擴げなければならぬ。鬱憂症の不快の苦痛を説明するに當りて、失はれた對象が自我の中に恢復されたと推定することによりて吾人は成功した。換言すれば對象充積が同一視によりて置換へられたと推測した。* しかしこの説明を最初に主張した時に、その過程の十分なる意義を認めず、且つそれが普通であり、代表的のものであることを知らなかつた。その後になつて、この種の置換へが自我の取る形式を決定するに大に關係すること、性格と名づくるものを構成するに實質上貢獻することが明かになつた。

* Trauer und Melancholie.

個人の存在の原始的言語階段の極く初めに於ては、對象充積と同一視とは殆ど區別されて居ない。後になつて對象充積はエスから生じ、エスの中では色情的傾向が必要として感ぜられることを推定することが出來る。自我はその初めに餘り強くないが、對象充積に就ての知識を有する。而してそれを承諾するか、或は抑壓の過程によりてそれに對して防禦を試みる。*

* 對象選擇が同一視によりて置換へることに竝行せる興味ある事實は、原始人の信仰中に發見される。

彼等の信仰のタブーに於ては榮養として同化する動物の屬性が、それを食する人民の性格として生殘るものである。よく知られて居る通りに、この信仰は人肉嗜食の一の根元になつて居る。而してその影響をトーテム饗宴より聖餐までの慣習を通して辿ることが出來る。この信仰に於て、對象の口頭支配（oralen Objektbemächtigung）に歸せられる結果は、後の性的對象選擇の場合に實際從はれるのである。

若し人が性的對象を捨てなければならぬ時には、自我の變化を生ずることが屢々である。その變化は吾人が自我の中に於ける對象の囘復として叙述し得るもので、鬱憂症に於て生ずるものである。しかしこの置換への眞の本質はこれまで知られて居ない。自我をして對象を捨てることに都合よくならしめ、又その過程を可能ならしむるものは、この內部投射（Introjektion）即ち口唇階段（oral Phase）の機制への一種の退行によるのである。又この同一視は恐らくエスがその目的を捨て得る唯一の條件である。兎も角發達の早い階段に於てはこの過程は屢々起るもので、自我の性質は豐富な對象充積の沈澱物であり、過去の對象選擇の記錄を保存すと結論することが出來る。勿論抵抗する能力には最初から種々の程度があるもので、ある特殊の人の性格は、色情的對象選擇の歷史的影響を承認し又は拒絕するといふやうに相違がある。多くの戀愛事件を有す

る婦人に於ては、それの性格の特質の中に、この對象充積の痕跡を發見するに容易である。吾人は又同時的對象充積と同一視の場合を考察しなければならぬ。卽ち對象が捨てられる前に生ずる性格の變化を考察しなければならぬ。かかる場合に性格の變化は對象關係を殘し、ある意味に於てそれを保存することが出來る。

他の見地から見ると、色情的對象選擇が自我の變形に置換へることは、自我がエスを支配することが出來、且つエスとの關係を深める一方法であると言へる。而してそれは自我がエスの經驗に大部分從順であることが生ずる。自我が對象の形態を取る時には、自我は自らを愛の對象としてエスに强ひ「御覽、私は對象のやうである。汝は對象のやうに私を愛することが出來る」といふことによつて、對象の損失を補はんと試みる。

かやうにして生ずる對象リビドーが自巳愛的リビドーに變形することは、性的目的の破棄、卽ち性慾退化（Desexualisierung）の過程を意味し、從つて一種の昇華作用である。玆に於て問題となるのは、これは昇華に常に用ひらるる通路であるか否か。凡ての昇華は、性的對象リビドーを自己愛的リビドーに變化せしめ、他の目的*に代へて行く所の自我の調停によりて生ずるか否か

の問題で、注意深き考察を要する。吾人は後に他の衝動の運命がこの變化から結果しないか、例へば共に融合して居る衝動の分解がこの變化から生じないかを考察しなければならぬ。

* 今吾人は自我とエスとの區別をしたが、自己愛に就ての私の序論中に述べたやうに、エスをリビドーの大貯水池と見なさなければならぬ。上に述べた同一視によりて自我に流れ込むリビドーは、それの二次的自己愛を生ずる。

少しく吾人の論題を外れる嫌ひがあるが自我の對象同一視のことを暫く述べなければならぬ。この同一視が優勢になり、多數となり、相互に兩立し難くなると病的結果を生ずる。個々の同一視が抵抗によりて相互から切斷されるために、自我の分裂を生ずる。恐らく所謂複重人格の場合の祕密は、種々の同一視が意識を順次に占領することである。それほど烈しくなく病的とは言へないにしても、尙異なる同一視の間の軋轢が表れて自我の分裂を來たす問題、結局純粹の病的現象として敍述することの出來ない軋轢の問題が殘つて居る。

豐富なる對象充積の影響に抵抗するために、如何なる性格の力が後年に至りて生ずることがあつても、最も早い子供時代に於ける最初の同一視の結果は一般的且つ持久的である。このことが

自我理想の起原の問題に吾人を導く。蓋し自我理想の背後には、凡ての中で最初であり且つ最も重要なる同一視、卽ち各人の歴史以前に生ずる所の父との同一視*が隱れて居るからである。これは明かに對象充積の結果又は產物でなく、直接の同一視で、何れの對象充積よりも一層早く生ずる。しかし最も早い性慾期に屬し、且つ父と母に關係する對象選擇は、最初の同一視を强める如き種類の同一視の中に通常それの結果が表れて居るやうである。

* 恐らくこれは「父」と言はず「兩親」といふ方が一層安全であらう。何となれば子供が性の相違に就て確實な知識を得るに至るまでは、陰莖のないことが父と母との價値に相違を來さないからである。私は近頃一人の若い結婚した婦人の例に遭遇した。その女の物語によると、彼女自身に陰莖のないことに氣づいた後、それは凡ての婦人に缺けて居らず、劣等のものと見做される婦人のみが缺けて居ると推測し、彼女の母もそれを有して居たと想像したといふことである。しかし私の敍述を簡單にするために、單に父との同一視といふことにする。

しかしこれ等の關係は極めて複雜で、今少しく精密に述ぶる必要がある。この問題を複雜にするものは、エデイプス關係の三角的特質と、各個人の生來の兩性的なることとの二つの成分に基い

て居る。

それの單純なる形式に於ける男兒の場合を敍述すると次の如くである。極めて早い年齢に於ては、幼兒は母の胸に關係し、依賴型(Anlehnungstypus. 自己保存本能に倚れば保持された愛——譯者) の對象選擇の最も早い場合である。而して男兒は父を自己と同一視して取扱ふ。暫くはこの二つの關係は相竝んで存在するが、後には母への性的欲求が一層强烈になり、父はそれに對する障碍物として認められる。これがエディプス錯綜を生ずる。* その後父との同一視は敵對の調子を帶び、母に對する父の位置を占めんために、父を除かんとの欲求に變ずる。その後父に對する關係は、竝存性(Ambivalenz) を取り、恰も同一視の中に最初から存在する竝存性が表れたかの如くに見ゆる。父に對する竝存的態度と、母に對する純粹の愛情的對象關係とが、男兒の中に、單純なる積極的エディプス錯綜の內容を作り上げる。

* Massenpsychologie und Ich-Analyse, VII. 參照。

エディプス錯綜の分解と共に、母の對象充積は放棄されなければならぬ。その場所は、二つの

事物の中の何れか一つによりて滿たされるかも知れない。卽ち母との同一視か、又は强烈になつた父との同一視かである。而して後者の結果が一層正常のものと認むべきで、母との愛情的關係がある程度に保存される。この仕方に於てエデイプス錯綜の通過は、男兒の性格の中に男性を鞏固にする。それと全く同じ仕方に於て、幼き娘に於けるエデイプス態度の成果は、母との同一視を强烈にし(或はかかる同一視がかやうにして初めて生ずるかも知れない)その結果子供の性格の中に女性の型を生ずるであらう。

これ等の同一視は豐富なる對象を自我に吸收しないから、常に上に述べた通りになるとは言へない。而して前記の二つの結果の中の何れかが生ずるもので、それは男兒に於てよりも女兒に於て多く表れる。卽ち分析の結果、吾人の屢々遭遇する所は、少女が愛の對象として彼女の父を棄て、男性を發揮して、彼女の父と自分とを同一視した。換言すれば自己の失つたものと同一視して、母と同一視しなかつた。このことは彼女の傾向の中に男性型が十分に强くあるか否かに明かに基いて居る。

故に兩性に於て、男性的及び女性的傾向の相對的强度がエデイプス狀態の結果として父と同一

視するか又は母と同一視するかを決定する。これが兩性に於けるエディプス錯綜のその後の變化を來たす一の方法であるが、他の方法も亦大切である。單純なるエディプス錯綜はそれの最も普通の形式を取らず、單純化又は圖式化をなして表れるもので、それが却つて實際的目的に適することが屢々である。一層精密に研究すると、一層完全なるエディプス錯綜が明かになる。それは積極的と消極的との二つがあり、子供時代に最初に表れた兩性的傾向に基いて居る。換言すれば男兒は父に對する竝存的態度と、母に對する愛の對象關係とを有するのみならず、同時に女兒のやうな行動をし、父に對して愛の女性的態度を表し、母に對して、敵意と嫉妬とを示すものである。この兩性的傾向によりて生じた複雜な要素のために、最も早い對象選擇と同一視との關係を明白に考察することも、亦それ等を明白に敍述することも困難である。兩親に對する關係に示される竝存性は全く兩性的傾向に歸すべきであるが、競爭の結果として同一視から發達するものでないと言へる。

私の考へによると、完全なるエディプス錯綜の存在を假定することは一般に都合よく、殊に神經症に關係する場合に然りである。分析的經驗によると、多數の場合に、只區別し得る痕跡を除

いては、他の成分は消失する。卽ち一方にはその系列が正常の積極的エディプス錯綜を形成し、他方には倒逆的の消極的エディプス錯綜を生じ得るが、その中間に位する部分は、この二つの成分中優勢のものと完全なる形態を構成する。エディプス錯綜が崩壞する時には、それを構成する四つの傾向が集合して、父の同一視と母の同一視とを生ずるやうになる。父の同一視は積極的錯綜に屬する母への對象關係を保存し、同時に倒逆的錯綜に屬する父への對象關係の代りをする。同樣のことが母の同一視にも生ずる。何れの個人に於ける二つの同一視と相對的强度は、二つの性的傾向の何れかがその人に優勢であるかを示すものである。

故にエディプス錯綜によりて支配される性的階段の一般的結果は、ある仕方に結合せる二つの同一視から成立する自我中の沈澱物を作ることであると考へてよい。自我のこの變化は、その特殊の位置を保存し、自我理想又は超自我の形式に於ける自我の他の成分と相對立して居る。

しかし超自我は單にエスの最初の對象選擇によりて殘された貯蓄でない。それは又この選擇に反對する一の强き反應構成をも示して居る。それの自我に對する關係は、「汝はかやうに（父のやうに）あるべきである」との訓戒によりて盡きて居ないで、尙「汝はかやうに（父のやうに）あ

つてはならぬ、換言すれば父のなす所の凡てを行つてはならぬ、多くの事が父の特權になつて居る」との禁止をも含んで居る。この自我理想の二重の方面は、自我理想がエディプス錯綜の抑壓に努力する事實から生ずる。而してこの抑壓は實に革命的出來事によりて初めて生ずるものである。エディプス錯綜の抑壓は確に容易の仕事でなかつた。兩親、殊に父がエディプス欲求の實現に障碍として認められた。それで子供の自我は自身の中にこの同一の障碍を造ることによりてこの抑壓行爲を强力にした。これをなす力は謂はば父から借りて來た。而してこの借財が非常に大切な行爲であつた。超自我は父の特質を保存するが、エディプス錯綜が强くなるに從つて、尙迅速に（權威、宗教敎育、訓練、講義の影響によりて）抑壓を生じ、且つ後になりて超自我は益々自我を嚴密に支配するやうになる。而してこの際の超自我は良心の形式、或は恐らく無意識の罪惡感として自我を支配する。かやうな仕方に支配する力の源泉に就ては、後に說明するが、その源泉は强迫的性質を有し、無上命令の形式に於て示される。

若し超自我の起原を今一度考察するならば、それは二つの重要なる結果であることを知るであらう。その一は生物學的で、他は歷史的である。卽ち人間が子供時代に助けなく、賴ることの長

いことと、エディプス錯綜の事實とである。その錯綜の抑壓は、愛情の發達が潜在期によりて中斷されることと關係し、又性慾生活の二種の活動と關係して居る。一精神分析者の見地によると人間に特有な前記の錯綜は、氷河期に必要であつた文化發達の遺産である。超自我が自我から分化することは偶然のことでなく、個人竝に種族の發達に於ける最も重要なる出來事の代表物である。かやうに兩親の影響を永久に表現することによりて、それの起原となつた成分の存在を不朽に示して居る。

精神分析學は人間本質の高等な、道德的、超人的方面を無視すと長い間非難された。この非難は疑ひもなく歴史的に且つ方法論的に不正である。何となれば第一に抑壓を鼓舞する機能を自我の道德的美的傾向に最初から歸した。第二に精神分析的研究は、哲學系統のやうに、出來合の完成した敎義を以て進んで行くことが出來ず、正常及び異常の現象を分析探究することによりて一歩一歩複雜なる心を理解する方法を取らなければならなかつた。心の抑壓せる部分の研究が吾人の仕事であつた間は、人間生活の高尚な方面の存在を理解する必要が無かつた。しかし今は自我の分析を初めるやうになつて、人間の高等なる本質があるに相違ないと非難した凡ての人に答へ

ることが出來るやうになつた。吾人はこの高等なる本質が自我理想或は超自我、即ち吾人の兩親に對する關係の代表物の中に存すといふことが出來る。吾人が小さい子供であつた時に、これ等の高等なる性質を知つた。吾人はそれ等を尊崇し、恐れた。而して後には自分自身にそれ等を取入れたのである。

故に自我理想はエデイプス錯綜の後繼者であり、又それはエスの最も有力なる衝動と最も大切なるリビドーの變化の表現である。この自我理想を生ずることによりて、自我はそのエデイプス錯綜を支配し、同時にそれ自身エスに服從する。自我は主として外界、即ち現實の代表者であるから、超自我は內界、即ちエスの代表者として自我に對立する。故に自我と理想との間の爭鬪は結局現實のものと、心的のものとの對立、外界と內界との對立たることを示して居る。

生物學的發達と人間種族の中に行はれた變化とによりて、エスの中に殘された凡ての痕跡は、理想の構成によりて自我に受繼がれ、自我によりて各個人の中に生存する。自我理想はそれが構成される仕方よりして、各個人の系統發生的賦與、即ち古代の遺產と多くの點に接觸して居る。かくて各人の心の最低部に屬するものは、理想の構成によりて、人間精神の最高として價値づけ

られるものに變化する。しかし自我を定位した意味に於て、自我理想を定位する企ては無益である。或は自我とエスとの關係を示すやうに試みた補助を自我理想に取入れることも無益である。自我理想

人間の高等なる本質に就て豫期されるものは、自我理想によりて容易に答へられる。自我理想は父への思慕の代表である限りに於て、凡ての宗教發達の萠芽を含んで居る。自我がそれの理想に達しないと宣言する自己判斷は、宗教信仰者の思慕の證明になる無價値の感を生ずる。子供が成長する時に、父の役目は教師又は他の權威あるものによりて行はれる。彼等の命令や禁示の力は、自我理想の中に殘り、良心の形式に於て道德的監視を行ふことをつづける。良心の要求と自我の現實の行爲との間の緊張は、罪惡の感として經驗される。社會的感情は、共通の自我理想を有することによりて他人との同一視を生ずることに基いて居る。

人間に於て最高なるものの主要素たる宗教、*道德、社會感は根本に於て同一物である。私が「トテムとタブー」の著書中に述べた假定によると、それ等は系統發生的には父錯綜から獲得したものである。宗教及び道德的制限は、エデイプス錯綜そのものを支配する實際の過程によりて得られ、社會的感情は若い世代の人々の間に殘る競爭心を打破する必要から生じたものである。男子

が凡てこれ等の道德的獲得を發達せしむる先導をなし、交錯遺傳によりて、それ等が婦人に傳達されたやうに見ゆる。今日でも社會的感情は、兄弟姉妹に對する嫉妬と競爭の衝動の上に置かれた上部構造として個人の中に生ずる。敵意が滿足されることが出來ないので、以前の競爭者との同一視が發達する溫和な同性愛の場合の研究は、この場合に於ける同一視が、敵對的進擊的態度に繼起する溫情的對象選擇の代表物であることを確めて居る。**

* 玆では科學と宗教とを暫く措いて述べる。

** Massenpsychologie und Ich-Analyse [Ges. Schriften. Bd. VI]. 及び Über einige neurotische Mechanismen bei Eifersucht, Paranoia und Homosexualität. [Ges. Schriften, Bd. V.] 參照。

しかし系統發生の敍述と共に、世人が驚いて退却したい位の新しい問題を生ずる。吾人が骨折つて建設した全體の組識の不適當を暴露するかも知れないとの恐れあるに拘らず、どうしても吾人はこの問題の考察を敢てしなければならぬ。卽ちその問題とは、早い時代に於て父錯綜から宗教と道德とを獲得したものは、原始人の自我か或は原始人のエスか。若しそれが彼の自我であれば、自我によりて遺傳されたものに就て何故に吾人は述べないか。若しそれが彼のエスであれば

エスの特質と如何にして一致するか。或は自我、超自我、エスの分化を、かやうな早い時代に及ぼすことは不正であるか。或は自我の中の過程の全部の概念は、系統發生を理解するに助けとならず、又それに適用出來ないことを正直に告白してはならないか。

先づ答へるのに最も容易な第一の問に答へよう。自我とエスとの分化は原始人民のみならず、尚遙かに單純なる生活形式に歸せなければならぬ。何となれば、それは外界の影響の免れ難き表現であるからである。超自我はトテミズムに導いた經驗から生じたものである。これ等の事物を經驗し獲得したものが自我であつたか、エスであつたかの疑問は直ちに意義を失つてしまふ。即ちエスに對して外界の代表者となつて居る自我を賴らなければ、エスは外界の變化を經驗し、それに遭遇することが出來ない。しかし又自我による直接遺傳といふことも出來ない。玆に於て現實の個人と種族の概念との間の空隙が明かになる。尚又自我とエスとの相違を嚴密な意味に取つてはならぬ。自我はエスの一部で、特に分化されたものたることを忘れてはならぬ。自我の蒙むる經驗は、先づ後代には失はれるやうに見ゆる。しかしその經驗が多くの世代の連續的個人に於て十分に反復され、强度を强められる時には、エスの經驗に變形し、それの印象は遺傳によりて

保存される。かくして遺傳され得る所のエスの中に、無數の以前の自我の存在の痕跡が蓄積される。而して自我がエスから超自我を構成する時に、それは過ぎ去つた、自我の復活せる像に過ぎない。

超自我が生ずるに至つた歴史は、如何にして自我がエスの對象充積と早い時代の軋轢を生じ、並に自我の後繼者たる超自我との軋轢をつづけ得たかを説明する。若し自我がエデイプス錯綜を支配するに成功しなかつたならば、エスから發生したエデイプス錯綜のエネルギー充積は、自我理想の反應構成にその出口を求めるであらう。理想と無意識の衝動傾向との間に極めて自由に行はるる交通は、理想が大部分無意識たり得ること、自我に寄りつき難きことを説明する。嘗て心の最も深い層の中に生じた爭鬪、迅速な昇華と同一視によりて終結しなかつた爭鬪は、今ではカウルバツハ（Kaulbach. 千八百五年獨逸のワルデツクに生れた歴史畫家――譯者）の繪にあるフンの戰爭が空中で行はれる如く、今では一層高い領域で行はれて居る。

四　二種の衝動

精神を、エス、自我、超自我、とに分類したことが、吾人の知識に何等かの利益を與へたとすれば、尚一層完全に心の中の動的關係を理解し、一層明白にその關係を叙述することが出來なければならぬ。吾人は既に自我は知覺によりて特に影響され、知覺は廣義に言へば自我に對して意義を有すること、恰も衝動がエスに對して意義を有すると同一であることを結論した。同時に自我は又エスの如くに衝動の影響を受くること、而して自我はエスの特に變化した部分たることを述べた。

私は前の著書「快の原理を越えて」の中に、衝動に就ての見地を發達させたが、玆にそれを固持し、且つ尚多くの議論の基礎としようと思ふ。その考へによると、衝動を二種類に區別して居るが、その一は性的衝動、卽ちエロス（Eros）で、最も著しく且つ研究され易いものである。それは禁止されない固有の性的衝動と、それから派生された所の昇華された衝動、卽ち目的禁止の

性質を有する衝動とを含むばかりでなく、尙自我に歸せられ、且つ分析の最初には性的對象衝動に反對せる如き自己保存の衝動をも含んで居る。衝動の第二の種類は定義するに困難で、結局それの代表としてサディズムを認むるに至るものである。生物學によりて支持された理論的考察の結果として、死の衝動の存在を假定した。この衝動の仕事は有機的物質をして無機狀態に歸へらしむることである。他方に性的衝動は生命を維持するために、生活物質から分散した分子の遙かに遠い結合を持來たすことによりて、人生を複雜にせんと狙つて居る。かやうな仕方に働くことによりて、二種の衝動は嚴密の意味に於ける保存的のものになる。蓋し兩者は人生の出來事によりて攪亂された事物の狀態を再建設せんと努めて居るからである。かくして生命の出現は、生命の持續の原因として認められ、又死の方への努力の原因として認められる。從つて人生そのものは、これ等二種の傾向の間の爭鬪と妥協とである。人生の起原の問題は、宇宙論の問題になり、人生の目的と意向の問題に二元的に答へられるやうになる。

この見地に於ては、同化や變質の特殊の生理的過程は、二種類の衝動の何れかに聯合し、二つの衝動は生活物質の各の分子の中に働く。但し二つの割合は同一でなく、ある物質はエロスの主

なる代表物になつて居る。

この假説は二種の衝動が相互に結合し混合し融合する仕方に何等の光明を與へない。しかしそれが規則正しく且つ廣汎的に起ることは、吾人の概念に缺くべからざる假定である。單細胞有機體が複細胞有機體に結合する結果として、單一細胞の死の衝動が連續的に中性化され、破壞的衝動が特殊器官の媒介によりて外界の方へ轉向するやうに見ゆる。而してこの特殊器官は筋肉組織であるやうである。死の衝動は外界及び他の生命ある有機體の方へ向けられた破壞の衝動として恐らくその一部を表現するやうに思はれる。

吾人は二種の衝動が相互に融合することを一度假定したが、又それ等の多少完全な擴散（Entmischung）の可能をも吾人に强ひる。性的衝動のサディズム的成分は、有用なる目的に役立つ衝動的融合の一例であるかも知れない。サディズムが獨立的となつた倒錯は、全く完全ではないが擴散の例である。この點から從來考察されなかつた多くの事實に對して、新見地を與ふるやうになる。放出の目的のために、破壞の衝動は習慣的にエロスに奉仕して居る。癲癇的發作は衝動擴散の產物竝に症候のやうである。衝動擴散と死の衝動の著しき出現とは、多くの烈しき神經病、

例へば強迫性神經症の著しき結果の中にあることが分かる。尙一般的に言へば、リビドーの退行、例へば性器の階段よりサデイズム的肛門階段へ退行することは、衝動の擴散に基き、これに反じて初期の性器の位相から一定の性器の位相への進步は、エロス的成分の添加によりて條件づけられると考へてよい。神經病の組織的傾向の中に强く表れる所の通常の竝存性は、擴散の產物として認められるか否かの問題を生ずる。しかし、竝存性は寧ろ不完全の衝動融合の狀態を示すと考へなければならぬ程根本的現象である。

玆に於て吾人の興味は次の問題に移つて行く。卽ち心の中に存在すと假定される構造、卽ち自我、超自我、及びエスと、二種の衝動との間の結合を認め得るか否か。尙心的過程を支配する快の原理が二種の衝動と、それ等の心の分化したものとに對して、不變的關係を有することを示し得るか。しかしこれ等の問題を論ずるに先だち、問題そのものの術語に關して生ずる疑惑を一掃しなければならぬ。快の原理に就ては疑ひの餘地はなく、又自我の內の分化も臨床的證明を有する。しかし二種の衝動間の區別は十分確實のやうに見えず、臨床的分析の事實がそれと矛盾するかも知れない。

次の如き一の事實が存在するやうに見える。二種の間の對立の代りに、愛と憎との兩極性を考へて見よ。エロスの代表者を發見するには困難がない。しかし憎が道を示して居る破壞の衝動の中に、捕へるに困難な死の衝動に對する代表者を發見し得ることを吾人は喜ばなければならぬ。臨床的觀察によると、愛は豫期しない規則性を以て憎を伴ふこと（竝存性）を示し、且つ人間の關係に於ては、憎は屢々愛の先行者たることを示すのみならず、尙多くの場合に憎は愛に變り、愛は憎に變る。若しこの變化が單なる時間的連續以上の何物かであるとすれば、エロス的衝動と死の衝動との間の根本的區別の如く、相互に反對する生理的過程の存在を豫想する根本的區別の根據がなければならぬ。

ある人が最初ある他人を愛し、その後その人を憎む場合に、その變化を惹起すやうな原因があるとすれば、吾人の問題とするに足らないことは明白である。又破壞的成分が對象充積の際に、エロス的衝動を通り越し、後になつてエロス的衝動と結びつくといふやうに、愛することが未だ表れないのに、敵意と進擊的傾向が初まる場合も亦問題とならない。しかし變形の起ることを假定するに一層よき根據となるものが、神經病者の心理學の例の中に數多ある。迫害妄想を有する

偏執狂者は、一定の人に非常に强き同性的愛着を有することに對して、自己を防禦する特殊の方法を取る。その結果嘗て最も多く愛した人が迫害者に變化し、その患者の進擊的竝に屢々危險的衝動の對象になる。玆に於て愛が憎に變形する中間の位相を挿入する根據を吾人は有する。同性愛竝に異性愛的社會感情が、進擊的欲求を惹起す敵對の烈しき感情を含むこと、竝に敵對の感情が打勝たれると、以前憎んで居た對象を愛し、それを同一視の對象とするに至るといふ事實が分析的研究によりて明かにされた。それで問題になるのは、これ等の場合に憎が愛に直接變形したと假定してよいかといふことである。この變化は純粹に內部的であり、對象の行動の變化が、その變化を惹起したものでないといふことは明白である。

偏執狂に於ける變化に關する過程の分析的研究によりて知らるるに至つた他の機制がある。竝存的態度は最初から存在して居り、變形は充積の反應的移動によりて生ずる。その移動のためにエネルギーは色情的衝動から離れて、敵對的エネルギーに用ひられる。

これと同一ではないが、これと相似たものが、敵對的態度がなくなつて同性愛を生ずる時にも表れる。敵對的態度は滿足を持ち來たす望がない。これが經濟的動機よりして愛の態度に置變つ

て一層多くの滿足の希望、卽ち放出の可能性がある。從つてこれ等の場合に於て、憎が二種の衝動間の質的相違と一致し難い所の愛に直接に變形することを假定する必要がない。

しかし愛が憎に變り得るといふことの他の機制を吾人の考察の中に取入れたことは、明白に構成される價値のある他の假定を暗默の中になしたことになる。吾人は心的生活の中、卽ち自我の中か、又はエスの中かに置換へられるエネルギーが存在するかの如く考へた。それは中性であるが、質的に分化して居る性的衝動か或は破壞的衝動へ結合することが出來、それの全體の充積を增加する。この種の置換はるべきエネルギーの存在を假定することなくして、說明は少しも進むことが出來ない。唯一の疑問はそのエネルギーがどこから來るか、何に屬するか、それは何を意味するかといふことである。

本能的衝動の質の問題、並にそれの變化を通じて固執することの問題は尙曖昧で、今日まで全く研究されなかつた。特に觀察し易い性的の部分衝動の中に今論じて居ると同じ範疇に屬する過程を認知することが出來る。卽ち部分衝動の間に或程度の交通が存すること、一の特殊の性的源泉から派生した衝動が、他の源泉から生ずる部分衝動を强力にするやうに、その强度を讓り渡す

ことが出來ること、一の衝動の滿足が他の本能の滿足の代りをなし得ることを吾人は發見する。それ等と同じ種類の尙多くの事實があるが、それ等は凡て必然的に一定の假定を吾人が敢てするやうに激勵する。

尙目下の議論には、推測以上のことは何もなく、又別に證據もない。しかしこの置換へられ得る中性的エネルギーは、自我の中にも、又エスの中にも著しく活動して居り、リビドーの自己愛的貯水池より流れ出た去勢的エロスであるといふことは信頼し得べき見地のやうである。エロス的衝動は破壞的衝動よりも遙かに可型的、轉向的、置換的であるやうに見ゆる。このことから容易に假定し得ることは、この置換へられるリビドーが蓄積を防ぎ、放出を容易にするために、快の原理に奉仕して働くことである。又放出が行はれる際に、その行はるる道に就ては無頓着であることも亦明白である。この特質はエスの中に於ける充積過程の特質である。その特質は對象に就て特殊の無頓着を示す所の、エロス的充積の場合にも發見される。而してそれは特に分析者が誰であつても、分析の中に生ずる轉移の場合に明かである。神經病者の復仇行爲が、異つた人に向けられ得ることの好例を、近時ランクが公にして居る。無意識の方面に於けるこの種の行動は

次のやうな滑稽な物語を想起せしむる。即ち三人の田舍の仕立屋があつたが、その一人はその田舍の唯一人の鍛冶屋が重罪を犯した爲に絞罪に處せられなければならなかつた。刑罰は犯行に適當しなくても公平でなければならないのである。又夢の研究に於て、一次的過程によりて生じた置換へにこの種の不緊密が發見された。その場合に於て、對象が二次的重要の位置にまで引下げられたが、それは今述べて居る放出の路に於ても同樣である。對象の選擇に就ても、又放出の路に於ても、特にやかましく正確であることは自我の特性であるやうに見ゆる。

若しこの置換へられるエネルギーが去勢的リビドーであれば、それは昇華されたエネルギーとして叙述してよい。蓋しそれは自我の特質たる統一又は統一への傾向を作る方へ補助を與へるといふ限りに於て、エロスの主なる目的たる結合や合併を支持して居るからである。若し廣義に於ける知的過程が、この置換への下に包括されるとすれば、思考作業に對するエネルギーは昇華されたエロス的衝動の源泉から供給されなければならぬ。又自我がエスの第一の對象充積を取扱ふに當りて（その後の對象充積を取扱ふに當つても）、リビドーを自我の中に取入れ、同一視によりて生じた自我の變形を自我に結付けることをする場合を吾人は想起する。エロスのリビドーが自

我のリビドーに變形することは、勿論性的目的の放棄、即ち去勢化を意味する。何れの場合にしても、このことはエロスに對する關係に於ける自我の重要なる機能に光明を與へて居る。かやうな仕方に對象充積のリビドーを所有し、それ自身を唯一の愛情對象とし、エスのリビドーを去勢化、又は昇華することによりて、自我はエロスの目的と反對に働き、反對の衝動的傾向に奉任する。自我はエスの他の對象充積に服從し、謂はばそれ等と手をつらねて行かなければならぬ。この自我活動の他の結果のことは後に再び述べる。

このことは自己愛の原理の重要なる擴大を意味する。發端に於て、凡てのリビドーはエスの中に蓄積され、その場合に自我は尙構成の過程にありて、その力も弱い。エスはこのリビドーの部分をエロス的對象充積に送り、漸次に強くなつた自我はその對象リビドーの所有を得んと企て、エスを愛の對象とせんと努める。自我の自己愛はかやうにリビドーが對象から撤退することによりて二次的に得られたものである。

衝動傾向を跡づけることによりて、その衝動が、エロスの派生物たることを吾人は再三發見する。若し「快の原理を越えて」の著書中に考察したこと、又最後にエロスに結合したサディズム

的成分が存在しないとすれば、吾人は二元的の根本的見解を支持することが出來なくなる。しかし吾人はこの見解から離れることが出來ないから、死の本能は本質上啞であり、人生の騷擾は大部分エロスから生ずることを結論しなければならなくなる。*

* 實に吾人の見解によると、外界へ向けられた破壞衝動は、エロスの仲介によりて自己から轉向したものである。

次にエロスに對する爭闘であるが、快の原理は、人生の過程に妨碍を引入れる力、卽ちリビドーに對する爭闘の羅針盤として、エスに役立つことは明白である。人生がフエヒネルの不變的平衡論によりて支配されるとすれば、人生は死の方へ絶えず下つて行くことになる。しかし水準の下ることは遲延されて、新しい緊張がエロス卽ち性衝動の要求によりて生ずる。エスは快の原理卽ち不快の知覺によりて指導され、種々の仕方に於けるこの緊張に對して自己を保護する。第一に去勢化されないリビドーの要求に出來るだけ速く從ひ、直接の性的傾向の滿足に努力する。しかしそれは倘進んで、一層包括的の仕方で、滿足するやうになり、凡ての成分的要求を含む所の特殊の形式の滿足、例へば性的緊張を支持する性的物質の排出にまで進んで行く。性的行爲に於

ける性的物質の排出は、或程度に於て身體細胞と生殖細胞との分離に相應する。これは完全な性的滿足に從ふ條件と、死との間の類似を說明し、又死は下等動物のあるものに於ける交尾と一致することを說明する。これ等の動物は生殖行爲の中に死んでしまふ。蓋しエロスが滿足の過程を通りて解放された後は、死の衝動がその目的を達するに全く自由であるからである。最後に自我はそれ自ら、竝にそれ〴〵の目的の爲にリビドーの一部を昇華することによりて、緊張を支配するエスの仕事を助けて行くものである。

五　自我の副次的關係

この本の各章の表題がそれの內容と全く相應しないこと、竝に新しい關係を研究しようとする時に常に吾人は既に取扱つた事項に後戾りするといふことは、吾人の取扱ふ主要事項の複雜なことから宥されなければならぬ。

既に度々述べたる如く、自我は拋棄されたエスの充積の代りをする同一視から大部分構成される。この同一視の最も早いものは、常に自我の中の特殊の任務を滿たし、超自我の形に於て、殘りの自我から離れる。所が強くなつた自我は、後にはかやうな同一視の影響に柢抗することが出來るやうになるかも知れない。超自我がその特殊の位置を得ることは一の成分に負ふもので、その成分は次の二つの方面から考察しなければならぬ。一方にそれは最初の同一視であつたこと、卽ち自我が未だ弱い時に起つた事實であり、他方にそれはエディプス錯綜の後繼者で、他のものよりも遙かに重要なる對象を自我に導入した事實である。自我の中に生じたその後の變化に對す

る超自我の關係は、大體的に言へば、兒童期の最初の性的階段と靑春期以後の十分に發達した性的活動との關係である。超自我はその後の影響を受け易いとは言へ、父錯綜から引出した特質、卽ち自我から離れて、それを支配する能力を一生涯保存する。それは以前の自我の弱いことと賴つて居ることとの記念物であり、成熟した自我はそれの支配を受ける。子供が前に兩親に從ふやうに强ひられた如くに、自我はそれの超自我によりて主張された無上命令に從ふものである。

超自我がエスの最初の充積、卽ちエディプス錯綜から生れて來たことは、超自我に對し一層大切である。この子孫は旣に述べた如く、エスの系統發生的獲得物と結合し、エスの中に沈澱物を殘した以前の自我組織の再構成を行ふ。かくして超自我は常にエスと密に接觸し、自我に關しては、エスの代表者として働くことが出來る。それはエスの中に深く達し、從つて自我よりも遙かに意識から遠ざかつて居る。*

* 精神分析的、又は超心理學的自我は、解剖學的自我卽ち「腦の小人」と同じく逆さに立つて居ると言へる。

長い間新奇な點を失ひ、しかも倫理論的討議を待つて居る或臨床的事實に吾人の注意を向ける

と、如上の關係を最もよく理解することが出來る。

分析作業の際、全く特殊な行動をする人がある。その人に向つて治療が進んだことを滿足を以て話すと、その人はそれに同意せず、狀態は良くならず、惡くなつたと答へる。吾人は最初これを以て反抗と見なし、醫者に對して卓越を示さんとする企てであると解するが、後になると、もつと深い眞の見解を得るやうになる。かやうな人間は如何なる賞讃にも堪へることが出來ないばかりでなく、治療の進歩に反對な仕方に反應すると考へられた。症狀の改良、又は一時的停止を生ずる如き一部分の解決は、患者の方に一時病勢の增加を來たす。治療の際に良くなる代りに惡くなる。彼等は所謂消極的治療反應を示すものである。

かやうな人々には、その恢復に反對し、恢復の來るのを恰も危險に近よるかの如く恐れしむる何物かが存在することは明白である。これは健康を望む以上に病氣を必要とすることが、この患者に優勢であると普通に言はれて居る。しかしこの抵抗を通常の仕方で分析すると、醫師に對する反抗の態度や病氣に伴ふ種々の利益に固執することを引去つても、尙大部分殘されて居ることを發見する。その部分が恢復に對する障碍の中で最も强力なもので、醫師に對する消極的態度の

假說や病氣の利益に執着することよりも遙かに强力である。

結局吾人は道德的成分、卽ち罪の感と稱するものを取扱ひつつあるといふことが分かる。罪の感は病氣の中に贖罪を發見し、苦痛の罰を捨てることを拒むものである。吾人がこの寧ろ落膽せしむる如き說明を決定的のものと見なすことは正當である。しかしこの罪の感は患者に對しては啞で、彼に罪があると告げない。彼は罪を感せず、單に病氣を感ずる。この罪の感は、恢復に對する抵抗として表れ、打勝つに極めて困難である。又病氣たることを續けることの背後に、この動機が横はることを患者は信ずるに困難で、精神分析療法が正しい療法でないといふ一層明白な說明に固執する。*

* 無意識の罪惡の感の障碍に對する戰ひは分析者に取りて容易でなかつた。直接にそれに反對して何もなすことは出來ない。それの無意識の抑壓された根原を表すやうにし、且つそれを漸次に意識的の罪惡の感に變ずるやうにする徐々の方法を、間接に行ふより外に方法はない。この無意識の罪惡の感が借りて來たものである時に、換言すればそれは嘗てエロス的充積の對象であつた他の人間と同一視することの產物である時に、それに影響を與ふる特殊の機會を吾人は有する。罪惡の感がこの仕方に於て採用さ

れる時に、それは往々豐富な愛情關係の唯一の痕跡で、且つ認知に困難なものである。この過程と鬱憂症に起る過程との類似は明白である。若し吾人が無意識の罪惡感の背後にある以前の對象充積を發見することが出來れば、治療上の成功は屢々立派なものであるが、それが出來ないと治療上の努力の効果は確實でない。治療は罪惡の感の强度に主として依存して居るが、屢々治療が罪惡の感に反對して働き得るだけの對抗力を有しないことがある。それは又恐らく分析者の人格が患者をして彼の自我理想の代りに分析者を置かしむるやうにするか、或は分析者が患者に對して豫言者、救世主の役目を演ずるやうに試みるかに依存するかも知れない。分析の規則は醫者がかやうな仕方に彼の人格を利用することに全く反對するから、吾人は分析の效果に次の如き新しい制限を有することを正直に告白しなければならぬ。即ち分析は病的反應を不可能にするのでなく、患者の自我に何れの方法をも選ぶやうな自由を與へるやうにするものであると。

以上の敍述は最も極端な場合に適用されるもので、それより低い程度のものは、凡ての神經病者の中に發見される。實に神經病の烈しきことを決定するものは、その狀態に於けるこの要素、即ち自我理想の態度であるかも知れない。故に罪惡の感が異なる條件の下に表現される仕方を一

層十分に說明しなければならぬ。

正常に意識される罪惡の感（良心）の說明は困難でない。それは自我と自我理想との間の緊張に基き、批判的機能によりて生じた自我の處罰の表現である。神經病者に知られた劣等の感は、恐らくそれに密接に關係して居る。それ等に於ては、次に述ぶる二つの極めて知られた病氣に於ては、罪惡の感が非常に強く意識される。それ等に於ては、自我理想が特殊の嚴酷を表し、往々最も殘酷を以て自我に反對して激怒する。その二つの病氣、卽ち強迫的神經症と鬱憂症とに於ける自我理想の態度は一方に類似して居るが、又他方に重大なる差異がある。

強迫的神經症のある形式の中には、罪惡の感が明かに表れて、自我に對して釋明することが出來ない。その結果、患者の自我は罪惡の非難に對して反抗し、その罪惡の感を拒絕するために醫者の補助を求める。自我がその非難に從ふことは、愚かなことになる。蓋しさやうにすることは何等の結果を示さないからである。分析の示す所によると、超自我は自我に知られないで殘されて居る過程によりて影響を被る。又分析によりて罪惡の感の基礎となれる抑壓された衝動を發見することが出來る。かやうに超自我は自我よりも遙かに多く無意識のエスに就て知つて居ることと

が證明される。

鬱憂症に於ては、超自我が意識を專有するとの印象が一層强い。しかしこの場合に自我は何等の反對を敢てしない。それは罪を認め罰に從ふ。この相違の說明は明白である。强迫的神經症に於ては、超自我によりて批判される非難すべき衝動が自我の一部を構成しない。所が鬱憂症では超自我の怒りの對象が同一視によりて自我の一部をなして居る。

この罪惡の感が何故にこの二つの神經的疾患に於て非常に烈しくなるかに就ては明白でない。この狀態に示された主なる問題は他の方面に存する。吾人は他の場合、卽ち罪惡の感が無意識に止まる場合を述べた後に、そのことを論ずることにしよう。

この狀態は主としてヒステリー竝にヒステリー型の狀態に於て發見される。罪惡の感が無意識に保たれるといふ機制は發見するに容易である。超自我の批判が、自我の中に苦痛の知覺を生ずることを威嚇するに當りて、ヒステリー型の自我はその苦痛の知覺に對して防禦するが、それは恰も堪へ難き對象充積を抑壓行爲によりて防禦すると同じ手段を用ひる。故に罪惡の感を無意識に止めることの責任者は自我である。吾人は通常自我が超自我のために、又その命令によりて抑

歴を實行することを知る。しかしこの場合は、自我が同じ武器をその亂暴な主人に向けたのである。强迫的神經症に於ては、反應構成の現象が優勢に表れるが、しかしこの場合に、自我は罪惡の感に關係する材料を遠距離に置くことで滿足して居る。

尙進んで罪惡の感の大部分は、通常無意識に止まらなければならぬといふ假說を主張することが出來る。蓋し良心の起原は無意識に屬するエディプス錯綜と密接に結合して居るからである。正常者は彼が信ずるよりも遙かに不道德であるばかりでなく、彼の考ふるよりも遙かに道德的であるといふ矛盾した主張をする者があるとすれば、精神分析は、その前半の主張に對して責任があるが、又後半の主張に對しても反對することは出來ない。*

* この主張は外見上矛盾である。それは單に次のことを示して居る。卽ち人間の本質は吾人の信ずるよりも、換言すれば意識的知覺によりて自我に知られるよりも、善竝に惡に對して遙か大なる能力を有して居ると。

この無意識の罪惡の感の增進が、人間をして犯罪者に變へ得るといふことの發見は驚くべきことであつた。しかしそれは疑ひもなく事實である。多くの犯罪者、殊に靑年犯罪者に於ては、犯

罪の前に極めて力強き罪惡の感の存在を發見することが出來る。從つてその感は犯罪の結果でなく却つてそれの動機である。罪惡の無意識の感を現實的且つ直接的のある物に定着することの出來ることは、恰も罪惡の感を輕減するものであるかのやうに感ぜられる。

凡てこれ等の狀態に於て、超自我は意識的自我から獨立し、無意識的エスと密接なる關係を示す。既に述べた自我に於ける前意識的言語殘留物の重要なことに就て問題を生ずる。卽ち若し超自我が一部分無意識であれば、如何にしてそれはかやうな言語表象の中に存在し得るか、又若し然らずとすれば何の中に存在するか。それに對する決定的答は次の如くである。卽ち超自我が聽的印象から派生されたものたることを否定することが出來ず、又超自我は自我の一部で、大部分言語表象（概念、抽象）の仕方で意識に近よるものである。しかし、充積的エネルギーは超自我の內容を聽的知覺、教育、講義等から引出さず、エスの中の源泉から導き出すものである。

前に答を延ばして居た疑問、卽ち超自我がそれ自身を罪惡の感（或は寧ろ批判として、何となれば罪惡の感はこの批判に相當する自我の中の知覺であるから）として示し、又同時に、自我に對して非常な苛酷を發達せしむるのは、どうしてであるかの疑問に歸つて述べる。先づ鬱憂症に

眼を向けると、非常に强い超自我を發見する。その超自我は意識を專有し、恰もその患者に有利なサディズムの凡てを支配するかの如く、無慈悲な狂暴を以て自我に對して激怒を發する。サディズムに就ての吾人の見解からいふと、破壞的成分は超自我の中に貯藏されて自我に反對して向けられると言はなければならぬ。今超自我の中に權力を有するものは、死の衝動の純粹文化の如きもので、それは若し自我が噪狂に變ずることによりて、彼の暴君を防ぐことをしなければ、自我を死に逐ひこむだけ十分に暴威を振ふことが屢々である。

强迫性神經症のある形式に於ける良心の非難は、苦痛であり苛責であるが、しかしその狀態は餘り明白でない。鬱憂症とは反對に强迫性神經症は、決して自己破滅の階段を取らない。彼は自殺の危險に對しては感受しないかの如く、ヒステリーよりも遙かによくそれを防禦する。自我の安全を保障するものは、對象が保持されて居ることとである。强迫性神經症に於ては、前性器組織(Prägenitale Organization)に退行することによりて、愛の衝動を事物に對する進擊の衝動に變形することが出來た。ここに再び破壞の本能が自由に置かれ、對象の破壞を目的とするか、或は尠くともその目的を持つやうに見ゆる。この傾向は自我によりて採用されず、自我はそれに對

して反應構成と豫戒的方法とを以て反抗し、爲にその傾向はエスの中に止まる。しかし超自我は恰も自我がその傾向に對して責任あるかの如く振舞ひ、熱心に破壞本能を打懲すことによりて、その傾向が單に退行によりて生じた假象でなく、愛情が眞に憎惡に置換へられたことを示すやうにする。自我は何れの方面にも救助がなく、殘虐のエスの强求に對し、且つ罰を加へる良心の非難に對して無益にそれ自身を防ぐ。辛うじて、二方面の最も殘忍なる行動を押へて居るに過ぎない。而して最初の結果が無限の自責で、それに次では、なし得る範圍內にある對象の系統的苛責が伴ふものである。

個體に於ける危險なる死の衝動は種々の仕方に取扱はれる。その衝動は一部分エロス的成分と融合することによりて無害のものとなり、一部分は進擊の形式を取りて外界の方へ轉向する。しかし大部分は疑ひもなく內部の仕事を自由につづける。然らば鬱憂症に於ては、超自我が死の衝動に對する一種の集合所となり得るのは如何にしてか。

衝動の制御、即ち道德性の見地から言へば、エスは全く無道德的(amoralisch)であり、自我は道德的たることを努め、超自我は過道德的（hypermoralisch）たることが出來、エスと同じく殘

忍のものたり得るものである。若し人が他人に對する進擊的傾向を抑壓すればする程、自我理想に於て暴君的になり進擊的になる。普通の見解はその狀態を反對に考へ、自我理想によりて建てられた標準が、進擊性の抑壓に對する動機であるやうに考へる。しかし尙殘された事實がある。人が彼の進擊性を統御すればする程、自我に對する自我理想の進擊的傾向が烈しくなつてくる。それは轉移、卽ち自身の方に轉向する如きものである。しかし一般の正常の道德は烈しく制限的の性質を帶び、殘酷に禁止する性質を有する。それから實に殘忍な刑罰を加ふる高等の本質に就ての概念は生ずるものである。

これ等の問題の考察を進めるには、新しい假定を導き入れなければならぬ。超自我は父の模型と同一視することから生ずる。かかる同一視はいづれも去勢又は昇華の性質を有する。この種の變形が起る時に、同時に衝動的擴散が生ずるやうに見ゆる。昇華の後、エロス的成分は以前に結合して居た全部の破壞的要素と結合する力を有しなくなり、これ等の破壞的要素は進擊や破壞の傾向として解放される。この擴散から理想はそれの嚴格と殘忍の一般的性質、卽ち命令的の當爲(Sollen)を受取るのである。

再び强迫性神經症に就て少しく考察しよう。この場合では關係が異つて居る。愛情が進擊性にまで擴散することは、自我の働によりて起るのでなく、エスの中に生じた退行の結果である。しかしこの過程はエスから超自我の方に擴がり、無辜の自我に對する超自我の嚴格は烈しくなつて行く。しかしこの場合には鬱憂症の場合と同じく、自我は同一視によりてリビドーを征服し、そのために、以前リビドーと混合して居た進擊の手段によりて、超自我からの刑罰を被るやうになる。

かくして自我に就ての觀念も又それの種々なる關係も明白になりかけた。吾人は自我の强力なことと弱いこととを發見する。而してこれは重要なる機能を委ねられて居る。知覺系統に對する關係によりて、それは心の過程を時間的順序に配列し、その過程と現實との對應を檢査する。思考過程を挿入することによりて、これは筋肉運動的放射の延期を行ひ、動力の通路を支配する。この最後の支配は、確かに事實よりも寧ろ形式に關係して居る。行動に關して自我の位置は憲法上の王位の如く、その者の裁可なくしては一つも法律となることが出來ず、しかし議會にて承認したものを否認するには長い間熟考する。外部から生ずる人生の凡ての經驗は、自我を豐富にす

る。しかしエスは自我に對して他の外界であり、その外界を服從せしめんと自我は努力する。自我はエスよりリビドーを取去り、エスの對象充積を自我構造に變形する。超自我の助によりて、自我はエスの中に貯へられた過去の經驗を汲取る。しかしその方法は吾人に尙不明である。

エスの內容が自我に侵入し得る道に二つある。一は直接で、他は自我理想の道から行く。その何れの道を取るかは、多くの精神活動に對して非常に重要である。自我は衝動の知覺から衝動の統御に發達し、衝動に服從することから衝動の禁止に發達する。この仕事の大部分は自我理想によりて分擔されるが、その自我理想は一部分はエスの衝動的過程に反對する反應構成である。精神分析は自我をしてエスの征服を尙遠く進めるやうに可能ならしむる道具である。

しかし他の見地から見ると、この同一の自我は三人の主人に仕へ、爲に三つの種々の危險、卽ち外界から、エスのリビドーから、超自我の苛酷から、威嚇される可憐なものであることが分かる。この三種の危險に相應して三種の憂慮がある。憂慮は危險から退くことの表現である。恰も境界地に住むものの如く、自我は世界とエスとの間を和解せんと試み、エスを世界の要求に從はしめんとし、筋肉活動によりて、世界をエスの欲求に順應せしめんとする。事實上自我は分析的

治療に於ける醫者の如く振舞ふ。卽ち自我は現實世界に順應する力によりてエスに對するリビドー的對象となり、エスのリビドーを自身に結びつけるやうにする。しかし自我はエスの同盟者たるばかりでなく、彼の主人の愛を求むる服從的奴隷である。出來るならば自我とエスと親善關係を維持せんと試み、エスの無意識的要求の上に、前意識的合理化の覆ひをかける。而してエスが實際は頑固で不動であるに拘らず、現實の命令に服從して居るかの如く自我は佯る。卽ち自我はエスと現實との爭を變裝させ、出來るならばエスと超自我との爭ひをも佯るものである。エスと現實との中間にある自我の位置は、自我をして屢々追從者、機會を捕へるもの、虛僞者たらしめる。恰も政治家が一方に眞理を見、他方に一般的人氣によりて位置を保たんとする如きものである。

二種の衝動に對して自我の態度は公平でない。自我は同一視と昇華とを行ふことによりて、エスに於ける死の本能に、リビドー征服の補助を與へる。しかしそれを行ふことによりて自我自身が死の衝動の對象となり、死滅する危險を被る。それを救ふために、自我はリビドーと共にそれ自身を實現しなければならぬ。かくして自我はエロスの代表者となり、生活し且つ愛せられるこ

とを欲する。

自我の昇華の仕事は、衝動の擴散を生じ、超自我に於ける進擊的衝動の解放を結果するが、リビドーに對する自我の爭は、迫害と死の危險にそれ自らを委ねるやうにする。超自我の攻擊の下に苦しみ、それに屈從するやうになると、自我はかの原生動物が、自分で造つた分解の產物のために破壞されると同樣な運命に遭遇する。經濟的見地からいふと、超自我の中に働く道德性はかやうな分解の產物であるやうに見ゆる。

自我の示す從屬的關係の中で、超自我に對する關係は最も興味あるものである。

自我は憂慮の眞の住所である。自我は三方面よりの危險に威嚇されて、逃亡反應を發達させる。蓋し、自我は威嚇する知覺から、或はエスに於ける等しく恐ろしき過程から自己充積を撤退し、それを憂慮として表現する。この原始的反應は後に保護的充積を導き入れること（恐怖症の機制）により置換へられる。自我が外部の危險から又はエスのリビドー的危險から何を恐れるかを一々記すことは出來ない。吾人はそれが崩壞や絕滅の本質を有し、分析によりて決定されないことを知る。自我は單に快の原理の警戒に從ひつつあるのである。他方に超自我に就ての自我

の憂慮、卽ち良心に就ての自我の憂慮の背後に、何が隱れて居るかを吾人は言ふことが出來る。後に自我理想となつた高等の本質は去勢を以て自我を威嚇したもので、この去勢の憂慮が中心となりて、その周圍にその後の良心の憂慮が集合する。良心の憂慮として固執するものは、この去勢の憂慮である。

何れの憂慮も結局は死の憂慮であるとの聖句は、何等の意義を有せず、正當な言葉でない。外部の對象に就ての憂慮（客觀的憂慮）と神經的リビドー的憂慮とから死の憂慮を區別することが正しいやうである。それは精神分析學に困難な問題を生ずる。蓋し死は無意識の相應物を發見することの出來ない消極的內容を有する抽象概念であるからである。死の憂慮の機制は自我がそれの自己愛的リビドー充積を大部分拋棄することであるやうに見ゆる。換言すれば、自我が憂慮を感ずる他の場合に外界事物を棄てると同じく、それ自身を拋棄することであるやうに思はれる。死の憂慮は自我と超自我との間の作用であると私は信ずる。

死の憂慮は二つの條件、卽ち外部の危險に對する反動と、鬱憂症に於ける如き內部過程との條件の下に表れる。（その條件は又憂慮の發達する他の狀態に全く類似する）。尙神經病的表現は正

常の表現を理解する補助になる。

鬱憂症に於ける死の憂慮は一の說明を要する。即ち自我は超自我によりて愛される代りに憎まれ、迫害されると感ずるために、それ自らを拋棄するといふことである。故に自我に取りて生きるといふことは愛せられると同じ意味である。即ちエスの代表者として表れる所の超自我から愛せられることが、生きるといふことである。超自我は早い頃には父親により、後には神意又運命によりて行はれると同一の保護及び救助を履行するものである。しかし、自我が自分の力では打勝つことの出來ないと信ずる現實の大なる危險に遭遇する時には、自我は同一の結論を引出すやうになる。即ち自我は保護の凡ての力から見捨てられたと思つて自己を死に委ねる。これと同一の狀態が、誕生の最初の大なる憂慮の狀態と、幼時の思慕の憂慮（保護する母親から別れることの憂慮）との基礎をなして居る。

これ等の考察からして、死の憂慮は良心の憂慮と同じく、去勢の憂慮の發達したものと考へることが出來る。罪惡の感が神經病者に對し大なる意義を有することからして、通常の神經病的憂慮が超自我と自我との間の憂慮（即ち去勢、良心、死の憂慮）の發達によりて烈しくなることを

推定することが出來る。
エスは自我に愛又は憎を示す手段を有しない。それは欲するものを言ふことが出來ず、又何等意志の統一をなし遂げて居ない。エロスと死の衝動とがその中に戰ふ。吾人は如何なる武器を以て一方の衝動が他方に對して防禦したかを述べた。靜寂なることを欲し、快の原理の警戒に從つて闖入者エロスを休息せしむることを欲する死の衝動は、啞ではあるが力强いもので、エスはその死の衝動の支配の下に立つかの如く敍述することが出來る。しかしこの場合にエロスによりて演ぜられる役目を餘りに輕く評價することを吾人は氣遣ふものである。

精神分析の興味

一 心理學的興味

精神分析とは神經過敏（神經諸症）の或形態を心理學的技術によつて治療しようとする醫術的方法である。一九一〇年に公にした小册子の中で、私は精神分析がブロイエル（J. Breuer）の下劑的療法から發達したことと、並にそれがシヤルコー（Charcot）やジヤネー（P. Janet）の學說に關係して居ることを述べた。

＊ Über Psychoanalyse. 6. aufl. 1922.

精神分析的治療法を適用し得る病症の例として、强迫神經症（强迫觀念、强迫行爲）の多樣な徵候と同樣ヒステリー性の痙攣及び抑壓現象を擧げることが出來る。これらは全然、自發的治療を偶然に示し、且つ氣まぐれな未だ理解されてゐない方法で醫師の人格的影響に服する狀態である。眞正な精神障礙の困難な形態に於ては精神分析はまだ治療的に何もしてゐないが、しかし神經症や精神症の疾患の由來や機制を洞察し得るに至つたもので、これは醫學史上最始のことであ

る。

しかし精神分析のこの醫術的意義を、諸科學の綜合に興味を抱く學者達の團體に對して紹介しようとする企ては正當でないかも知れない。蓋し大部分の精神病醫や神經學者がまだこの新療法に對して否定的態度を執り、その前提や結果を非難してゐる限り、この企ては早すぎると思はれるからである。しかし精神分析は他の幾多の知識領域と接觸し、且つそれ等の知識と精神生活の病理學との間の思ひがけない關係を生ずるから、精神病醫以外の人々の興味をも要求するものと信じ、この企ては正當であると考へる。それで今精神分析に對する醫術的興味をさし措いて、この若い科學について私の主張したことを例證によりて說明してみようと思ふ。

＊

正常者と患者との差別なく、その思考形成や身振り及び言語の表現中には、精神器官の機能の有機的障礙或は病的缺陷の結果とのみ見なされてゐて、今まで心理學の對象とならなかつたものが頗る多い。それはどんなものかと言ふと、正常者に於ける間違ひ（言ひ違ひ、書き違ひ、忘却等）、偶然の行爲、及び夢、神經病者における痙攣の發作、譫妄狀態、幻覺、强迫觀念及び强迫

行爲である。人はこれらの現象を――間違ひのやうに概ね無視してしまはない限り――病理學の領域に歸して、これを生理學的に説明しようと努めたが、滿足な結果を得なかつた。之に反して精神分析は、すべてこれらの現實は純粹に心理學的な性質の假定を通してのみ理解することが出來、既知の心理的現象と關聯させることが出來ることを示した。斯くして精神分析は一方において生理學的思考方法の範圍を局限し、他方において病理學の大きな部分を心理學へと奪つたのである。玆において正常な現象は强い證明力を獲た。精神分析は病理學的材料から得た洞察を正常狀態に適用するのだと云ふ非難は當らない。精神分析は彼方此方で相互に獨立な證明を引出し、斯くして正常過程も所謂病理學的過程と同一の規則に服することを示すのである。

此處で問題とする正常現象中、卽ち正常人において觀察される現象中、間違ひと夢との二つを特に詳しく說明しよう。

間違ひ、卽ちよく憶えてゐる筈の言葉や名前や決意の忘却、言ひ違ひ、讀み違ひ、書き違ひ、二度と見出せなくなるやうな物の置き違ひ、紛失、十分な知識を有するに拘はらず思ひ違ひをすること、多くの習慣的な身振りや運動――私はこれらすべてを健全な正常人の間違ひとして包括

する――は心理學によつて僅かしか注目されず、疲勞、注意の轉換、輕微な病的狀態の副作用から誘導された『放心』(Zerstreutheit)として分類されて來た。しかし分析的研究はこれらの誘導因子が單に助勢的價値を持つに止り、なくてもすむものだといふことを確實に示してゐる。間違ひは完全に心理的現象であつて、何時でも意義と傾向とを持つてゐる。それは其都度の心理學的境遇の爲に他に表現の道を見出せない一定の意圖から生ずるのである。これらの境遇とは通常心理的衝突のそれであつて、この衝突の結果下部の傾向は直接表現の道を絶たれ、間接的な道を求める。間違ひをした人は之を認めることもあるし見のがすこともあり、又その下に抑壓されてゐる傾向に氣づくことがあるかも知れないが、然しこの間違ひがこの傾向の所作だとは通常分析しなければ解らない。間違ひの分析は屢々極めて容易に且つ迅速に行はれる。失策に注意深くなれば、次の場合に何故そのやうな失策をしたかの説明がつくやうになる。

間違ひは分析的見解の正しさを確信したい人にとつて最も適當な材料である。私は最初一九〇四年に刊行した小著で多數の斯かる例とその解釋とを述べたが、この集成はそれ以來他の觀察者の多數の寄與によつて豐富にすることが出來た。*

* Zur Psychopathologie des Alltagslebens. 〔10. Aufl. 1924.〕 尙メエデル、ブリル、ジオンズ、ランクその他の研究參照。

その際必要な目的を抑壓して、間違ひによりて表現するを喜ぶ動機の中最も夥しいのは不快の回避である。人は密かに恨んでゐる人の名を慢性的に忘れ、また或意圖を結局嫌々ながら遂行する——例へば慣習に强制されて——場合にその意圖を遂行することを忘れる。或人と仲が惡い場合、その人を憶え出させる物——例へばその人から贈られたので——を紛失する。またその時の旅行が厭で何處か外に止つてゐたい場合には、列車に乘込む時に間違へる。不快回避の動機が最も明白に示されるのは印象及び經驗の忘却の場合であるが、これは精神分析の始まる以前既に多くの著者が認めてゐたものである。記憶は偏頗なもので、苦痛の感情が附帶するすべての印象を再現させまいとする。尤もこの傾向が何時でも實現され得るとは限らない。

他の場合間違ひの分析は、私達が轉移と呼ぶ一過程の混入によつて、複雜となり解決が困難となる。例へば人は何ら非難の打所のない人の名前を忘却するが、分析はこの名前が、之と同一の或は類似した名前の所有者で、私達の嫌惡を招いてゐる人を想起させるのだといふことを敎示す

る。この關聯のお蔭で何も罪のない人の名前が忘却されたので、忘却しようとの意圖がある聯想路に沿うて轉移されたのである。

しかし不快を避けようとの意圖だけが間違ひを通して實現される唯一の意圖ではない。分析は多くの場合に於て、特定境遇の下に抑壓され、言はば背後から障礙として表現せざるを得ぬ他の傾向を暴露した。斯くして言ひ違ひは屢々相手に祕密にしておくべき意見を裏切る。大詩人はこの意味に於ける言ひ違ひを理解して、その作品中に使用した貴重な物品の紛失は屢々差迫る不幸を避ける爲の犧牲行爲であつて、他の多くの迷信も間違ひとして教養ある人々の間に行はれてゐる。物品の置き違ひは通常除去そのものに外ならず、物品の毀損はもつと良いのと取換へるのを必要とさせる爲に一見偶然らしく企てられる。

間違ひの精神分析的解釋は、觀察の的たる現象が微々たるものであるに拘らず、世界觀の變改を伴ふものである。私達は正常人が思ひの外屢々相反的傾向に動かされてゐることを發見する。私達が『偶然的』と呼んでゐた現象は著しい限局を蒙る。物品の紛失が概ね人生の偶然事から離れ、不器用さが祕密な計畫の虚託となつたことは殆ど慰安とも言ふべきである。尙大切な事は、

私達が全然偶然に歸着させる重大な災禍が分析の結果、たとひ明瞭に自白されなくても、とに角自己自身の意志が其愛に加つてゐたと知れることである。横死と自殺とを區別するのは實際の所非常に困難だが、この區別は分析的觀察によつて一層疑はしくなる。

間違ひの說明の理論的價値が解決の容易さと正常人におけるこの現象の生起の頻繁さとに依存するとすれば、精神分析のこれらの成果は健康人の精神生活に起るもう一つの現象に比してその意義に於て遙かに劣る。その一の現象と言ふのは、夢の解釋のことだが、實に之によりて精神分析は官僚的科學と對立し始めたのである。醫學的硏究は夢を無意味無價値な純粹の肉體的現象だと說明し、睡眠狀態に沈下した精神器官が部分的覺醒を强制する肉體的刺戟によつて表現させられるのだと言ふ。精神分析は、夢を意味と意圖を持ち、個人の精神生活に於て一地位を占め、斯くして夢の怪奇さ、無聯絡性、及び荒唐さを超越する心理的行爲にまで高めた。肉體的刺戟は夢形成に際して加工される材料の役を演ずるに過ぎぬ。夢のこの二つの解釋の間には如何なる仲介もない。生理學的見解の誤謬はその無効さが證明してゐるが、之に反して分析的見解は數千の夢を有意味に飜譯し、之を深奥の精神生活の認識に利用したと言へるのである。

私は「夢判斷」といふ面白い題目を一九〇〇年の著書で取扱ひ、その後精神分析の殆ど全ての協力者の寄與によつてその中に述べられた學說が確證され促進されたのを見て喜んだ。夢判斷は精神分析の基礎であつて、その成果は心理學に對する精神分析の最も重要な寄與を表示するものだ、とは一般の贊同を得て主張出來ることとである。

* Die Traumdeutung. 〔7. Aufl. 1922.〕。外に小著、Über den Traum 〔3. Aufl. 1921.〕。尙、ランク、シュデエケル、ジョオンズ、ジルベレル、ブリル、メエデル、アブラハム、フエレンチその他の著作。

私は玆では夢の解釋に到達する技術を具陳することも出來なければ、夢の精神分析的改作の導く結果を基礎づけることも出來ない。ただ數種の新概念の建設、成果の傳達、及び正常心理學に對するその意義の强調を說くに止める。

精神分析は次のことを敎へる。卽ち、あらゆる夢は意味を持つてをり、その奇怪さはその意味の表現の歪みから生じ、その荒唐さは故意的で侮蔑、嘲笑及び矛盾を表現し、その無聯絡性は解釋には關係がない。私達が覺めてから後まで憶えてゐる夢は、顯在內容とも稱すべきである。解釋の仕事によつて、人は顯在內容の背後に隱れ、之を通して顯現する潛在的な夢思想に到達する

ことが出來る。この潜在的な夢思想はもはや奇怪でも荒唐でも無聯絡でもなく、覺醒思想の重要成分である。潜在的夢思想を顯在的夢內容に變化させる過程は夢の仕事と稱せられるが、これは歪みを生じさせてその結果夢內容に於ける夢思想はもはや認識出來なくなつてくる。

夢の仕事はこれまで心理學に知られてゐなかつた心理學的過程である。それは二つの點で私達の興味を惹く。第一に、それは私達が覺醒思想中に殆ど發見しない或は單に所謂思考缺陷の基礎としてのみ認める、壓縮（表象の）又は轉移（一表象から他への心理的アクセントの）のやうな新現象を示す。第二に、それは私達の意識的認識に隱されてゐる精神生活內の或活動を推測させる。私達の內には檢閱官、法廷、があつて、一表象が浮び出て意識に達しても良いか否かを決定し、不快を製したり再製したりする傾向のあるものは力の及ぶ限り容赦なく排斥する。私達は茲で、不快な記憶を避けようとするこの傾向についても、精神生活の諸傾向間の衝突についても、間違ひの分析によつて諸々の暗示を得たことを想起する。

夢の仕事の研究は精神生活についてのある見解を私達に强ひるが、この見解こそ心理學最大の難問を解決するものだと思はれる。夢の仕事は私達に、意識と結びついてゐるものよりも包括的

で有意義である無意識的心理活動を假定させる。(これについては精神分析の哲學的興味を扱ふ時に再述する)。それは種々の事件や系統に於ける心理的器官の組織を行はしめ、且つ無意識的精神活動の組織の中には意識内に認識されるのとは全然異つた過程の存在することを示すものである。

夢の仕事の機能は何時も睡眠を續けさせることのみである。「夢は眠の番人だ。」夢思想そのものも多種多樣な精神的機能に役立つのであらう。夢の仕事は夢思想から出現した願望を幻覺的に實現させることを以てその任務として居る。

夢の精神分析的研究は今まで推量もされなかつた、奥祕心理學を初めて洞察させたと言へよう。この新見解に追隨し得る爲には、正常心理學は根本から改造されなければならぬ。

* この心理的題目を解剖學的位置或は組織學的分類に關係さることは當時の精神分析が拒絕した所であつた。

この叙述内に夢判斷の心理學的興味を包攝することは全然不可能である。私達はただ夢は意味を持つてをり、心理學の對象であることを高唱するのを目的としてゐることを忘れまい。そして

心理學の新獲得物を病理學の領域に應用しようではないか。
夢と間違ひとから推理された心理學的新現象は、もしも私達がその價値を否その存在をさへ信ずべきであるならば、他の現象の説明にも適用されなければならぬ。そして今や精神分析は實際に、私達が各々の正常現象の分析を通して得た所の、無意識的精神活動、檢閲官及び拒絶、歪み及び補充構成などの假定は一聯の病理學的現象の最初の理解を可能ならしめ、言はば神經症心理學のあらゆる謎の鍵を與へたのである。斯くして夢は凡ての精神病理學的構造の正常的原型となつた。誰でも夢を了解し得る人は、また神經諸症と精神病との心理的機制を洞察することが出來る。
精神分析は夢から出發したその研究を通して、一歩一歩不斷に前進して神經症心理學を建設すべき位置に置かれてゐる。しかし私達が今追求してゐる心理學的興味はこの大關係の二成分のみを特に詳しく取扱ふやう要求する――卽ち、人が生理學的に説明しなければならぬと信じてゐた多數の病理學的現象が心理的行爲であり、異常的結果を生起させる過程は心理的原動力に還元出來るといふことの證據を要求する。

先づ第一の主張を數種の例で說明してみよう。ヒステリー發作は昔から增大する昂奮の徵候だと認められ、感情の勃發と同一視されて來た。シヤルコーはその現象形態の多樣性を記述的公式の內に拘束しようと努め、ジヤネエはこの發作の背後に潛む無意識的表象を認めたが、精神分析はそれらが經驗し考案した光景の模擬的演出で、患者の空想を無意識的に活動させることを立證した。この身振りは演ぜられた行爲の壓縮や歪みの爲に、觀察者に見透しがつかなくなる。その他ヒステリー患者の凡ての所謂永續的徵候もまた之と同一の見地から觀察することが出來るが、それらは全然空想の模擬的或は幻覺的演出であつて、患者の感情生活を無意識的に支配し、密かに抑壓された願望の充足を意味するものである。これらの徵候の苦痛性は、患者の精神生活が斯かる無意識的願望興奮の必然な鬪爭によつて妨害された時の、內部的衝突に起因する。

他の神經症的昂奮、强迫神經症においては、患者は苦しげな一見無意味な儀式に固執し、その儀式は洗濯とか着衣とかいふ無頓着な動作の反復や律動化、又は不合理な規則の遂行、謎のやうな禁令の嚴守となつて現れる。すべてこれらの强迫動作が、その中の最も目立たない微々たるものでさへも、如何に有意味であるか、如何に生命の衝突、誘惑と道德的阻止との間の鬪爭、妨害

された願望そのもの、刑罰と悔恨をそれらに無關係な材料に反映させてゐるか、を證明し得たのは正に精神分析の功績であつた。同じ病の他の形態に於ては、患者は强迫觀念そのものの內容からは說明出來ない種類と强度との感情を具へ、その內容が患者を强制する苦しい表象、强迫觀念、に惱む。この場合分析的研究は、これらの感情は少くとも心理的現實性を根柢に有してゐる非難に相應してゐるから正しいのだ、いふことを示した。けれどもこれらの感情に結びついてゐる表象はもう早最初のままでなく、何か排除されたものの轉移（補充、置換）を通じてこの結合に入つたのである。これらの轉移の還元（退行作用）は排除された觀念の認識への道を開き、感情と表象との結合が全然適當であることを表示する。

他の神經症、不治の早發性癡呆（Paraphrenie, Schizophrenie）の場合には、その最惡の結果として患者は全然無感動となつてしまふやうに見えるが、屢々唯一の行爲としてステレオタイプと呼ばれる或單調な反復的運動、及び身振りが殘つてゐることがある。斯かる殘留物の分析的研究（ユングによる）はそれが、嘗て患者を支配してゐた願望衝突に表現の道を供してゐた意味深い身振的行爲の殘留物であることを明かにした。この患者の最も馬鹿げた談話も姿勢も擧止も、精

神分析的假定を適用して以來、精神生活の關係に於ける、領解と脈絡とを有するやうになつた。譫妄狀態や幻覺や、樣々な精神病者の錯亂狀態についても同じことである。今まで單に氣まぐれが支配してゐるのだと思はれてゐた所の凡ての場合に於て、精神分析は、法則、順序及び關係を指摘し、研究が不完全な場合には、少なくともそれ等を推定した。しかし諸々の心理的疾病形態は根柢に於て同一であり、且つ心理學的概念で把握され得る過程の結果である。到る處に、旣に夢形成に際して發見された心理的衝突、他の精神力の爲に無意識界に押しやられた衝動興奮の排除、排除された力の反動形成、及び排除されたが未だその全力を奪はれてゐない衝動の補充形成、が活動してゐる。この過程の到る處に、夢以來知られてゐる壓縮及び轉移の過程が出現してゐる。精神病的臨床診斷に際して觀察される疾病形態の多樣性は、他の二つの多樣性に依存する――卽ち、排除に服する心理的機制の多樣性と、排除された興奮に對して補充形成への打開を可能ならしめる進化史的傾向の多樣性とに依存する。

精神病學的問題の大部分は、その解釋の爲に精神分析によつて心理學的に委ねられるものである。だが、分析は精神障礙の純粹な心理學的見解を追求したり辯護したりすると想像するのは、

大變な誤謬で、精神病學の他の半分の仕事は心的器官に及ぼす有機的因子（機械的、毒素的、感染的）の影響をその內容としてゐることは疑へない。精神障礙の病源學に於ては精神分析は未だ曾て、その中最も輕微な神經諸症についてさへも、純粹な心理學的起原を要求したことはなく、却つてその起原を、後に說くやうな明白な有機的成分の精神生活に及ぼす影響中に求めるのである。

心理學一般に有意義となるべき精神分析の詳細な成果は餘りに多くて、茲で立證することは出來ない。私はただ二つの點だけに觸れておく。卽ち、精神分析が明確に精神生活の最高位を感情過程に與へること、正常人に於ける知力の感情的混亂と眩惑とが病人に於けると等しく、案外にも大きいといふことである。

二　非心理學的科學に對する精神分析の興味

A　言語學的興味

精神分析に對する言語學者の興味を求めるに當つて、私は普通の語の意味を少しく變更して用ひることにする。茲で言語といふのは、言葉による思考の表現のみでなく、身振語及びその他の例へば書寫の如き、精神活動のあらゆる表現を意味してゐると御承知願ひたい。さうすれば、精神分析の解釋は先づ第一に未知の表現様式を私達の思考に慣れ親んだ様式へと飜譯することだと言へる。私達が夢を判斷する場合には、ただ或思想内容（潛在的夢思想）を『夢の言語』から覺醒生活のそれへと飜譯するだけである。斯くして私達はこの夢の言語の獨自性を知り、それが古昔の表現系統に屬してゐるのだといふ印象を得るやうになる。例へば、夢の言語においては否定は特に表示されたことがない。相反するものが相竝んで夢の内容中に顯現し、同一要素によつて

演出される。換言すれば、夢の言語における概念はなほ未だ抗爭的で、相反する意味を包藏してゐるが、言語學者の假說によれば最古の歷史的言語も亦さうであつた。[*] 夢の言語のもう一つの異樣な性質は象徵を頻繁に使用することで、これはある程度までは個人的聯想から獨立した夢の內容の飜譯である。象徵の本質はまだ明白でない。が、相似を基礎とする置換及び比較は一部分明かとなつてをり、また他の象徵部分に於ては比較し得べき推量物が私達の意識的知識に缺けてゐる。この象徵は言語進化と概念形成との最古の段階から發生したに違ひない。夢の中で直接的にでなく象徵的に演出されるのは主に生殖器と生殖機能とである。言語學者ハンス・シュペルベル(Hans Sperber) は、最初生殖活動を意味してゐた言葉が、斯樣な比較を基礎として豐富な意義變化に達したことを最近に證明した。[**]

* Abel, Über den Gegensinn der Urworte. を參照せよ。その短評は „Jahrbuch für psychoanalytische und psychopathologische Forschungen," II. Bd., 1910 に揭載。

** Über den Einfluss sexueller Momente auf Entstehung und Entwicklung der Sprache" (Imago I, 1912).

もしも私達が夢の演出手段は主として幻像であつて言葉ではないと考へるならば、夢を言語と比較するよりも文字體系と比較する方が適當だと思はれるであらう。實際夢判斷はエジプト文字のやうな古い象形文字の讀解と似てゐるのである。後者の場合と同じく前者の場合にでも、解釋やそれぞれの讀解に用ひられず、ただ指標として他の要素の了解に役立つべき要素がある。多樣な夢要素の多義性も、結合によつて補足さるべき諸關係の表現も、この古い文字體系中にその符合物を見出す。夢の演出に就ての斯かる見解がまだ發達してゐないとすれば、それは言語學者が一題目に近づいて行く時の視點と知識とが精神分析學者に全然缺けてゐるといふ事情に歸せなければならない。

夢の言語は無意識的精神活動の表現方法だと言へよう。けれども無意識者は一の方言以上を語るものである。神經症の一形態を特徴づけて他と別つ種々な心理學的條件の下では、無意識的精神昂奮の表現も亦不斷に變動する。ヒステリーの身振語が大體夢、幻想、その他の比喩言語と關聯するに反して、私達が一系列の下に理解し相互に關係せしめ得る强迫神經症及び Paraphrenien（早發性癡呆及び偏執狂）の思考言語には特別なイヂオム的な形態が生ずる。例へば、ヒステリ

一の女が嘔吐によつて表示することは、強迫症患者においては傳染に對する慘ましい保護規定となつて現れ、Paraphreniker においては毒を盛られるといふ歎き、或は疑となつて現れる。玆で多様な表現を見出すものは、無意識中に拒絶された受胎の願望、それに對する各患者の防衛である。

B　哲學的興味

哲學が心理學の上に立てられてゐる限り、それは心理學に對する精神分析の寄與を十分に評價し、特殊科學のすべての著しい進歩の場合に示したと同樣に、私達の知識のこの新領域にも反應せざるを得ないであらう。殊に無意識的精神活動の建設は、哲學がそれに味方し一致した場合には、精神的なものと物質的なものとの間の關係についての假定を新見解に適應するやうに修正さるに違ひない。勿論哲學は幾度となく無意識の問題を取扱つたけれども、その代表者は——小數の例外を除いては——常に二つの立場の中の一を執つた。彼等は意識されぬものを、その精神的なるものに對する關係が明かでない何か神祕的なもの、把握出來ぬもの、呈示出來ぬものとす

るか、或は意識されるものと精神的なものとを同一視し、この定義から、意識されぬものは精神的なものでなく從つて心理學の對象とはならないと結論した。卽ち、彼等は無意識的精神活動の現象を知らないで、つまり、それが如何に意識的現象に近いか、如何なる點でこれと區別されるかを推量せずに、意識されぬものを判斷したのだ。尤もこの認識に反して、意識的なものと心理的なものとを同一視し、從つて無意識的なものが心理的性質を帶びてゐることを否定する人に對しては、斯かる差別が極めて非實際的だと答へる外はない。何故なら、無意識はそれが多くの共通點を有してゐる意識との關係の側から記述し易く、且つその進化を探求し易いに反して、物理的過程の側からそれを試みることは今の所全然不可能であるからである。從つてそれは心理學の對象となつてゐなければならぬ。

また他の方法で哲學は精神分析から刺戟を得ることが出來る。卽ち、哲學は精神分析の對象たり得るのである。哲學の學說と體系とは小數の優れた人々の作るものであるが、學者の人格が哲學程重要な役割を演ずる科學はない。玆に於て始めて精神分析は人格の心理的記述を試みることが出來るやうになる（後述の『社會學的興味』を參照）。それは各個人の前提たる感情的統一——

衝動に依存する錯綜——を私達に教へ、これらの衝動力から出て來る變化と最後の結果との研究に私達を導く。それは人の體質及び經歷と特別な天賦のお蔭で可能にされる傾向との間の關係を暴露する。それは作品の背後に隱れてゐる藝術家の內奥の人格を多少とも確實に解明する。斯くしてまた精神分析は、事實に反して公平且つ論理的な勞作から發生したと稱せられる哲學學說の主觀的個人的動機を示し、批評それ自身にその體系の弱點を敎示する。しかしこの批評を行ふことは精神分析の任務ではない。何となれば一學說の心理學的斷定がその科學的正確さを否定するものではないからである。

C　生物學的興味

精神分析は他の新科學のやうには、知識の進步に興味を抱く人々に歡迎されなかつた。それは長い間傳聞されず、遂に最早等閑に附することが出來なくなつた時には、今まで之を知るの勞を執らなかつた人々から感情的な理由により激しい攻擊を受けた。この敵視は、精神分析が早々から、神經病は性的機能の障礙の表現であり、その故に永い間無視されて來た性的機能を硏究の對

象にすべきであるといふ發見をしたことに起因する。しかし、科學的判斷は感情上の理由に影響さるべきでないと確信する人は誰でも、この研究方向の故に精神分析に、高度の生物學的興味を認容し、それに對する反對そのものをその主張の正しさの證明として利用するであらう。

精神分析は、多數の詩人や哲學者に唱へられ然も科學には認められなかつた性的機能の精神的及び實際的生活に對する意義を詳細な點まで研究し、斯くして性的機能を正當化した。この目的の爲に精神分析は偏狹な性の概念を廣義にしようとし、性の反則（謂はゆる倒錯）と子供の擧動とに注意を拂ふことによつて之を爲し得たのである。子供時代は無性的で、青春期に到つて始めて性的昂奮が突然襲來するといふ主張は最早支持することは出來ない。加之、子供に於ける性的興味と活動とがその凡ゆる時期を通じ且つその最初から存在してゐるといふ觀察は、若し利害と偏見とを脫し得たならば、容易に證明出來ることである。この幼兒期性慾は、子供の性的行爲に對する境界が確實に標示されないといふ事實の爲にその價値を減ずるといふ虞れは決してない。その中には、如何に把捉し難く且つ不道德らしく見えようとも、後に倒錯として正常な性的生活と激しく對立するやうになる凡ての性的活動の萠芽が含まれてゐる。幼兒期の性慾から成人の正

常なそれが一聯の進化過程、複合、分裂及び抑壓、を經て現れ出るのであるが、これは完全に發達し得ることは決してなく、病的狀態に於ける機能の變質への傾向を宿してゐる。

幼兒の性慾は生物學的見解にとつて貴重な二特質を示す。卽ち、身體の或部分――色情帶(erogene Zone)――と結合してゐるやうに思はれる一聯の部分的衝動から成立し、その各々が最初から一對宛の相對物――能動的及び受動的目標を持つた衝動――として出現する複合を示してゐる。後の性慾狀態において單に愛人の生殖器のみでなく、その全肉體が性的對象となると同じく、幼年時代の最初から生殖器のみならず他の多くの肉體部分も亦性的昂奮の源泉となり、適當な刺戟によつて性的快感を引き起す。それと密接に關聯して幼兒の性慾の第二の特質は、自己保存に役立つ榮養攝取や排泄の機能、また恐らくは筋肉刺戟や感覺活動に依存してゐる。

精神分析の助けを借りて成人の性慾を研究し、斯くして得られた洞察の光に照らして子供の生活を觀察すれば、性慾は單に消化や呼吸と同位に立ち生殖に役立つ機能たるのみでなく、もつと獨立的なもので、他のすべての個人活動と對立し、複雜な束縛の多い發達を通して個人生活に入りこむものだといふことが解る。この性的傾向の利益と自己保存のそれとが一致しないといふ、

理論的に考へ得べき場合は、神經諸症中に實現されてゐるやうに思はれる。何故ならば、精神分析が神經諸症の本質について與へる決定的公式は、神經諸症を生起させる根原的葛藤は自我保存の衝動と性的衝動との間のそれであると敎へるからである。神經諸症は、性慾を壓服しようとする自我の計畫が失敗して、自我が却つて多少とも性慾に屈服した場合に起る。

私達が精神分析的作業に從事してゐる間生物學的見地から遠ざかり、發見的目的の爲に之を使用しなかつたのは、私達の眼前の精神分析的事實の判斷に當つて誤謬に陷るまいと欲したからであつた。しかし、その作業が完成したら生物學との連絡を計るべきだが、今の所一二の本質的な點でそれを成就することが出來たら滿足であらう。神經諸症の源泉たる自我衝動と性的衝動との對立は、個體保存の衝動と種の保存の衝動との對立となつて生物學的領域に移される。生物學には不滅な胚種原形質といふ廣大な表象があり、單一の死滅的個體は繼續的に發達した器官として之に依存するが、この見地に立つてのみ私達は個體の生理學と心理學とに於ける性的衝動の役割りを正當に理解することが出來るのである。

生物學的用語と見地とを精神分析的勞作に於ける主位に立たせまいとするあらゆる努力にも拘

らず、私達は研究對象の記述にそれらを使用せざるを得ない。心理學的及び生物學的見解の境界概念として『衝動』なる語を避けることは出來ず、また性の差異は嚴密に言へば何ら特別な精神的性格を要求しないに拘らず、精神的特質や傾向を形容するのに『男性的』とか『女性的』とかの語を用ひる。私達が生活中に男性的、或は女性的と呼ぶ所のものは、心理學的觀察によれば、能動と受動との性格、卽ち衝動そのものからでなく衝動の目標から出て來る特質に歸着する。正規的な社會に於ては精神生活の斯かる『能動的』及び『受動的』衝動は、精神分析の臨床的前提たる個人の兩性的性慾に反映する。

以上の約言によりて、精神分析が如何に豐富な仲介物を生物學と心理學との間に産出するかについて注意を引くいとが出來たならば私は滿足である。

D　進化論的興味

心理學的現象の分析が凡て精神分析の名に價するものではない。後者は複合現象を單一現象に分解する。以上のことを意味し、心理的形成物をそれに先行し、且つそれの源となつた他の形成

物へと還元することである。醫術的精神分析的療法は、もしもその發生と發達とを知り得なければ、如何なる疾患徴候をも除去出來ない。それ故に精神分析は先づ第一に進化過程を知らうとする。それは先づ神經症的徴候の起原を發見し、次いで他の心理現象を研究してその發生的心理學を建設しようと努めた。

精神分析は成人の精神生活と子供のそれとを區別する爲に、『子供は成人の父である』といふ句を眞面目に受取らざるを得なかつた。それは成人の心理と共に幼兒の心理の連續性を研究したのであるが、一方ではこの途上に出現する變化や轉換にも注意したのである。私達多くは幼年時代の記憶を大部分喪失し、その中のほんの斷片だけが想出せるのみであるが、精神分析はこの缺陷を補充し、幼年時代の健忘を除去したと主張することが出來る(『教育學的興味』の項參照)。幼兒の精神生活を探求して行く間に數個の注目すべき發見物が現れた。そして、子供時代、殊に幼兒時代の印象が如何に後年の全生涯に甚だしい影響を及ぼすか、といふ昔から屢々推量させて來た事實を確證した。玆に於て吾人は、後年の記憶から喪失するのは正にこれらの最も貴重な印象である、といふ心理學的なパラドツクス――尤も精神分析的見解に從へばこれは少しもパラ

ドックスではない――に衝き當る。だが精神分析はこれら幼年時代の經驗の表象性と不磨滅性を正に性的生活の爲に確立したのである。『人は何時も初戀に立歸る』は月並な眞理である。成人の戀愛生活の多くの謎は戀愛に於ける幼兒的動機を强調して始めて解決することが出來る。この作用の理論の證據として、最初の小兒的經驗は單に偶然として起るばかりでなく、體質と共に賦與された基礎的衝動の活動に適應するといふ事實が觀察される。

尙一つの驚くべき發見は、すべての後年の發達にも拘らず、幼兒の精神的構造の中何一つ消滅するものはないといふことである。子供のすべての願望、衝動昂奮、反動方法、歪みは成人中にも尙歷として存在し、適當な狀況の下に再び出現することが出來る。それらは破壞されたのではなくて、ただ蔽はれたばかりであると精神分析的心理學は斷言しなければならぬ。それらは精神的過去の性質となつて、歷史的過去のやうに子孫によつて消滅させられることはなく、潛在的にせよ同時的にせよ、自己が產出したものと竝存し續けるのである。この主張の證明は、正常人の夢が夜每に子供時代を再經驗し、その全精神生活を、幼兒的段階に引戻すといふ事實中に見出せる。これと同じく精神的發育不全への回歸（退行）は神經病者や精神病者にも見受けられるが、

彼等の特質は大部分は心理的擬古態として記述することが出來る。精神生活の中に殘つてゐる幼兒的なものの强さは疾病の質の尺度であつて、發育阻止の表現である。幼兒的殘物は心理的材料中の使用に堪へない拒絶されたものとして無意識の核を形成してゐるが、私達は患者の精神史中に、如何にこの拒絶的な力に阻止されてゐる無意識が活動の機會を待伏せてゐるか、また後年の高級な心理的構造が現實世界の困難に屈服する時如何にその機會を利用するか、を洞察することが出來ると信ずる。

最近精神分析學者は『個體發生は系統發生の反復である』との命題が精神生活にも適用出來る筈だと考へ始めたが、* この點からも精神分析の興味が新たに擴張されるであらう。

* アブラハム、シユピイルライン、ユング。

E 文化史的興味

個人の子供時代と民族の古代史との比較はまだ開始されたばかりであるに拘らず、既に多方面に亙つて實を結んだ。その場合精神分析的思考方法は、研究の新器具として用ひられたのである

が、民族心理學へのその前提の應用は新問題を提起させ、舊來の問題を新見地から觀察させ、またその解決に寄與したのであつた。

先づ第一に、夢の場合に成功した精神分析的見解を、神話や童話のやうな民族空想の產物に應用することは全然可能なやうに思はれる。* この空想を解釋する仕事は以前からは存在してゐて、人はその『祕密な意味』を推察し、その意味を隱してゐる修正や變形に注意してゐた。精神分析はこの歪みの經路を推測し得る技術を夢や神經症の研究から運んで來た。そして神話の原始的な意味を變形させる隱れた動機を多くの場合に發見することが出來た。それは神話形成への最初の原動力を、自然現象の說明や意味不明となつた禮拜規定や儀式の解釋の爲の理論的必要の中に見出すことが出來ないで、之を夢や徵候形成の基礎として證明した心理的『錯綜』、感情的傾向の中に求めた。

* アブラハム、ランク、ユング。

その見地、前提、及び知識の應用によつて精神分析はまた文化的諸制度、宗教、道德、法律、哲學の起原に新光明を投ずることが出來た。* それはまた斯かる形成物の誘因を發生させた原始的

な心理學的狀況を探求してゐる中に、心理學的傳統を基礎とする多くの說明を斥け、より深遠な豐富な洞察を以て之に代へることが出來るやうになつた。

* Jung, Wandlungen und Symbole der Libido, 1912. 及び Freud, Über einstimmungen im Seelenleben der Wilden und der Neurotiker. Imago, I u. II. 參照。〔Totem und Tabu.〕

精神分析は兩方に對して同一の力學的源泉を要求することによつて、個人と社會とのすべての心理的活動中に內部的關係を作出した。それは精神的機制の主要機能は、生物を欲求がその中に作つた緊張關係から解放することである、といふ基礎原理から出發した。この欲求の一部分は人間が外界から獲得する滿足によつて達成されるが、この目的の爲には現實世界の克服が必要となる。この欲求の他の部分——その中にはある感情的傾向も含まつてゐる——は現實世界によつて規則的に拒絕させる。この滿足されぬ傾向に他の種の充足の道を與へようとする活動が其處から生じて來る。すべての文化史はただ、現實世界の承認と拒絕との變化的且つ技術的進步によつて變改される條件の下に、人間がその充足されざる願望の爲に如何なる道を切り開いたか、といふことを示すのみである。

原始民族の研究は人間が最初子供らしい全能崇拜に囚はれてゐたことを示し、* 多數の精神的形象はこの全能の亂暴を阻止しようとする努力であり、彼らがそれを支配出來ず、また自己の欲望充足の爲に利用することが出來ない限り、これで現實世界が感性生活に及ぼす影響を避けようとしたのであると了解させる。不快回避の原理はそれが外界適應のより優れた原理に取つて代られるまで、永い間人間の行動を支配して來た。人間の不斷の世界克服と竝行して、世界觀は段々と原始の全能崇拜から脫し萬有神論的段階から宗教的のそれを經て、遂に科學的段階にまで到達した。この過程中神話、宗教、及び道德は願望不充足を補足しようとする試みとして現れる。

* Ferenczi, Entwicklungsstufen des Wirklichkeitssinnes. Intern. Zeitschr. f. ärztl. Psychoanalyse I, 1913. ——Freud, Animismus, Magie und Allmacht der Gedanken. Imago, II, 1913. 〔Totem und Tabu.〕

個人の神經症についての知識は大きな社會的制度の理解に非常に役立つた。何故ならば神經症は、制度を通じて社會的に解決されるべき願望補充の問題を個人的に解決しようとする企てだからである。社會的因子の減退及び性的因子の增進は、この心理學的任務の神經症的解決を戯畫化

しこの重要な問題についての私達の説明以外に役に立たせないやうにする。

F 美學的興味

藝術と藝術家とについての或種の問題に對しては精神分析的見解は滿足な結果を與へるが、他の種の問題に對しては全然役に立たぬ。精神分析は藝術中に、先づ第一に藝術家自身の次にその結果として聽衆或は觀衆の、滿足せられざる願望の充足を目的とする活動が存在することを認識する。藝術の衝動力は、個人を神經症に追ひやり、社會に制度を建設させるのと同一な葛藤である。藝術家の創造能力は何處から來るか、は心理學の問題ではない。藝術家は先づ自己解放を求め、次に作品を媒介として之を同じやうな願望抑制に惱んでゐる他者に及ぼす。* 彼は自己の個人的な願望空想を既に實現されたものとして表示するが、これは願望の衝突を緩和し個人的起原を隱す變形を通過して始めて藝術作品となり、且つ美的規定の嚴守によつて始めて快感を與へる。藝術的快感の顯在部分の傍に、如何に有力であつても潛在的であり然も衝動解放の隱れた源泉から出て來る部分が存在することを證明するのは、精神分析にとつては決して困難ではない。藝術

家の子供時代の印象及び經歷とこれらに對する反動としての作品との間の關係は精神分析を最も惹きつける對象である。[**]

* O. Rank, Der Künstler, Wien 1907. 參照。

** O. Rank, Das Inzestmotiv in Dichtung und Sage. Wien 1912. を見よ。また美學的問題への適用については、Freud, Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten, 1905. を參照。

藝術創作と藝術鑑賞との多くの問題は尙精神分析的認識の光に照らされ、願望補充の複雜な構造中のその地位を指示されることを待つてゐる。習俗的に認容された現實――その內部で象徵と補充形成とは藝術的幻想のお蔭で現實的感情を誘起することが出來る――として、藝術は願望拒絕的現實界と願望充足的空想界との間の中間世界、原始人の全能崇拜的傾向がまだ勢力を失はない領域、を形成してゐる。

G 社會學的興味

精神分析は最初個人心理を對象としてゐたが、研究の進むに從つて個人對社會の關係の感情的

基礎を無視しておく譯に行かなくなつた。それは社會的感情が規則的に性慾から寄與を受けることと、後者の强調と排除とは一團の精神錯亂の特徵となることを發見した。それは、一般に個人を社會から引離し、昔時の僧院をして病的孤獨となさしむる神經症の非社會性を知つた。多くの神經病者を支配してゐる强い責任感は神經症的不安の社會的修正である。

他方に精神分析は神經症の原因となる社會的關係と要求との大部を知つた。衝動限局と衝動排除とが自我から誘致する力は本質的には社會の文化的要求に對する從順性から發生するものである。神經症へと導くことが當然であるやうな體質と子供時代の經驗とがあるに拘らずさうしない場合は、斯かる從順性が存在しないか、或は斯かる社會的要求が設定されてゐなかつた爲と思はれる。神經過敏の增進は文化の產物だといふ古來の言には少くとも事實の半分が籠つてゐる。敎育と實例とは文化的要求を靑少年に敎へ込むものであるが、兩者が存在しないのに衝動排除の作用が行はれるものは原始的要求が遂に人間の有機的遺產となつたといふ假定を證明するものである。自發的衝動排除を行ふ子供は、それだけではただ文化史の一斷片を反復してゐるに過ぎぬ。今日內部的阻止である所のものは曾ては外部的な、恐らくは時代の必要によつて禁令された、阻

止であつた。故に今日の成人に對しては外部的な文化的要求であるものも、將來には內部的な排除素因となるであらう。

H 敎育學的興味

精神分析に對する敎育學の最大の興味は旣に確證された一命題に支持されてゐる。卽ち、子供の精神生活の中に移入し得る者のみが敎育家となることが出來るといふ命題である。私達成人は自己の子供時代を最早理解しないから子供を理解することが出來ない。私達の子供時代の健忘は如何に私達がそれと疎遠になつてゐるかの證據である。精神分析は子供の願望、思考形成、及び進化過程を發見した。之に反して以前のすべての努力は不完全で誤謬に滿ちてゐた、といふのはそれらが貴重な性慾的因子の肉體的精神的顯現を全然無視してゐたからである。子供時代についての精神分析の驚くべき知識——エヂプス錯綜、自己愛(ナルチスムス)、倒錯、肛門性慾、性的好奇心についての——は私達成人の精神生活、評價、思考過程と正常兒童のそれとの間の距離を無くしてしまつた。

もしも教師が精神分析の成果を信じたならば、彼らは子供の發達の段階と融和するのが容易となり、子供の社會的に不必要な、或は倒錯した衝動興奮を、過當に評價する危險を免れるであらう。もしも彼らが强制手段は屢々惡德の放任よりも惡結果を生むといふことを知つたならば、これらの衝動を暴力で抑壓することを避けるであらう。外部から子供の强力な衝動を暴力的に抑壓しようとする企ては決してそれらを消滅させたり克服させたりするものでなく、却つて後年の神經症への傾向を作る排除作用を助けるものである。精神分析は屢々無目的無洞察でただ嚴格なばかりの敎育が如何に神經症の起因となるか、また無理强ひの正常性が努力能力と快感能力との如何に多くの損失を犧牲にして得られるものであるか、を觀察する機會を得た。しかしそれはまた子供の非社會的倒錯的衝動が若しも排除されないで所謂昇華によつて最初の目的からより價値ある目的へと指導されたならば、性格形成に如何に貴重な貢獻をすることが出來るかを敎へる。私達の最善の德も反動形成及び昇華として最惡の土臺の上に成長したのである。敎育はこの貴重な力の源を保護し、諸精力が順調に進行する過程を促進するだけに甘んじなければならない。私達が神經病者の個人的豫防法から期待し得ることは、精神分析に啓發された敎育家の心持次第で如何

にでもなるのである（チユウリツヒの牧師オスカア・プフイステルの著作を參照せよ）。

私はこの論文の中で精神分析の範圍、內容、前提、問題、成果を科學的興味を有する公衆に紹介しようとは思はなかつた。ただ、それが如何に多くの知識領域に對して興味があるか、それがそれらの間に如何に豐富な關係を産出し始めてゐるか、を明かにさへすれば私の意圖は達せられたのである。

快感原則の彼岸

定價金壹圓五拾錢

昭和五年九月二日印刷
昭和五年九月五日發行

譯著者　久保良英

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　山本源太郎
東京市牛込區東五軒町四〇

發行所　東京市神田區今川小路二ノ一
アルス
電話九段一二一七五番
一二一七六番
振替東京二四八八八番

フロイド精神分析大系

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。
譯者は悉く學界の最高權威！現代に於て求め得べき最適者のみであります。

- 第一卷 **ヒステリー**
  ヒステリー研究・ヒステリーの病理
  醫學博士 安田德太郎
- 第二卷 **夢判斷（上）**
  學習院教授 東大講師 新關良三
- 第三卷 **夢判斷（下）**
  學習院教授 東大講師 新關良三
- 第四卷 **日常生活の異常心理**
  東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰
- 第五卷 **戀愛生活の心理**
  リビドー說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理
  醫學士 經濟學士 木村廉吉
- 第六卷 **快感原則の彼岸**
  集團心理・快感原則の彼岸
  廣島文理大教授 文學博士 久保良英
- 第七卷 **精神分析入門（上）**
  醫學博士 安田德太郎
- 第八卷 **精神分析入門（下）**
  醫學博士 安田德太郎
- 第九卷 **洒落の精神分析**
  醫學博士 正木不如丘
- 第十卷 **藝術の分析**
  レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ
  慶大教授 茅野蕭々
- 第十一卷 **トーテムとタブー**
  トーテムとタブウ・精神分析運動史
  大阪商大講師 關榮吉
- 第十二卷 **幻想の未來**
  幻想の未來・素人分析・自傳
  帝大助教授 木村謹治

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解譯される。心の不思議、性の秘密を知らんとする人は讀め！

赤刷は既刊

豫約に非ず 選擇隨意

フロ
精神
大
快感原則

快感原則
彼岸

FREUD

フロイド
精神分析大系
VOL.VI

快感原則の彼岸
フロイド
精神分析大系
快感原則の彼岸
フロイド
著
久保良英
訳
ARS